
ハーフエルフの皇太子

ジョン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハーフェルフの皇太子

【Nコード】

N0725L

【作者名】

ジョン

【あらすじ】

ゲルマニア皇帝とエルフの子供である主人公が原作に介入していくお話。

禁忌の存在の主人公。

ハルケギニアの世界に風を吹かす！！

旅立ち（前書き）

『ゼロの使い魔』の原作が今手元にないので記憶を頼りに書くため、間違いがあるかもしれませんが、ご了承ください。

感想に今後、こうなってほしいというアイデアがありましたら、参考にしたいのでよろしく。

旅立ち

アルビオン サウスゴータ地方 ウエストウッド村

森の出口の前で少年と少女が見つめ合っていた

「本当に一緒に行かないの？」

そう言った男の後ろでくくった髪が、朝日を浴びて反射する。

少年の目の前に立つ少女は

「……………うん」

「孤児院の子供達のことなら、領での生活を保障するし、それに君だって『外の世界を見たい』と言っていたじゃないか」

「……………あなたに迷惑をかけられない」

「……………迷惑じゃないよ」

「私は……………ここでみんなと暮らします」

「そっか……」

二人の間には気まずい空気が流れる

「君の考えは分かった……その気持ちに嘘はないのだね？」

「……うん」

少年の前に立つ少女は迷いながらも頷く。

「……どうして君は泣いているんだ？」

少女は慌てて少年に背を向ける

「な、泣いてなんていません……」

急いで目元の涙を拭くがあふれ出る涙は止まらない。

「あ、あれ、おかしいよ……涙が止まらないよ」

「……」

「か、悲しくなんてないのに……どうして止まらないんだろ？」

少年に背を向けながら少女は言った。

少年はその背中にゆっくりと近づく。

不意に、少女は少年に後ろから抱きしめられた。

「…………え、…えつと…………」

「…………大丈夫…………」

少年は少女を抱きしめながら耳元で囁いた、

「…………私といるとあなたに迷惑をかけてしまいます…………」

「そんなことはないよ」

「でも…………私は…………ハーフエ…………うん!？」

少女は最後までしゃべることができなかった

少女の唇は少年のキスによってふさがれていた

「…………ふうん」

どれだけ時間が経っただろう

ゆっくり、少年は少女から離れる

「…………どうして? 私は…………」

「それ以上言うと、またキスしちゃうよ」

「／／／／／／／／／／／／／／／／」

真っ赤になる少女

「これから、僕はトリスティンに行く」

「……」

「本当は、一緒に来てほしかったけど」

「ごめんなさい……」

「もう一生会えないわけじゃないんだから、そんな悲しい顔をしないで……」

テファ

「……うん」

先ほどと違って、笑顔を浮かべるテファ

「やっぱりテファは泣いた顔より笑った顔の方が可愛いね」

「も、もう……！からかわないですよ……！アレル……！」

「ははは、ごめんなさい」

先ほどとは違う明るくなった二人の顔

「アレル、私はこの村にいます」

笑顔でアレルに言うテファ

「うん 分かった

けど、一生離す気はないからね」

テファを引き寄せアレルは言う

そして、

「テファ・・・行ってきます」

アレルはそう言って、森の出口の前にあらかじめ呼んでいた竜に乗って飛んで行った

「行ってらっしゃい、アレル」

テファはアレルの姿が見えなくなるまで手をふり続けた

テファはアレルの姿が見えなくなってしばらくして、森に戻ろうとした時

「ぎゃっ！...！」

風が吹き、テファがずっとかぶっていた帽子が飛んでしまった

風になびく長く美しい金髪

そして、人より少し長い尖った耳が見えた

旅立ち（後書き）

いかがでしょうか。感想をお待ちしています

トリスティン魔法学院（前書き）

ご意見・ご感想をお待ちしております

トリステイン魔法学院

「あれがトリステイン魔法学校か」

ウエストウッド村から風竜に乗ってアレルは直接トリステインに向かった

王都トリスタニアから馬で2時間ほどの距離にあるここ、トリステイン魔法学院

ここではトリステインの貴族の子息だけではなく、他国からの留学生もくる

特に今年はゲルマニアの大貴族ツェルプストー家とトリステインの大貴族ヴァリエール家の娘が入学する

外国の王族や大貴族の子息・令嬢もこの学院に在学しており、そのため些細なことが戦争の火種になる可能性も孕んでいる

周りには入学手続きをする貴族の子供達の乗る馬車と荷物で門の付近は大混雑している

貴族達は一人で2〜3台馬車を引き連れこの学院に入学してくる

大多数の貴族は見栄を張る

自分がどれだけ財のある貴族かを周りの者に見せつけるために、無

駄に多い荷物を持つてくる

そのあまりの人と荷物の多さにアレルは思わずため息をつく

「あそこの広場に降りてくれるかな」

「クル」

アレルが乗る竜が返事をし、徐々に高度を落とす

「おい、あれ」

一人の貴族が上空から降りてくる風竜に気がつく

先ほどまで騒がしかった貴族達が静かになった

風竜の背からアレルが降りてくる

貴族の子女は思わずため息をつきアレルを見つめた

長く伸びた銀髪をポニーテールにまとめ、大空のような青い瞳、見る者を魅了するその笑顔

貴族の子息は露骨に嫌そうな顔をする（一部顔を赤らめる男もいた）

青年はゆっくりと受付に向かった

「ゲルマニア侯爵家、アレル・ラ・フォン・ランカスターです」と受付の女性に言つと

「ご入学おめでとつございます。トリステイン魔法学院はあなたを歓迎します」

と緑色の長い髪とメガネをかけた女性が青年に笑顔で返事をする

「ああ、ありがとう」とアレルは笑顔で返す

メガネの女性の顔が真っ赤になった

「そ、それでは、学院長がお呼びです。私についてきてください」
ちよつと噛んでしまいなからその女性は言つ

「くすつ、ええ、わかりました」と言つてその女性について行くアレルの背中を貴族の子女は熱い眼差しを向けていた

反対に男は内心「美形死ね」「成り上がりが」「野蛮人が」「はあはあ」？などと陰口を叩いている

「ここが学院長室です」とその女性が言つ

「案内ありがとうございます」とアレルもお礼を言つ。

「い、いえ。貴族の方がそのように平民である私に・・・」

「そんなことはありませんよ。平民だから差別する必要があるので
すか？」

「い、いえ……」

「平民であろうと傭人であろうと皆、生きていますから」

「はあ」

「失礼、あなたのお名前を伺ってもよろしいですか？」

「ロングビルです」

「ロングビルさん案内ありがとうございます。」

ああ、そうそう。ロングビルさん

「はい、何でしょう？」

「いえ、こう呼んだほうがいいかな？ マチルダ」とたん、ロングビル顔に動揺が浮かんだ

「な、何のことでしょう」

「いえ、後でお話したいのでよろしいでしょうか？」

私の部屋にあとで来てくださいね」

「……わかりました」

「では、のちほど」

そう言っつて、アレルは学院長室に入っつて行つた

マチルダ side

「は、なんなんだい、あいつは？」

マチルダは通路を歩きながら、独り言をつぶやいている

「なかなか、いい男だつたけど、なんであたしの本当の名を知つて
いるんだ？」

いや、それ以前にどこかであつたことがあるような

マチルダは歩きながらつぶやく

side out

「失礼します」とノックをし、アレルは学院長室に入った。

「おお、ようこそトリスティンにお越しくささいました。ゲルマニアから長旅でお疲れのところ呼び出してしまい申し訳ない」

と、この学院の学院長であるオールド・オスマンが笑顔で返してくる。

「いえ。快適な旅でしたので問題ありません」

「そつでしような、先ほどはかなり目立っておりましたな、まさか風竜で来るとは」

「ええ、少し寄るところがあったので」

「ほうう」

髭を撫でながらオスマンは思案する

「もしや、女性に逢っていたのかのう？」

なぜか鋭いオスマン

「さあ、どつでしょう。想像にお任せします」

はぐらかすアレル

「ほほほ、若いということの良いの、

わしの若い時も、美しい女性がたくさんいての……」

それからしばらく、オスマンが若い頃の女性関係について延々と聞かされることになるアレル。

「（長〜い）」

ここに呼ばれた理由はまさかオスマンの女性関係について聞かされることなのだろうかと考えながらも、表情は変えずにオスマンの話を聞き流し、適当に相槌を打っていた。

「……それでの、わしには何人か孫がいるんじやが、どづじや、
ミスタ・アレル」

「へ？」

オスマンがアレルに自分の孫について説明し始める

「なかなか出来た子での、バツーなんじやが……」

「（おいおい、まさか……）」

「ミスタ・アレル……わしの孫と見合いせんかのう？」

真剣な顔でアレルに聞いてくるオスマン

「お断りします！……」

「どづしてもかのう？」

「はい……」

「一回逢うだけでも……」

「いぢやびす」

「あ」

「絶対です」

「……………」

学院長室は気まずい空気が流れる……

「お話がそれだけなら、僕はこれで失礼します」

席を立って出て行こうとするアレル

「では、冗談はそれぐらいにしておこうかの」

「（絶対本気だったよこの爺）」

内心ではオスマンを非難しているがおとなしく席に座ったアレル

「いーや、失礼、失礼。なぐに孫との見合いは気が向いたらでいいからの」

「（まだ言うか……！）それで、僕をここに呼んだ本当の理由は何なんですか？」

「うむ。ミスタ・ランカスター、いやこう呼んだ方がいいかな？」

ゲルマニア第一王位継承者 『天帝』のアレル」

「ええ、そうですね」と笑顔で返すアレル

「ふうむ」長いひげをさわりながら

「なにか問題でも？」

「いや、あの『天帝』がそもそも他国の学院に通う理由がわからないのじゃよ

ゲルマニアでも学院があるじゃろ」

トリストイン以外の魔法学院も勿論ある

「簡単なことですよ。ゲルマニアでは私が王族であるという理由で近づく者がいるので他国に留学をしたのです。他国の学院であれば、私も自由に生活できますし」

「なるほどの」

「私がゲルマニア王族であるということは伏せておいてくださいね。ばれるとやっかいなので」

現在、経済的な面でハルケギニア1の国であるゲルマニアの次期皇

帝候補のアレル

そんな、雲の上のような存在のアレルの正体がばれれば、学院は大パニックになる

そんなに身近に王族が、しかも次期皇帝候補がいればその人物に取り入ろうとする人でいっぱいになる

アレルはそれが嫌で他国に留学したのだ

「約束しよう」

オスマンはアレルの正体を口外しないことを約束した

「それと、私自身も父上から命を受けていますので」

「ほう、それはいいたい・・よろしければ教えてもらえんかの？」

アレルはいたずらっ子のような笑顔で

「なに、私にふさわしい女性を探して来るように言われましてね、ふふふ」と笑いながら言う

「ほう、トリステインの女性を生涯の伴侶にということで・・・」

「ええ、そうです（本当はテファですが）」

「しかし、殿下の御目にかかる、女性がいるかどうか・・・」

とオスマンが思う理由は、アレルがとんでもないぐらい美形だからだ

その容姿から女に間違われることもある

「そうですか？私は自分自身が気に入った女性でしたら、貴族だろうと平民だろうと関係はないですし（テファは一応王族だよな）」

さらりと、とんでもない発言をしているアレルにオスマンは驚いていた

平民が、ましてや、貴族でないものが王家に嫁入りすることなど、このハルケギニアでは考えられないからだ。

「いまどき、貴族、平民だという理由で差別する時代はもう終わりですよ。」

我々が着ている服や口にする食べ物を作っているのはいったい誰だと思っっているのですか？平民でしょう。我々王族や貴族は彼ら平民のように服を作ったり、食べ物を作ったりすることが出来ますか？そもそも『魔法を使えるから貴族』という定義は間違っっているのですよ。

貴族から魔法をなくせば何が残りますか？

先祖より受け継がれた『誇り』そんなもので生きていけますか？

トリスティンは弱国と言われるようになったのは、本来、平民を脅威から守る存在である貴族が腐敗し、私腹を肥やす存在になったためでしょう。

自分達は始祖ブリミルから魔法を授かったから、平民より上位の存在であるから、平民は貴族の奴隷・道具でしか見ない貴族達。

彼らに、平民をそのように扱う権利はないのですよ。

自分たちから変わろうとしない者に未来はありません。

勿論全ての貴族が変わるとは思いません。

今の世は、真の貴族は少ない。

貴族は平民から搾取するのではなく、平民を助ける代わりにその平

民から利益の一部を貰う。それこそが貴族としての理想だと僕は考えます。

「

と、貴族を批判するアレル

今ここにトリステインの貴族がいれば間違いなくアレルを非難するだろう

オスマンはアレルに少なからず、恐怖した

「・・・なるほど。ゲルマニアの考えは斬新ですな。

しかし、いくら学院であるとはいえど、ここはトリステイン。そのような発言は感心しませんな」

22

「まあ、あなたたちトリステインの人から見れば私なんて所詮成り上がりの国の者としか見ないのでしょうが」

「いえ、そんなことは・・・」

「まっ、私のことは黙っていてくださいね。今の私はゲルマニア侯爵家のアレル・ラ・フォン・ランカスターですから」

皇太子であるアレルは、ハルケギニアでも有名人だ。

現ゲルマニア皇帝の息子で第一王位継承権を持つ立場であり、彼自身その容姿からゲルマニアでは貴族から平民まで人気のある人物で

あり、実力も『火』・『風』・『水』・『土』のスクウェアクラス
彼が設立した「天空」という騎士団は、ハルケギニア1有名である
その騎士団は貴族・平民に関係なく実力があれば誰でも入隊できる
その中には亜人や翼人もいる。一部噂ではエルフもいるらしい
そのトップにいるアレルは自身が騎士団を率いて戦うこともある
平民の演劇にはアレルを題材にした物語があったりするほどだ。

「まあ、大丈夫でしょう。ここはトリステイン。ゲルマニアで直接、
私と面識のあるものはいないでしょうしね」

「いや、パーティの時にあったことのある者だったらばれますぞ
と、オスマンはあきれながら言う

「ああ、そういえばそうですね」

と、今までそのことを考えていなかったようだ。アレルは少し天然
なところがあるようだ

「とにかく、これから三年間よろしくお願いします」

「ええ、こちらまでできる限りお手伝いします」

「では、失礼します」

と言って、アレルは学院長室から出て行った。

アレルが出て行ったあと、オスマンは

「は、やれやれとんでもない生徒が今年は来たものじゃ」

アレルの入学関係の書類を見ながらそうつぶやく

「しかし、今年は王族が二人も身分を隠して入学してくるとは・・・
」とって、

オスマンはもう一枚の書類を見た。

名前の欄に『タバサ』と書かれた書類を見ながら今後の対策を考えていた。

トリスティン魔法学院（後書き）

文才がほしい・・・

ご意見・ご感想 お待ちしています

幼き頃の出会い（前書き）

読みにくいという感想があったので、全体的に修正しました。

今回は原作のキャラが登場します。すこし笑えるかも？

幼き頃の出会い

「さて、私の部屋はどこだろうか？」

手続きを済ませてすぐに、学院長室に行ったアレルには、自室がどこにあるか分からなかった

アレルは風竜で学院に来たので荷物は実家から学院に送ってもらっている

「きみ、少しいいかな」と、歩いていた黒髪のメイドに声をかけた

「はい、どういったご用件でしょう？」

と振り返ったメイドはアレルの顔を見たたん固まった

「すまないが、部屋の場所が分からなくてね」

「ええと、お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「アレル・ラ・フォン・ランカスター」

「少々お待ちください」と言ってメイドは走ってどこかに行ってしまった。しばらくして、

「ミスタ・ランカスター様の部屋はあちらの男子寮の最上階の部屋になっております」

「そうなんだ。ありがとう」

「いつ、いえ、仕事ですから・・・」

普通貴族は平民にお礼なんてしないので、メイドはアレルに感謝されたことに驚いた

「ふふ、仕事熱心なんだね」と微笑むアレルにメイドは顔が真っ赤だ

「またなにか頼むことがあるかもしれないから、君の名前を教えてくださいませんか」

「シ、シエスタです・・・」うつむきながら言う

「シエスタだね。では僕もこれで失礼するよ。仕事がんばってね」

「し、失礼します」と言っ、ものすごい速さでシエスタは走って行ってしまった

「やれやれ」アレルは男子寮に向かった

場所：男子寮最上階

「さてと、この階の上か」とアレルは階段を上っていくと、階段を上りきるとそこにはドアが一つしかなくドアの両脇に甲冑が二体扉を守るように立っていた。

「？」

ドアノブに手をかけようとすると、二体の甲冑が動き出した。侵入者対策の自立型のゴーレムのようだ。

「ふうん」と行ってアレルはドアを開けようとするがゴーレムはアレルに剣で攻撃してきたが剣はアレルの目の前で弾かれた。

「やれやれ、学院長。遠見の魔法で見ているのでしょうか。早く部屋に入れてくれないでしょうか」

「ふおおおお、いや、すまんかったな。

君の実力を知りたくての」とゴーレムから学院長の声が聞こえてきた。

「はあ、まあいいですけど。もういいですか？」

「ああ、この階の部屋は特待生しか入れないようにしているから」「さりとて言う」

「・・・特待生なんて聞いていませんよ」若干、アレルの声に怒りが混じってるような・・・

「この階を使うということは、それ相応の実力があるということじゃぞ。」

ミスタ・ランカスター、不満かね？」

「目立ちたくないと自分は伝えただけですが？」

「仕方ないじゃろ。君の実力を隠したままだといろいろ学院生活で大変じゃろうし、君の言う王族の義務もあるじゃろうし。他の生徒が同じ階にいては、いろいろ面倒じゃろ」

オスマン学院長が言っていることは当たっている。

この学院に来たのは生涯の伴侶を見つけるためでもあるし、王族の

義務

つまり、早く世継ぎをつくれということもある。学生のうちからそんなことを考えなくてはならないアレルは眉間にしわを寄せた。

「仕方ありませんね、この部屋でいいです」

「そうか、ではゴーレムに君を識別できるようにしておくから、安心して休みなまえ」

「ええ、そうさせてもらいます。来客が来る場合はどうするんですか？」

「何、扉の前にある紐を引くとベルが鳴り部屋の中にある鏡にその者の姿が映るようになっておるから」

「なるほど、わかりました」と言っ、部屋に入るアレル。

部屋の中は、一般の生徒より広く豪華な装飾がされた家具で統一されていた。中でも寝室にあるベットはかなり大きい……

「……………はあ」アレルの悩みは尽きない。

しばらくして、来客を知らせるベルが鳴り、鏡にロングビルが映ったので、扉のゴーレムに下がるように命じた。

少し、控えめのノック音がしたので

「どござ」

「・・・失礼します」と、ミス・ロングビルがアレルの部屋に入ってきた。

「やあ、さっきぶりだね」

「それでお話とは？」

ロングビルの目には明らかにアレルを警戒している

「そんなに警戒しなくてもいいんじゃない？」と、杖を出しながらアレルは言う

「くっ・・・」ロングビルも杖を素早くだす

「おっと、サイレントをかけるだけだよ」そう言って杖をふるう

「なんだったら、杖を預けようか？」と言いロングビルに杖を渡すメイジにとって杖がないということは、魔法を使うことができないということだ。

「・・・正気かい？」

「別に話をするだけだから問題ないでしょ。座ったら？」

ロングビルはため息をつきおとなしく椅子に座った。

「さて、これでようやく話ができるね」と笑顔で言いロングビルに紅茶を煎れた。

「別に毒なんて入ってないから」と言っ自分も紅茶を飲んだ。毒は入っていないようだ。ロングビルも紅茶を飲んだ。

「さて、改めて久しぶりマチルダ」と笑顔で言う

「・・・私は会った記憶がないのだけどね」

「もうずいぶん前のことだしね。最後に会ったのは母さんと一緒にサウスゴータ伯の君の家に遊びに行った時だね」

懐かしむようにしゃべるアレルをみてマチルダは困惑していた。

昔、家に来た？ 家にはあの子がいたからそう簡単に客が来るはずないし・・・昔の記憶にはあの子とマチルダがサウスゴータ家で一緒に遊んで・・・

「まさか・・・テファの母親に会いに来た時にいた子かい？」マチルダが言うと

満面の笑みで「そうです」とアレルは言った

「あの時、あなたは僕に女装をさせたり、嫌がる僕をゴーレムで追いかけてましたっけね」

「・・・」

「いや気にしてないから。たぶん」ぼそ

「は、は、まあ、すぎたことは忘れちゃったね」

「えっ、あの時マチルダが僕に言ったことも忘れたのですか？ 『私
がアレルのお嫁さんになる』と、言ってましたよね？

あの時のマチルダは可愛かったですね『テファと私のどっちが大事なのよー!』』と言ってまたゴーレムで追いかけてきましたね」

「よく言うよ! あんたは、ちょこまか逃げていたじゃないか」
顔を真っ赤にして反論する

「普通、ゴーレムを使って追いかけますか？」

「いいじゃないか、別に・・・」

「まっ、そういうことしておきましょう。何故テファと一緒にいないんですか？」

あの孤児院で年長者はテファ一人だけ

今の時代、子供だけで生活するのは難しい

「あの子達のために働かなくちゃいけないからね」

あの孤児院で働けそうなのはマチルダぐらいなのだ

テファも姉であるマチルダばかり、働かせたくはないが、テファは人前に出ることができない

「・・・確かに、子供だけで生きていくにはこの世界はつらいです
しね」

孤児院には戦争で親を亡くし子供や捨てられた子供などがいる

戦争は子供から父親を奪う

ある日、父親は帰ってこなくなる

戦争に行つて死んでしまった

もう、父親は帰ってこない

残された母親は子供を育てようと懸命に働く

朝から晩まで、休みなしに働く

稼いだお金は高い税金に持つてかれ、手元にはほとんど残らない

働いても一向に豊かにならない平民の暮らし

追いつめられた母親はわが子を捨てる・・・

子供が外から帰ってくると家には誰もいない

子供は母親の帰りを待つて、1日、2日、3日・・・何日待つて
も、母親は帰ってこない

子供は母親の帰りを待ち続ける

誰も助けてはくれない

まだ母親に甘えたい年

一人ぼっち

暗い夜、いつもベットの横で寝るまで傍にいてくれた母親の姿はない
そして、子供はきづく

母親は……帰ってこないのだと

自分は捨てられたのだと

マチルダは、テファ達のために働きながら、そのような境遇の子供
を見つけてはウエストウッド村に連れていく

生活に余裕があるわけではないが、マチルダには孤独がどうゆうもの
なのか、理解していた

「……ああ、そうだね」

マチルダの家系はジェームズ一世の弟、モード大公に仕えていた

モード大公はエルフの女性を愛して妾とし、彼女との間にティファ
ニアが生まれた

兄であるジェームズ一世にそのことを知られ、彼女らの追放命令を
再三拒否したため、ついに投獄され処刑された

その後、マチルダの家もその責任を取らされ、御家取り潰しになった

「あの事件以来、二人の消息が分からなくて、困りましたよ」

「はっ、仕方がないさ。私の家も潰されちゃったしね。今やただの平民の女さ」

「そんなことを言わないで下さいよ」

「・・・アレルに言ってもしょうがないわね・・・」

そう言いマチルダは紅茶を飲んだ

「それでもまた会えてうれしいよ、マチルダ」

「・・・全く、年上に敬語も使えないのかい？もっとも、あたしは平民だし、敬語を使うべきなのは私のほうなんだがね」

「さつきも言っただけど、そんなことで僕は差別なんてしないし、その人の人となりを見て判断するし」

「あなたは昔から変わらないね」

マチルダも緊張がようやく解けたようで、微笑む

「やっぱりテファとマチルダは笑った顔が良いね」

「／／／／／そ、そうかい」

「うん 二人とも、昔よりすごく綺麗になったし」

「・・・アレル、あんだ、テファにあったのかい？」

「ええ、テファのいる場所についての情報が最近手に入ったので、学院に来る前までずっといましたよ」

アレルはテファがウエストウッド村にいるのを最近知り、今朝までずっと村に滞在していた

「・・・そうかい」

すこし、機嫌の悪くなったマチルダ

妹分のテファにすでにアレルがっていたことに、少なからず嫉妬している

「（なに、考えてるんだか、あたしは・・・）」

それから、昔話をしばらくした後、夕食の時間になったので食堂に向かうことにした

幼き頃の出会い（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております

友人（前書き）

ご意見・ご感想お待ちしております

友人

場所：食堂

アレルが食堂に入るとすでに大勢の生徒が座っていた

テーブルの上には豪華な料理が並べられ、給仕係のメイドが忙しく働いていた

アレルは空いている席に向かって歩きだすと、一斉に生徒達の視線が集中した

アレルはその視線を気にせず、席に座った

アレルのまわりには、まだ席が空いているのに誰一人として座ろうとしない

意図的にアレルを避けているようだ

女子はアレルの美貌に、男子はその美貌を妬む

しかし、どこにでも例外はある

「失礼するよ、ミス」

「？」

アレルの目の前の席に変態が現れた！！

胸元が広く開いたフリル付きのシャツを着て、キザツたらしくバラを片手に話しかけてきた

「君のように美しいバラに声をかけずにはいられなくなってしまったのでね。」

僕はギーシュ。ギーシュ・ド・グラモンだ。美しいあなたの名をぜひ教えていただけませんか？」

「……」

「おや、どうしたんだね。僕の魅力に声も出せないのかな？ まったく罪深い男だよ僕は」

と言つて、自分自身の身体を抱くような仕草をする。明らかに浮いた存在にアレルはしばらく固まってしまったが、

「……失礼。トリスティンの貴族は男色家なのかな？」

「へっ？」

「あいにく、私は男だよ」

「……はは……そんな馬鹿な」

「正真正銘の男だ」

かなりご立腹らしいアレル。その怒った顔すら、周りを魅了する

「い、いやぁ・・・すまなかつた」

「いや、そういう人もいるのだろう。世の中には男が好きな男もいるのだな。だがすまないが君の告白に答えることはできないよ・・・」

と生温かい視線をギーシュに向けるアレルに

「ち、違う。僕にそんな趣味はない。普通に女の子が大好きだよ！」と大声で叫ぶ。

ほかの貴族からの視線がかなり痛い、特に女子からの

蔭では「おホモたち？」

「ボーイズラブ？」

「はあはあ」？

数名が妄想の世界に旅立っていった。そこで、アレルとギーシュのからみあいが・・・（これ以上は）

「まったく、入学早々みんなに誤解されてしまったじゃないか」

とかなり機嫌が悪いギーシュ。

「お前が悪いんだろ」と返すアレル。

わずかな時間にもうギーシュとアレルは打ち解けていた。

「まあ、気にするほどのことじゃないだろ。ギーシュの二つ名は『変態』で決定だね」と笑いながら言うアレルにギーシュは

「そんな二つ名があるかー！！僕の二つ名は『青銅』だ！！」と叫ぶがこの先、ギーシュのもう一つの二つ名が『変態』になって語り継がれたのは別の話で。

「改めて、僕の名はギーシュ・ド・グラモン。トリステインのグラモン伯爵家の四男だ」

「僕は、アレル・ラ・フォン・ランカスター。ゲルマニアの侯爵家の長男だ」表向きの地位を話す

「へー君がああのランカスター家の秘蔵子かい」

「なんで？」

「ハルケギニアで一番経済力があるゲルマニアで王都より発展している領だから有名だよ」

「ふーん」

ランカスター家の領はゲルマニアの中で最も発展している。

例えば、平民の衛生環境

ハルケギニアでは路上に糞尿を捨てる習慣があり、王都であっても道が汚い。

衛生環境が悪ければ、病が流行するのは当然である。

アレルはまず、路上に糞尿を捨てることを禁じ、それを破った者には重い罰を与えることにした。

さらに、糞尿を集め、それを畑の土の栄養分として使うことを考案した。

糞尿を集めることを専門とする仕事には、他の仕事に比べて高い給金をアレルは支払うことにしていたので、この仕事をやりたいという平民の応募がかなりいた。

最近では、汲み取り式の公衆のトイレを作ったりしている。

次にアレルは平民向けの公衆浴場を作った。

平民は主に蒸し風呂と呼ばれるサウナに入って汗をかいた後、水をかぶって汚れを落とすのが一般的な平民の風呂。

そこでアレルはエルフとの交易から手に入れた火石を使って水を温める装置を作った。

各家庭にいつでも温かいお湯が使えるようにした。

他の領に比べて平民の生活がかなり良い領のため、ランカスター領には大量の平民が流れ込み、日々大きくなっている。

他にも、平民でも簡単に手にすることができる安いがよく効く新しい水の秘薬の販売。

平民の子供のための病院や学校なども作った。

これらの施設は、この領の領民であれば自由に使うことができる。

そんな領の長男であるアレルはゲルマニア内では人気であるが、他の国の貴族は平民に対して優遇しすぎだという意見も多い。

「どうしてそこまで平民を優遇するんだい？」

ギーシュ疑問にアレルは

「僕は領民たちの生活がよりよくなるように少し手を貸しただけだよ」

「じゃあ、なんでトリステインに留学したんだい？君の実力だったらわざわざ留学しなくても良いんじゃないかい？」

「まあ、いろいろあるんだよ。いろいろ」含みのある笑みを浮かべるアレル

「ふん。しかしゲルマニアの貴族がトリステインに留学か。かなり風当たりが強いのではないか？」

トリステインは伝統を重んじる風習（貴族至上主義）がある。

実力があれば平民は爵位をお金で買うことができる完全な実力主義のゲルマニアを馬鹿にする者が多い。しかし、トリステインは貴族が既得権益を手放さないように、平民に対しての扱いがかなりひどい。

貴族のために尽くすことが平民にとって幸せであるという考えを持つ者もいる。

一生を貴族の奴隷のような生活をしたくない平民の多くはゲルマニアに移り住む。

トリステインにとって、平民が自国から他国に行くことで、今までその平民から徴収していた税が取れなくなるため、収入減になる。

トリステインは一人の平民から収入の6割を税金として取るがゲルマニアでは2割しか取らないので、ゲルマニアには様々な国から人が集まって来る。

人が集まれば、そこで物を売ろうとする商人が集まるのでゲルマニアの経済は好景気だ。

ゲルマニアで富を得ることに成功したものが、貴族の称号を皇帝からお金を払って買う。

新しく貴族になった者は商人が多いので、『貴族あつての国』のトリステインの貴族たちにとって、自分たちと同じ地位やそれよりも上の地位のものが平民上がり者であるという自分たちのプライドが許さないからだ。

「学び舎まで、そんな差別はないだろう？」「成り上がり』『野蛮』
という偏見で人を見下すのはよくないんじゃないか？」

「君みたいな考えを持った、貴族のほうがりステインではおかしいのだよ」

「そうなのか。それにしても、ギーシュは僕がゲルマニアの貴族なのに、そういったことをしないね」

「僕はべつに気にしないだけだよ。アレルとは長い付き合いになりそうだし」

と言ってグラスを上げる

「僕もギーシュとは長い付き合いになりそうだ」と笑顔でグラスを上げ

「乾杯」

アレルは学院で初めての友人ができた。

これからの学院生活にさまざまな道を想い描いていた。

友人（後書き）

感想をお待ちしています。

物語（前書き）

ご意見・ご感想お待ちしております

物語

あれから、ギーシュとワインを大量に飲んで部屋に戻った。

「ふ〜、少し飲みすぎた・・・」足元がかなりふらついている。

そのまま、ベット倒れこむように眠った。

??? side

「むかし、むかし、あるところに、一人の男がいました。

男はある国の王様の息子でした。

男は王の息子として周囲の期待を受け、立派な王様になるように日々努力していた。

ある日、その男の住む国で、大きな戦いが起った。

町では「エルフ」が攻めてくるといふ噂が流れ、人々はエルフ狩りという名の殺戮を行った。

夫を戦いで亡くした女や社会的に地位の低い者がその殺戮の対象になった。

男は自ら戦場に向かいそのような無益な争いを終わらせようとした。

向かってくる敵を自らの手で殺し、男の鎧は返り血で真っ赤になった。

男はその青い瞳で戦場を見つめ何を思っただろう。

男はそこでフード付きのマントをかぶった一人の女に会った。

女は男に自分を殺してほしいと涙ながら訴えた。

男は訳がわからず女の話聞いた。

そもそもこの争いはその女の種族が原因ということらしい。

女は男の持つ剣を自分の首につけた。

フードがずれて女の顔が見えた。

男はその美しさに息をのんだ。

その美しい銀髪が時折吹く風でなびく。

男はその女の耳が自分の耳とは違い長くどがっていることに気づいた。

男は女がエルフであると知った。

不思議と男は女がエルフであることに恐怖するどころか、むしろ興味を持った。

男は王である父親にエルフとは恐ろしいものであると教えられてい

だが、
目の前にいるエルフの女の美しさはそんなことを思わせないほどであった。

まるで女神のようだ。

男は出会って間もないのに女に恋をした。

男は女に求婚した。

女はすべてに絶望していたようで流されるまま男の求婚を受けた。

男は今まで自分が築き上げてきたものをすべてを捨ててでも女を守ろうと決意した。

女と男は小さな教会で結婚式を挙げた。その教会はブリミル教関係の教会だったがその司祭は快く二人の結婚式をとり行ってくれた。

その司祭の子供だろうか、幼いながらもその司祭の子供は新婦のドレスの着付けを手伝ってくれた。

二人の結婚式を祝福する者は司祭とその子供だけであったが、他のどの結婚式より神聖なものであると司祭の子は思った。

結婚式をあげてから二人は旅に出た。

さまざまな村に行き、いろいろな人たちと出会った。

だんだん男の妻である女の顔にも笑顔が戻ってきた。

二人は共に支えあいながら旅を続けていたが、ある日、男の父親である王が病に倒れたと聞いた。

すべてを捨てて女と旅をしていた男であったが、その決心が揺らいだ。

さらに周囲の国がこれを機に攻め込もうとしていることも聞いた。

王にはその男以外にも子供がいたが、兄弟であるのに敵同士の関係であった。

このままでは、自分が生まれ育った国が滅んでしまうと思う男に、妻は自分のことは大丈夫だから国を守るために行ってくださいと言って、一本の剣を男に渡した。

その剣には精霊の加護が施されていて、敵の攻撃から持ち主を守る力があつた。

男の妻のお腹の中には新しい命が宿っていた。

男は必ず戻ると言って、村に妻を残して国に戻った。

王が倒れた国の中ではだれが次の後継者になるかで争いが起こっていた。

国としての機能が完全にマヒしている中、男は生まれ育った国に戻った。

男は自分の兄弟たちの醜い権力闘争に絶望した。

議会でそのようなことを議論している間にも他国の軍が国境を超え始めている。

誰一人として、軍に指示を出さずに時間だけが過ぎていく。

男はそんな兄弟たちをいちべつすると、自ら軍の先頭に立ち、敵に向かっていった。

妻に渡された剣を戦場でふるい男は侵略者を倒していった。

戦いが激化する中で、男が旅をしたなかで知り合った者の協力を得ることで、国を救った。

そして自分の父親はそれを見ることもなく亡くなった。

男はすぐに愛する妻のもとに戻ろうとした。

しかし、男がいなくなれば自分の血縁関係にある者達による権力争いが起き、国が荒れてしまうと考えた。

これから生まれる新しき命のために、自分がやらねばならないと考えた男は父親の後を継いだ。

自らをゲルマニア皇帝アルブレヒト三世と名乗った。

新しき王は血縁関係の者のほとんどを幽閉した。

皇帝は自分の妻と子に危害が行かないようにするため。

自分に悪意がすべて向かうように政治を行った。

ロマリアの神官に多額の支援をし、二人が異端の存在でないように働きかけた。

その時、結婚式を挙げたときの司祭の子供に再び男は会った。

彼は成長しロマリアのブリミル教での発言力を手に入れたがっていた。

男はその者に力を貸した。

代わりにその者が、それなりの地位に上がったら、男の妻と子に対しては干渉しないことを約束させた。

その者は後に教皇の座に上りつめるのはまだ先の話だ。

そうして、男はできることはすべてし、愛する妻とまだ見ぬ子のもとに向かった。」

物語（後書き）

いかがでしょう？

アルブレヒト三世は実はこんなにも良き父親であった。決して野心家ではなかったのだと自分は考えました。

ロマリアとの関係は少し無理があるかもしれませんが、中世ヨーロッパ社会の形態を参考に考えてみました。

感想をお待ちしています。

蒼髮姉妹（前書き）

なんだか原作キャラに出会ってばっかだな

蒼髪姉妹

朝、アレルは目を覚ますと自分の部屋のベットで寝ていた。

昨日と同じ、学園の制服を着たまま眠ってしまったようだ。

「ひさびさに飲みすぎたかな・・・」軽い二日酔いになった。

「今日から授業だし、仕方ない」と言っつて、アレルは杖をふるう。

杖の先から青色の光が出て、アレルの身体を包みこんだ。

みるみる、アレルの顔色が良くなっていった。

「まさか二日酔いで魔法を使うことになるとは・・・」

この魔法はアレルが作ったオリジナル魔法で体内の水の流れを正常な状態に戻す魔法だ。

もう一度杖をふって空気中の水を集めて桶にためて、火の魔法で温め顔を洗った。

「ふゝ、久しぶりにあの話を夢に見たな」

アレルが幼い時に眠る前に母親がよく話してくれたお話の一つだ。

何度もその話を聞いたが、男が妻と子供のもとに向かった後、どうなったのか母に何度も聞いても教えてくれなかった。

「まだ、朝食まで時間があるな」と言って、ベッドの傍らに置いてある細長い袋を持ち、部屋を出た。

まだ早い時間なのだろう、他に誰もいない広場にアレルは着いた。

広場の中央でアレルは袋を縛っている紐をといて一本の剣を出した。

メイジは基本的に魔法しか使わない。

剣とは平民が貴族の魔法に対して少しでも近づこうと作りだした武器の一つだ。

その剣をメイジである、アレルが持っているのは他の貴族から見たら、変なことなのだ。

『平民は貴族に絶対勝てない』という考えを持つ者は多いが、アレル自身はそう思っていない。

アレルが作り上げた『天空』の騎士団に所属しているものは全員が平民の武器である剣や槍、弓などを扱えるように訓練している。

なぜなら、メイジにとって、魔法は確かに強力な武器であるが、使うには長い詠唱が必要でその間、メイジは無防備だ。

さらに精神力が切れてしまうと魔法は使えない。

魔法の使えないメイジはただの平民より弱い存在だ。

アレル自身も騎士団のトップであり『メイジ殺し』と呼ばれる猛者

達と日々剣を競い合った。

アレルの剣の腕前も『メイジ殺し』のレベルまで成長している。

この学園に来る前に騎士団の剣の使い手達と一対多数の模擬戦をしたが、アレルは剣だけで勝ってしまった。

一応魔法の中にも『ブレイド』という杖の先に魔力をまとわせ刃にするものがあるが、それも精神力がなくなれば使えなくなる。

そのため、騎士団のメンバーは魔法以外に何か武器を扱えなくてはならない。

剣・槍・弓・銃・槌などが主に騎士団のメンバーが好んで扱う。

中には、己の拳こそ、最強の武器だと言って敵に素手で挑む者もいるらしい。

アレルは、それらの武器などを完璧に扱えるが、鍛錬の際には剣を好んで使う。

一通り、剣をふるい終わると、木の陰に隠れてこちらを見ている少女を見つけた。

タバサ side

この学院に来たのは昨日。

学院なんて興味はなかった。

『死』の感覚を知らぬ者たち。

戦場を知らぬ者たち。

そんな者たちと一緒に生活することになるなんて、

一昨日まで（戦場）までは考えもしなかっただろう。

私はガリアの王族だった。

私の父は現ガリア国王の弟であった。

父は12歳でスクウェアクラスに達した天才的なメイジ。

魔法以外にも様々な能力に優れていた。

反対に魔法の素質に恵まれぬ兄を励ますなど、高潔で思いやりのある人柄から、宮中の人々の多くに慕われていた。

誰しもが次期国王はジョゼフの弟のシャルルだと目されていた。

しかし、前王は亡くなる前に、私の父ではなく兄であるジョゼフを王にした。

父は、兄であるジョゼフが王になったことを心から祝福して共に国を支えることを誓った。

私はそんな父が大好きだったし、伯父ジョゼフや従姉イザベラとは仲が良かった。

父も伯父もこれからのガリアの明るい未来を築くことに胸を躍らせた。

よく、二人は私達に自分達がどのような国にしたいかを話してくれた。

その話の中のガリアは、とても、とても、素晴らしい国であった。

いつごろだろう？

私達の運命が崩れたのは？

ある日、父は森に狩りに出かけた。

いつも、父は伯父とどちらが大きな獲物を獲ってこれるか競っていた。

その日も父と伯父はどっちが大物を仕留めてくるか、笑いながら話していた。

そんな二人を母様とイザベラ姉と私で見送った。

それが、生きていた父をみた最後の時だった。

父は変わり果てた姿で帰ってきた・・・

そこには、いつも笑って私を抱き上げてくれた父はいない。

どうして？

ねえ、父様？

寝てないで起きてよ。

母様が泣いてるよ。

どうして起きてくれないの？

私は父様が死んだことを受け入れられずにいた。

母様は私を抱きしめて泣く。

気がつくくと、私も泣いていた。

私と母様は涙を流し、父の寝ているベッドの前で泣いた。

ああ、父様はもう、いないんだ。

しばらくして伯父とイザベラ姉が来た。

伯父は母と私に父が毒矢を受けて死んだということを教えてくれた。

油断があったのだろう。

いつも、兄弟で狩りをしに行く森。

伯父が王になる前からよく行っていた森。

父と伯父は狩りの際、護衛をつけないで狩りをする。

今まで、何も起こらなかった。

その油断が父の命を奪った。

伯父は私と母様に言った。

その矢は本当だったら、自分にあたる筈だったのだと・・・

父は、伯父をかばって矢を受けた。

伯父は自分が殺したようなものだとしてそんな顔を私と母様に向けた。

伯父は泣きたくても泣けない。

王である伯父が泣くことは許されないからだ。

例え、愛する家族、血のつながった兄弟であろうと、泣いてはならない。

伯父は王なのだ。

イザベラ姉は私を抱きしめ泣いていた。

自分の父が泣けない代わりに、泣くように・・・

屋敷は悲しみに包まれた。

みな父様のことを悲しんだ。

平民の武器である弓で死ぬということ、メイジとしても貴族としても屈辱的なものなのだ。

伯父は犯人を探させた。

しかし、いくら探しても父様を殺した犯人は見つからない。

人々の間で、『犯人はジョゼフでないだろうか』という噂が流れた。タバサはその噂を聞いたが、タバサはイザベラのことを本当の姉と思い伯父であるジョゼフのことをもう一人の父であると思っていたので、その噂は嘘であると思っていた。

父様が亡くなって、しばらくしたころ、伯父は盛大なパーティを開いた。

夫を亡くしたショックでまいつている母様と私の気分転換に思っ
て開いたパーティ。

久しぶりに公の場に出た母様と私はイザベラ姉と伯父に会った。

伯父は何とか母様と私の負担を軽くしてやろうと積極的に話しかけてきてくれた。

イザベラ姉も私に話しかけてきてくれた。

少しだけだが、母様の顔に笑顔が戻ったように私は思えた。

あの、ワインを母様が飲むまでは……

そのワインに毒が入っていた。

飲んだ者の心を蝕む毒が・・・

それから、私の顔から笑顔が消えた。

母様が飲んだワイン・・・

私が母様に元気になってもらおうと、持っていたものだった。

それから優しかった母は変わってしまった。

私が持っていた人形を私の名で呼ぶ。

ねえ、母様

私はここにいますよ

やめて・・・

その人形は私なんかじゃないよ

・・・・・・・・

私はそれから、その人形の名を自分の名前にした。

『タバサ』

それが、私の新しい名。

それから自分自身が人形であるとして、感情を殺すようになった。

ガリアの北花騎士団に所属してさまざまな任務をこなした。

任務の中には人を殺すようなものもあった。

命令とあれば、子供すら殺した。

一人で、強大な龍と戦った。

自分は任務をこなすこと以外で存在価値がみいだせない。

あそこには私の帰りを待つてくれる人はいない。

任務の間に、母の心の病を治す薬や魔法を探した。

さまざまな薬に解毒魔法を母に試してみたが一向に良くならない。

そんな中、自分の上司にあたる現国王の娘で薔薇騎士団のトップであるイザベラ、私の従姉に呼び出され、トリステイン魔法学院に行くように命じられた。

イザベラとはあのパーティ以降、まともに会話をしてない。

イザベラのことを姉と思っていた時もある。

しかし、父と母の事件で私とイザベラの間溝が生まれた。

昔のように一緒に笑いあうことはもう無理だろう。

命令の内容は『トリステイン魔法学院に入学する』というものだが、おかしい。

いつもなら、もっと帰ってくるのが困難な命令ばかりだ。

トリステインに向かう前の日に再びイザベラに呼び出された。

部屋に入るとイザベラに『サイレントの魔法をかけな』と命令されたので言つとおりにした。

「明日、お前はトリステインに行くのはわかってるだろう」

無言で頷く

「父親・母親がああなっちまってから、お前は人形みたいになった」

「……」

「少しはしゃべったらどうだい？」

「……」

「……」

タバサとイザベラは互いに黙ったまま相手を見る。

イザベラはため息をついた

「まったくエレノは……」

久しぶりに自分の本当の名がイザベラの口から出たことにタバサは驚いた。

「この留学の話はエレノの安全を考えて、私と父とで決めたことなんだ」

「……なぜ？あなたたちが私にそんなことをする理由がない」

「何言ってるんだい！！シャルロット、あんたは私の妹だよ。あの

事件であんたが変わったとしても、あたしはあんたの味方だよ」

「……………」

「それと、あんたの父親を殺した者と母親の病の原因がわかった」

「!?!」

タバサの顔がわずかに動揺した

「あたしの父を殺してその後にあんたの父親を次の王にして、取り入ろうとした強硬派らしくてね。それが、自分達が王にしようとしていた者を殺すなんて、皮肉だね。」

「……………」

自分の杖を持つ手にかなりの力がある

「そいつらはもういないよ」

「……………どっしって」

タバサの身体からはおびただしい量の殺気と魔力が溢れている。

「そいつらは現王、あたしの親父が全員始末しちゃったよ……………」

「すまなかつたね・・・つらい思いをさせて・・・」

イザベラはタバサを抱きしめる。

そこには、昔慕っていた、姉の姿があった。

「・・・姉さん」

あれから、誰にも頼らず一人で生きていく事を誓ったタバサにとって、イザベラ存在は言葉に表すことができない。

しばらく二人は抱き合っていた。

あれから、イザベラとタバサはこれからのことを話し合っていた。

「・・・母様は？」

「ああ、あの毒はエルフが調合したみたいなんだ」

「・・・エルフ」

「今、親父が解毒薬を探し回っているよ。けど相手がエルフだから、なかなか交渉が大変なんだよ」

「それと私の留学とどう関係があるの？」

「一つはシャルロット自身の安全のため。もう一つはゲルマニアの王族がトリステインに留学するらしいという噂があるんだけど、その噂が本当だったら、その王族と接触すること」

「・・・なぜ？」

「ゲルマニアはエルフと交易しているという噂があるからそれを確かめることと、可能であればその王族に解毒薬の件に協力してもらうこと」

「・・・わかった」そう言ってタバサは部屋を出た

部屋を出る際に

「・・・ありがとう。イザベラ」

「ふっ、気にしない、あたしはあんたの姉なんだから」

少しだけではあるが、昔の二人に戻れた気がする。

トリステイン魔法学院に入学してタバサはゲルマニアからの留学生が二人いることを知った。

一人は、真っ赤な髪の女 名をキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーと言っらしい。

もう一人は、長く伸ばした銀髪をポニーテールにしている男 名を
アレル・ラ・フォン・ランカスター。

家名からはどっちが王族かわからない。

おそらく自分のように正体を隠しているのだろう。

詳しく調べるのはまた明日すればいいと考えたタバサは今日のこと
ろは寝ることにした。

「……ねむい」

少し早くに起きてしまったタバサはふと窓の外を見ると学院の制服
を着た男の子が中庭に歩いて行くのが見えた。

気になったので身支度をして追いかけることにした。

木の陰から中庭の方を覗くと先ほど見かけた男の子が剣をふっ
た。

「……キレイ」

男の子の剣をふる姿はとても美しく朝日に男の子の銀髪が反射した。

まるで本の中に出てくる勇者のようだった。

自分の好きな『イーヴァルディ』の物語のように。

男の子の剣舞が終わり、覗いていた私の存在に気づいたようだ。

男の子は私のもとに歩いてきた。

タバサSide Out

「やあ、おはよう」とアレルは自分のことを覗いていた少女の所に歩いて行った

「・・・おはよう」とタバサも挨拶を返す

「え〜と、もしかしてずっと見ていたの？」

こくりとタバサは頷いた

「・・・とても綺麗だった」

「ははは、ありがとう」「アレルは笑った

「・・・なぜメイジが平民の武器である剣を使うの？」

「う〜ん。どうしてだろうね？」と質問に質問を返す

「・・・」

「まあ、体を鍛えるにちょうどいいからぶっているのだよ」

「・・・そうゆつことしておく」「余計な詮索はしない方がいいよ
うだ

「はは、ありがとう」

「・・・タバサ」

「へっ?」

「私の名前」

「そうか。僕はアレル・ラ・フォン・ランカスター。アレルと呼んでね」

「・・・いいの?」

「なにが?」

「名前で呼んで?」

「全然かまわないよ。もう知り合いなんだし」と笑顔で答えるアレルをみてタバサは顔が赤くなった

「・・・わかった」

「うん。よろしく」

こくりとタバサ頷いた

「じゃ、僕は汗を流しに行くよ」

「・・・また」

そうやって二人は別れた

蒼髪姉妹（後書き）

イザベラとタバサは仲が良いという設定にしました。
ジョゼフの良い人設定はかなり無理があるかな？

騒がしき朝食（前書き）

ようやく始まるよ・・・

騒がしき朝食

アレルはタバサと別れた後、部屋に戻り汗をふき、服を着替えた。ちょうど朝食の時間になったのでアレルは食堂に向かった。

食堂に着くと一部の席に人が集まっていた。

「？」

「やあ、アレル。おはよう」

とギーシュが声をかけてきた。

「ああ、おはよう」

と言ってアレルも席に着く。

「なあギーシュ、あの人だかりは何だ？」

アレルの指を指す方向をみたギーシュは

「うん？ああ、あれか。真ん中に桃色の髪の子がいるだろ」

「うん」

貴族の男共の隙間から時折、桃色の髪が見える。

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。」

トリステインのヴァリエール公爵の三女だよ」

「ヴァリエール公爵？」

「君はゲルマニア貴族だろ？その君が知らないのかい？」

ギーシュはあきれながら言う。

「トリステインで王族の次に権力を持っている家系さ」

「へ〜」

群がる男共の中心に引きつった笑顔を浮かべる女の子がいた

「まるで砂糖に群がる蟻だよ」

ギーシュはその集団をみてそう言う。

「ギーシュは行かないのか？女の子が大好きなんだから？」

笑いながらアレルは言う。

「確かに可愛いけどね、初日に声をかけたんだけど………思いつきりふられたよ」

ギーシュは肩をすくめながら言った

「ははは、結構気の強そうな顔をしているね」

「どうだい？アレルもアタックしてみたら？」

「ううん、じゃあ声だけかけてみるか」

「へっ、本気かい？」

ギーシュは冗談のつもりで言ったのだが・・・

「じゃあ行ってくる」

「お、おい」

アレルは人だかりに向かつて歩き出した

ルイズ side

朝食を食べに、食堂に来た私の周りに貴族の男が集まってきた。

「ミス・ヴァリエール今度、馬で遠乗りに行きませんか？」

「いや是非僕と」

「おい、抜け駆けするなよ」

食堂に着いてからずっとこうだ。

はっきりに言っとう・ぎ・い！！！！

ヴァリエールの名前に引き寄せられてきた男が！！
だんだん顔が引きつってくるのが自分でもわかる
ルイズここは我慢よ！！

入学二日目で問題を起こしてはだめ！！

笑顔、笑顔、笑顔、笑顔・・・

「・・・え、ええ。いつか・・・」

「あゝ、ミス・ヴァリエールは今、僕に微笑んだ」

「いや、僕だ！！」

「違うよ。僕だよ！！」

あゝ、もう限界

みんな死ねばいいのに

「失礼、ミス・ヴァリエール」

そこには銀髪ポニーテール男が立っていた

ルイズ side out

「ちょっと通してくれるかな」

「おい、割り込むな・・・よ」

男はアレルを見て固まった

「通してもらっていいかな？」

「あ、ああ・・・」

その男子生徒はアレルに道を譲った。

「ありがとう」

アレルは笑顔でその男子生徒に言う。

「あ、あの!!」

「はい？」

道を譲ってくれた男子生徒がアレルに話しかけてきた。

「そ、その・・・今度僕と・・・」

「？」

顔を赤らめ、その男子生徒はアレルに

「……僕と一緒に遠乗りに行かないか？」

「……」

ギーシュに続いて二人目だ

「そ、そのとうかな？」

自分の髪を指でいじりながらアレルに話しかける。

「……僕は男だ」

「へっ？……」

「……通してもらおうか」

「ぶ、ぶっぞ」

男子生徒は再びアレルに道を譲る。

「お、俺は、俺は……うわ〜」

と言って男は走って行ってしまった。

「……やれやれ」

アレルは再び人だかりの中心に進む。

そのやり取りを人だかりの中心行くまで何度も繰り返した……

ようやく人だかりの中心に着いた。

「失礼、ミス・ヴァリエール」

桃色の髪 of 少女が不機嫌そうな顔をアレルに向けてきた。

「……あんだ誰よ？」

「僕はアレル・ラ・フォン・ランカスター。アレルと呼んでください」

「ふん。私に何かよう？」

「いや、人だかりの中心にいる女の子はどんな子かと思ってね」

笑いながら、アレルはルイズに言う。

「……それだけ？」

「うん。それだけ」

「『『『『『』』』』』』」

周囲も二人の話に入り込めない

「(うん)」

アレルはルイズの身体を上から下を観察した。

「(チンチクリンだね)」

「(好みじゃないなあ)じゃ、そういうことで」

「ちょっと、本当にそれだけなの!？」

ルイズは今まで自分に群がっていた男子生徒とアレルは同じ者と考
えていた。

しかし、アレルが少ししか自分に興味がないそぶりを見せたため、
ルイズのプライドを傷つけた。

「うん、そうだよ」

確かにルイズは美少女であるが、アレルのタイプではないらしい。

「私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ」

ルイズはアレルに自分のフルネームを言う。

「だから？」

アレルはルイズが何を言っているのかよくわからなかった。

「な、な、な」

ルイズは顔を真っ赤にしてアレルを指さす。

「（な？）」

アレルは首を傾げる。

「トリスティンのヴァリエール公爵家三女である私に対してそれだけの理由で話しかけたの！！」

怒りで顔が真っ赤になった。

「？」

「あんだどこの田舎貴族よ」

「ひどいな・・・ゲルマニアは田舎じゃないよ」

「ゲ、ゲルマニアですってー!!」

大声をだすルイズ

「？」

ルイズはアレルから視線を外しアレルに

「・・・野蛮人が高貴な私に話しかけないでくれるかしら」

アレルがゲルマニア人だと知ってルイズは態度を変える？（元々きつような・・・）

「それじゃ」

そう言っアレルは自分の席に戻って行った。

「あ、あのミス・ヴァリエール？」

俯くルイズに生徒の一人が声をかけた。

「あゝもう!!」

と言って叫んだ。

「ひっ!!」

男子生徒がルイズの叫びに驚く。

「ゲルマニア人のくせに、野蛮人のくせに・・・」

あんな男にむきになるなんて・・・

あのツエルプストーと同じ国の人間なんかろくなやつがないんだから

絶対そうよ

あんな奴知らないんだから！！

「いや、嫌われちゃったみたい」

笑いながらアレルはギーシュの前の席に座った。

「まったく・・・ヴァリエール嬢はゲルマニアの人間のことを嫌いなんだよ」

ギーシュはアレルに説明する。

「なんで？」

「ヴァリエールの家はゲルマニアの国境付近にあるんだけど、ヴァリエールの隣にあるツエルプストー家と昔から仲が悪いんだ」

「へへ（ああ、あの領か・・・）」

「なんでも、ヴァリエールは代々ツェルプストー家の人間に婚約者を奪われたらしいんだよ」

「だからゲルマニア人に対して冷たいのか・・・」

「まあ、気を落とすことはないよ」

ギーシュはアレルに言う。

「？」

「ここには他にも美しい薔薇（女の子）はたくさんあるのだから」

「・・・」

「なっ、なんだいその可哀そうな者を見る目は！..！」

「・・・いや。前向きすぎるのも、どうかと思うんだけど」

「い、いいじゃないか。たとえばあそこに座っている子」

金髪の女の子が他の生徒としゃべっている。

「？」

「モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ

って言う子なんだ。僕の幼馴染でなかなか可愛いと思うんだけど」「
グラモン領とモンモランシ領は隣なのでギーシュは幼い頃からモン
モランシーと遊んだことがある

「まっ、がんばれ」

「ああ、見ていてくれアレル。今から僕の魅力で彼女を僕の虜にし
てくるよー!」

そう言っつてギーシュはその子のもとに歩いて行った

「・・・まっ、僕には関係ないな」紅茶を飲みながらそう考えたア
レルであった

?????side

「あれ、どこかで見たことがあるような」

一人の女子生徒がアレルを見てそうつぶやいた。

女子生徒の周りにはルイズと同じように男子生徒が群がっていた。

「確か・・・皇帝の主催のパーティの時だけ。あの時、皇帝の横
にいたから・・・」

以前に父親とゲルマニア皇帝の主催パーティで皇帝が参加した貴族

に紹介していた子にそっくりだから

「……まさかね」

s i d e
o u t

騒がしき朝食（後書き）

どうなるアレル？

授業開始（前書き）

塾講のバイトがめっちゃくちゃ忙しい

11人分の生徒のスケジュールを作っていたので、更新が遅れました

まじっかれた・・・

授業開始

「いや、食べた食べた」

アレルはお腹に手を当てながら言った。

アレルの座っていた席には大量の皿が山積みになっていた。

「この食堂の料理はおいしくて、いくらでも食べられるよ」

「・・・」

「うん、どつした？」

さっきからしゃべらないギーシュにアレルは声をかける。

「いや・・・いったいその細い体のどこにあの量の料理が詰まっているんだ」

かなりの量の料理を食べたはずなのにアレルのスタイルは全く変わらない。

「そ、そうか」

目の前であの量を軽く食べているアレルをみてギーシュは食欲がなくなつた。

周りにいた他の生徒も口を大きく空けて驚いていた

「まあ、食事をされる姿もまた良い・・・」

一部の生徒の間では好評みたいだ。

朝食を食べ終わった後、アレルはギーシュと一緒に教室に向かった

「ここだけ僕らの教室は？」

「ああ、この教室だよ」

先にギーシュが教室に入る

教室にいた女子生徒はギーシュの後ろにいるアレルをみて内心

「「「「「(よっしゃ!!)」「」「」

声をあげる

「結構広い教室だね」

「当然さ、トリスティンの貴族である僕たちが勉学を学ぶ所なんだから」

「おっ、窓側の席いただき!」

「お、おい。待てよ」

ギーシュの話を無視して、アレルはさっさと席をとりに行った

ギーシュがアレルを追いかけて近くの席に座ろうとするが複数の殺気を感じた……

「ひっ！」

おそろおそろ振り返ると目をキラキラと光らせ、詰め寄ってくる女子生徒の群れ

「ははは、ぼ、僕は向こうの席に行こうかな……」

そう言って違う席に座った。

「ちょっと、私が彼の隣に座るのよ!!」

「いいえ、わたしよ!!」

「はあはあ、今のうちに」

「」「」 抜け駆けするな!!」「」「」

そこは修羅場だ……

「」「」 じゅんむにゃむにゃ……」

アレルは寝ていた

とことこ・・・ポスン

「う、うん」

音がしたので目を覚ましたアレルはふと横を見ると、今朝見た女の子が自分の隣に座っていた。

「やあ、おはようタバサ」

朝会った蒼い髪の少女がアレルの横に座っていた。

「・・・おはよう」

読んでいる本から顔を上げ挨拶をするタバサ。

「くっくっ、まだ前の席が」

女子生徒は今度は血走った目を席に向けるが、ちょうど先生が入ってきたので、泣く泣く他の席に座った。

「さて、本日は自己紹介をしてもらおうかな」

担当の先生が言ったので前の席から順番に言っていく

「キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェ

ルプストーよ。よろしくね」

周りの男共から歓声上がる

「すっげーあの胸!!」

大胆に胸のボタンをはずしているキュルケに男共からの熱い視線が集中。

反対に女子からは死線がおくられる・・・が、全く気にしないキュルケであった。

次はタバサの番になり

「・・・タバサ・・・」

そう言ってタバサは座った。

「」「」「・・・」「」

周囲が鎮まった。

「はあはあ、お人形にみたい、部屋で飾りたいな」

一部危険な発言が!!

次の瞬間、その男は教室の壁に氷の刃でつながれることになる・・・

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ」

あれがヴァリエールの三女かという声が聞こえてくる

最後に

「アレル・ラ・フォン・ランカスターです」

そう言って笑顔で挨拶する。

「はっつー!!」

「付き合っつて!!」

「あいつは男、あいつは男・・・」

「（いろいろな人がトリスティンにいるな・・・本当に・・・）」
笑みを絶やさずアレルは席に座る。

「それでは本日はこれからあなたが学ぶことを簡単ですが、担当の先生に説明していただく予定です」

「どうやら、今日は授業らしいことはしないようだ。」

「はっはやくお昼にならないかな・・・」

アレルはもう昼ご飯のことを考えている。

「「あれだけ食ってもうお腹がすいたのか!?!?!」

全員の共通認識

「?」

先生は知らないようなので首をかしげる。

それから、さまざまな科目の先生が自分の授業に対して熱心に生徒に説明していた。

そして

「私は『疾風』のギトー。風のスクウェアだ。今年の生徒のレベルはあまりに低い!?!」

最悪の教師ということをみんな思った

「今年はドットがほとんどで、ラインが数名、トライアングルは一名で、スクウェアはいない。

そのトライアングルも水のトライアングルでしかも留学生のミス・ランカスターだ」

一斉にアレルに視線が集中する。

「まったく、今年の生徒は不作だな。私が君たちぐらいの頃の者達は、ほとんどの生徒がトライアングルだった。

それに、スクウェアが何人もいた。その中でも私は早くから風のト

ライアングルとして、日々魔法技術を磨いたものだ。

さて、諸君なぜ『風』が最強であるといわれる所以は知っているかね」

ギターは自分の得意な系統の魔法を自慢し始めた。

「それは単に私が『風』のメイジだからというわけではない」

「……（いや、思いつきりそうだろ）……」

声には出さずクラスみんなの考えが一致した。

「さて、ミスタ・ランカスター。君は水のトライアングルらしいが『水』が『風』に勝つことができない理由を知っているかね？」

『水』は攻撃より防御や治癒系の魔法がほとんどなので、そもそも『風』は攻撃魔法が多いから全く逆の性質なのだ。

それを比べるのはおかしいが、ゲルマニアの野蛮人の生徒がトリステインの生徒より優秀であることに、ギターは納得がいかなかったのでアレルに質問を投げかけたが

「ZZZZZZZZZZ」

アレルは、ギターの話が長いので眠っていた

「……」

「ふふふ、私の話の最中に居眠りをするなんて……」

そう言って、ギトーは杖を出して呪文を唱え

「エア・ハンマー!!」

見えない空気の塊がアレルに向かっていった

「キヤー」

生徒の一人が叫んだ

しかし、ギトーの放った魔法は突然現れた水の壁によって防がれた。

「なっ!!」

自身の魔法が防がれたのを見てギトーは思わず声をあげる。

「……何のまねですか？ミスタ・ギトー」

教室中が鎮まりかえった。

「無防備な生徒に魔法を放つことが教師のすることですか？」

「ぐっ……」

アレルの言うことに反論できないギトー。

「……先ほど先生は『水』は『風』には勝てないと言っていましたよね？」

「……ああ、そうだ」

「では、先生の『風』魔法はどうして僕の『水』魔法で防げたんですか？」

馬鹿にするようにアレルはギトーに言う

「なっ！！」

メイジが長い詠唱をするのとしないとでは魔法の威力が全く違う

詠唱が短ければ、同じ魔法でも威力が落ちるし逆に長い詠唱は威力が上がる

メイジの魔法は『火』、『水』、『風』、『土』の4系統がある

各メイジはいずれか一つの系統を得意とし、その系統の使い手と呼ばれる

魔法の熟達により複数の系統を使いこなすことも出来る。

同時に系統が増えるにつれドット（1系統のみ）

ライン（2系統、又は一系統の2乗）

トライアングル（3系統）

スクウェア（4系統全て）の使い手と呼ばれる

それなのにギトーの放ったスクウェアの魔法をトライアングルのアレルが防いだのだ

「本当にスクウェアなんですか？」

黒い笑みを浮かべるアレルにギトーは

「なんたる屈辱！！ミスタ・ランカスター表に出なさい！！」

真っ赤になりながら、アレルに言うギトーを見て

「いいですよ、退屈していたところですし」

アレル自身もやる気まんまんだ

「おっ、おい、やめなよアレル」

ギーシュが話しかけてきた。

「いいじゃないか」

「トライアングルの君がスクウェアの先生に勝てるはずないだろう
！！」

「そうでもないさ、要は戦い方だよ」

「よろしい、君に『風』の魔法について特別授業をしてあげよう。
広場に来たまえ」

そう言ってギターは出て行った

「じゃあ、行ってくる」

そう言って、アレルは広場に向かった。

「あ、あ……どうすれば……」

ギーシュはおろおろしていた。

「ふふふ、面白そう」

キュルケはつぶやいた。

「……」

無言で広場に向かうタバサ。

他の生徒も広場に向かっていった。

授業開始（後書き）

いかがでしょうか、感想をお待ちしています

決闘騒ぎ(前書き)

ギトーVSアレルの戦いが始まる？

それではどうぞー！

決闘騒ぎ

マチルダ side

「あんの、クソじじいが!!」

美しい？鬼がいた？

マチルダの仕事は学院長のオスマンの秘書なのだが、オスマンはマチルダの尻をなでたり、自分の使い魔を使ってスカートの中を見たり……

セクハラをしてくる……

もちろんマチルダはオスマンにきついお仕置きをしているのだが、その行為は一向に無くならない。

「あゝ!!今度ゴーレムを使って潰してやろうか!!」

……かなりストレスが溜まっているようだ。

さらに、この学園の男の教師から下心が丸見えの誘いをマチルダは何度も受けている。

コルベールとか、ギトーとか……

コルベールは食事に誘ってくるくらいだが、ギトーは自分が貴族で『風』のスクウェアということを理由でマチルダに肉体関係を強要してくる。

マチルダはまだ20代だがハルケギニアでは十分いきおくれの年なのだ。

それでも、マチルダの容姿はかなり美人の部類に入る。

長い緑色の髪と柔らかな物腰、男心を揺さぶる豊満な胸……

たまにオスマンはその胸を揉もうとしてくるが……マチルダの回し蹴りが後頭部にヒットして床とキスすることになる。

ギトーはマチルダを無理やり自分の部屋に連れ込もうとしたことがあるが、マチルダの蹴りをくらってダウンした。

幸いなことに、その時の記憶がギトーはなくなっている。

マチルダはオスマンの秘書という立場だが、貴族ではなく平民なので貴族の命令に逆らうことは本当はできないが……

相手の後頭部を回し蹴りすることで記憶を奪う技術を会得した。

「はあく、何やってるんだろ」

自分がこの学院に来た本当の理由を思い返しながらため息をつくマチルダであった。

前のほうからコルベールが慌てて走ってきた。

「あら、コルベール先生どうされました？」

瞬時に顔に笑顔を浮かべコルベールに話しかけるマチルダ。

「あつ、ミス・ロングビル。どうしたもこうしたもありませんよ」

コルベールはかなり焦っているようだ。

「？」

「ミスタ・ギトーが生徒の一人と決闘もどきを始めようとしているんです」

「!?!」

本来、貴族同士の決闘は校則で禁じられている。

学院の教師が校則を破っては生徒達に示しがつかない。

「至急、オールド・オスマンに取り次いでください」

「わかりました。こちらに」

マチルダはコルベールと一緒に学院長室に向かった。

コルベールと共に学院長室に向かう途中

「それにしても生徒と決闘なんて・・・」

「ミスタ・ギターは授業の一環だと言っていましたか・・・」

学園内では基本的に貴族同士の決闘は禁止されている。

「その生徒はいったい誰なんですか？」

「ゲルマニアの留学生のミスタ・ランカスターです」

「！！アレルですって！？」

思わず声をあげてしまう

「？ミス・ロングビル？」

「い、いえ、なんでもないです」

「とにかく、はやく何とかしないと」

「・・・」

マチルダは考え込む

昔からアレルは少し抜けているところがあるが、しっかり者であることをマチルダは知っている。

そのアレルが教師と決闘なんてするだろうか？

「・・・コルベール先生」

「はい、何でしょう?」

「決闘に至った経緯をご存じで?」

「え〜と、何でもミスタ・ギトーが居眠りをしていたミスタ・ランカスターに攻撃魔法を放ったそうで」

「教師が生徒に攻撃魔法を放ったんですか!？」

「ええ、私はそう聞いています」

まだ入学したての一年生に対して攻撃魔法なんて放ったら下手したら死ぬ

それも無防備の生徒に対して

明らかに、ギトーの暴走行為だ

しかもそれがアレルであるということはギトーはかなりまずい状況にある。

アレルは身分を隠しているとはいえ他国の王族なのだ。

下手したら外交問題に発展する。

もし、ゲルマニアが攻め込んできたらほんの数日でトリステインという国は地図上からなくなるだろう。

マチルダはアレルの部屋で話をした時に、本当の身分についてアレル自身から教えてもらったので、今どんなにまずい状況かを、よくわかっている。

「……まずいですね」

「もちろんです。先生と生徒が決闘なんてするなんて」

「そ、そうですね（この国がなくなっちゃうよ）」

ようやく、学院長室に着いた。

「失礼します」

二人同時に部屋に入った。

「どうしたんじゃね？そんなに慌てて？」

のんきに煙草をふかしているオスマン。

「学院の一大事です」

コルベールはオスマンに訴える。

「何がじゃ？」

コルベールはマチルダに話したことをオスマンにも伝えた。

「……………やばい」

オスマンは真っ青になった。

考えていることはマチルダと同じこと。

トリスティンがゲルマニアによって滅ぼされる光景が浮かんだ。

「……………わし自ら止めに行く」

そう言つてオスマンは勢いよく立ちあがる。

が、次の瞬間

ぐきっ！！

いや〜な音が聞こえた。

「ぐぐぐあ〜」

オスマンは腰を押さえながら床で転げ回った。

「「オールド・オスマン!?!」」

「……………ぎっくり腰じゃ」

「この非常事態に何やっているんですか!?!」

「うっうっ、すまん……」

「早く回復魔法を!?!」

「それにはおよばん!?!」

「へっ!?!」

「ワシのぎっくり腰はあることをすれば治るのじゃ!?!」

「?それはいつたい?」

「なに、ミス・ロングビルの胸を揉めば治るんじゃないよ」

セクハラ発言をしてるし……

「なっ!?!」

自分の胸を隠すようにオスマンから離れるマチルダ。

「な、なんてうらやま……!?!ほん!?!ほん!?!」

本音が出ているぞ、コルベール。

「……」

マチルダからの冷たい視線がかなり痛い。

部屋の温度が急激に冷えてきた。

「……のう、ミス・ツルベール」

「私はコルベールです!!」

「そんなことはどうでもいいんじゃない」

「よくないですよ!!」

「そんなことより、あれ……」

オスマンの指をさした先に阿修羅が降臨していた。

「……」

オスマンとコルベールは大量の汗が流れてきた。

「……ふ……ふふふ」

極上の笑みを浮かべオスマンとコルベールをみるマチルダ。

「「ミ、ミス・ロングビル?」」

オスマンもコルベールも思わず後ろにさがる。

「お二人とも……覚悟はいいですね？」

オーク鬼ですら裸足で逃げ出してしまうようなプレッシャーをマチルダは二人に向けていた。

「ひっ……た、たす」「

「問答無用です……！」

巨大なゴーレムの腕が二人をつかみ握りしめた。

「「ぎゃ〜!!」「

学院中に響き渡るほどの叫び声をオスマンとコルベールはあげるが、マチルダの『サイレント』によって誰にも聞かれなかったのは幸いだ……

「さて、ゴミ掃除も終わったしあたしが行くか」

そう言って、マチルダは広場に向かった。

その後、二人は新しい性癖に目覚めたとか目覚めなかったか……

マチルダ side out

決闘騒ぎ(後書き)

感想お待ちしています。

突然の告白（前書き）

ご意見・ご感想をお待ちしております。

突然の告白

場所：広場

たくさんの生徒の中心にアレルとギトーが向かい合って立っている
アレルとギトーが決闘をすることは、すぐに学園中に広まった

他のクラスの生徒たちも退屈な先生の話より、こっちのほうが楽しい
と思ひあつという間に広場には人が集まった

「さて、ミスタ・ランカスター。あくまでこれは特別個人授業であり、決闘ではない」

ギトーは学園内で貴族同士の決闘が禁止されているので、建前を一応述べた

「ええ、わかっています。トリステインのスクウェアクラスがいかにすごいかを僕自身、知りたいので」

アレルも問題ないようだ

「では、始めよ・・・」

と、言おうとしたとき

「待ちなさい!!」

マチルダが二人のところに来た

「これは、ミス・ロングビル。相変わらず美しいですね」

似合わないのに、キザッたらしくマチルダに話しかけるギトー

「あなたたち何をしているんですか!!」

「何といわれても、授業ですよ、『授業』」

ギトーはそう言いながらマチルダの方に近づき肩を抱きながら言った

「(さわんじじゃないよ!!)しかし、どう見てもこれは決闘ではないですか?」

「何、ゲルマニアとトリステインのメイジの力を生徒に教える目的もありますし、何より、野蛮人にトリステインの流儀を教えてやるのも教師である私の仕事ですから」

正論っぽく聞こえるが、ギトーは単にアレルをボコボコにしたいだけなのだ

「いいえ、だめです。すぐにこのようなことは止めてください」

「まあまあ、落ち着いて、ミス・ロングビル。そもそも君に私の授

業を止める権利はないのだから」

「くっ……」

マチルダはオスマンの秘書であるが平民なので貴族であるギトーを止めることができない

今、この決闘を止められるのは、同じ貴族の先生か学院長ぐらいなのだ

その、学院長はさっきマチルダによって潰されてしまった……

他の貴族の先生はスクウエアのギトーに強く言えず、傍観しているだけなのであてにならない

「（これだったら、あのはげ頭がいてくれれば……）」

コルベールも学院長と一緒に潰してしまった……

「でも、万が一、怪我でもされたら……」

「おや？そんなに私のことを心配してくれているのかな？ミス・ロングビル」

「……はっ？」

マチルダはアレルのことが心配でこの決闘騒ぎを止めようとしているのに、ギトーは自分のことを心配しているのだと勘違いしているようだ

「まあ、私が負けるなんてことはないから心配無用!！」

「.....」

「すぐに終わらせるから待っていてくれたまえ、終わったらゆっくり話をしようではないか。二人きりで」

笑顔でマチルダを口説くギトー

「(何言っただいこいつは!!)え、遠慮します.....」

と、マチルダは言うがギトーの中では、さっさと、アレルをボコボコにして、マチルダとあんなことや、こんなことをすることしか頭にない

「さあ、始めようか!！」

鼻息を荒くしながら、アレルの方を向くギトー

「.....」

「「「「.....」」」」

アレルも周りの観客の生徒達もギトーに死線を送っている

「な、なんだ、その目は!！」

「いえ・・・」

「その可哀そうな者を見る目をやめたまえ!!」

「ちょっと、アレル!!」

そう言って、マチルダはアレルに話しかけた

「? なんですか?」

「あんた、何してるんだよ!!」

「先生との決闘が?」

「わかっているならやめなさい!!」

「大丈夫だよ、別に殺したりしない」

「こゝろ」

マチルダはアレルの口にしたことに驚いた

「いかなる理由があるにしても、僕のマチルダに手を出そうとして
いる奴にはお仕置きをしないとね」

いたずらっ子のような顔で、マチルダに小声で言う

「っ!?!?」

突然のアレルの告白にマチルダの顔は真っ赤になる

「ア、アレル……」

「もちろん、テファも好きだから」

「なっ!?!」

アレルはマチルダとテファのことが昔から好きなのだ

「じゃあ、殺ってくる」

そう言って、アレルはギトーの方向かっで行った

「……まったく……」

マチルダは昔より成長したアレルをみて思わずため息をつくがさつきから心臓が早く動く

「あたしとテファ、二人とも好きなんて……」

ゲルマニアの王族は一夫多妻らしいことをマチルダは聞いたことがある

「まったく、天性の女ったらしだね」

すこし、複雑な気持ちではあるが、うれしいマチルダであった

突然の告白（後書き）

いかがでしょうか？

アレルの使うオリジナル魔法の名前がうまく浮かびませんでした。
だれが良い名前があれば教えてくださいー！！

感想お待ちしています。

アレルVSギター（前書き）

ようやく更新できました……
次から更新は土・日になると思います

アレルVSギトー

マチルダから離れ、アレルはギトーと対峙した

「君はミス・ロングビルと何を話していたのだね？」

少し機嫌が悪そうにアレルに聞くギトーに

「なに、たいしたことではないですよ」

「・・・まあ、いい、では始めよう」

「ええ、殺りましょう」

そう言っつて二人とも杖を構え

「私はギトー。二つ名は『疾風』のギトー。風のスクウェアだ」

決闘は互いが名乗り上げることから始まる

「僕はアレル。二つ名はまだ決めていません。水のトライアングルです」

「」「」「」「」

ギャラリーも固唾をのんで見守る

「では、こちらからいくぞー！ー！」

そう言ってギトーは詠唱を始める

「ウィ……」

「おそいー!」

そう言ってアレルは杖に魔力を込め、杖先にブレイドをまとわせ、ギトーに斬りかかる

「つく!?!」

ギトーはその場で詠唱をしていたので、突然のアレルの動きについて行けず、喉元にブレイドを突きつけられる

「「「……」」」

周りのギャラリーもアレルの予想外の動きについて行けずに黙ってしまう

「……勝負ありましたね」

ギトーに突きつけたブレイドを下げ、アレルはそう言った

「……」

ギトーは茫然とした

「（自分が負けた？たかが学生に？スクウェアの私が……）」

自分の魔法に絶対の自信があったギトーは始まって一瞬で決着がついたことが理解できずにいた

「やっぱり、ゲルマニア人は野蛮だな」

生徒の一言でギトーは正気を取り戻した

「「「そうだ!!」「」」

複数の生徒がアレルの行為を非難し始めた

「（全く、トリステインの貴族は・・・）」

ため息をつきながら、アレルはその生徒達の方を向いた

「私の戦い方のどこが野蛮なのですか？」

「ミスタ・ギトーが詠唱中なのに攻撃したところだ!!」

「はっ？」

「それでも、君は貴族か？」

「・・・」

「正々堂々と勝負をしないなんて、これだからゲルマニアの野蛮人は・・・」

「・・・あなたたちは馬鹿ですか？」

「なっ!？」

アレルの発言に非難をした生徒は顔を怒りに歪ませた

「どこがおかしいんだ!!」

「戦いの最中に、敵に詠唱する時間を与えるのですか？」

「……」

「ミスタ・ギトーは無防備に止まって詠唱をしていたのですよ。戦場で敵は相手の詠唱が終わるまで待つてなんてくれませんよ」

「……し、しかし……」

「トリステインは伝統を重んじる国だそうです。敵国のメイジの詠唱が終わるまで待つのですか？」

「そ、それは……」

アレルが言うことは正しい

敵の魔法詠唱を待つなんてことはしないのが普通であるということだ

アレルは騎士団を率いた戦いで無防備に立ち止まり、魔法の詠唱をしているメイジを何人も殺したことがあるのだ

「ミスタ・ギトーは詠唱する時に、無防備にも立ち止まったから隙

ができ、僕に負けた。ただそれだけのことです」

「「「・・・」」」

アレルを非難していた生徒は黙った

「はあく、そんなに今の勝負が気に入らないんだっいたらもう一度やりますか？」

「・・・私をなめているのかね？」

ギトーは怒りの表情を浮かべアレルを睨んだ

「いえ、なんだか今の戦いに納得のできない人が多いようなので、それにミスタ・ギトーも納得していないんでしょう？」

アレルの言うことは正しいのだが、ここにいる生徒達は戦いを経験したことがあるものは、ほとんどいない

キュルケやタバサはアレルが言うことが正しいと分かっているが、大部分の生徒はアレルの戦い方に対して不満がある

特にルイズは先ほどからアレルの行動が気に入らなくてイライラしている

「（あんなのが私達と同じ貴族なんて信じられない！！）」

と、思っている

「では、次はトリステイン風にミスタ・ギトーの詠唱を待ってから始めましょう」

「……ふふふ、（後悔させてやる）」

不気味に笑うギトーは再び杖を上げる

「後悔はしないでくれたまえ……」

そう言って詠唱を始めるギトーに

「ええ、どうぞゆっくり詠唱してください」

笑顔でギトーを挑発するアレル

「その言葉、後悔させてやる……！」

そう言って、ギトーは詠唱を完成させた

「……『遍在』か」

アレルの目の前には、ギトーが3人いた

風のスクウェアが使うことができる魔法の一つで、それぞれが意思を持ち行動する魔法だ

精神力が多いほど作り出す遍在の数は増えるがそれに比例して大きく精神力を消費する

「（たった、三人かよ）」

アレルは、あまりにギトーが情けなく思えた

「『はあはあ、これで終わりだ!!』」

作り出した遍在もへばっているが、

アレルに『ブレイド』を使って斬りかかってきたり、
『エア・ハンマー』を放ってきたりする

「……（仕方ない、少し本気を出すか）」

ギトーの攻撃をかわしながらアレルも杖をふる

「『もらった!!』」

三人のギトーが『ブレイド』でアレルを突く。

「『なっ!?!』」

アレルの身体にブレイドが突き刺さる

「キヤー」

生徒の悲鳴がギトーにも聞こえてくるが

「（しまった……）」

自分が生徒を傷付けてしまったことにギトーは動揺している

「は、はやく、治療を!!!水のメイジは!!!」

マチルダでさえこの状況に気が動転していた

「(アレルが、アレルがやられるなんて・・・)」

そう言っつて、水のメイジである生徒とアレルのもとに駆け寄ろうとするが

突然アレルの身体が霞のようになり、消えた

「「「「えっ!?!」「」「」

周りの生徒達もアレルが消えてしまったことに驚き、アレルを探した

「やれやれ、まだ、“授業”は終わっていませんよ、ミスタ・ギト

」

姿が見えないのにアレルの声が聞こえてくる

「「「「どこにいる!?!」「」「」

ギトもあたりを見回すが、アレルは見当たらない

「ああ、失礼、姿を消したままでした」

突然アレルが現れる

「「「「なっ、何だ、その魔法は?」「」「」

今まで見たことがない魔法をアレルが使うことに恐怖を感じるギトー

「ああ、これ『ミラーージュ』（蜃気楼）と言う魔法です」

「……そんな魔法は見たことがない」「」

「当然ですよ、僕が作ったオリジナル魔法ですから」

さも、当然とばかりに言うアレルにギトーも周りにいる生徒達も驚く

なぜなら、オリジナルの魔法を作るのは非常に難しいからだ

既存の魔法は比較的簡単に覚えることが可能だが

新たに魔法を作るとは、長年メイジとして研究を重ねた者のみが到達する領域なのだ

新魔法は、100年に一つできれば良いほうで、

それでも、新しくできた魔法は使い勝手が良くないものが多い

しかし、アレルが使った魔法はそんな風には見えない

ギトーや周囲の生徒達をだますほどの完成度がある魔法なのだ

「……いったい何なんだ？その魔法は？」「」

教師であるギトーですら、理解できない魔法

「簡単に言えば、水の魔法でこの周囲の空気の密度を急激に変えて、光を異常屈折させただけですよ」

「「「「「？」「」「」」

ギトーも生徒も分からないようだ

「そして、この魔法を応用すると

そうやってアレルは杖をふるう

「「「「「！？」」「」「」

アレルが10人に増えた

「「「「へ、遍在か？」「」

「いえ、違います。そうですね・・・『シャドウ・ミラージュ』とでも言いますかね」

10人のアレルがギトーの『遍在』のように同時に言う

「まあ、『遍在』の『水』版ですかね」

考え込むようにアレルはギトーに言う

「「「「「・・・」(これで、本当に『水』のトライアングルなのか?)
「「」

当初の目的はすでにギトーの中では無くなっていた

あまりに、アレルが規格外の生徒であることをギトーも周りの生徒も理解した

「さて、続けましょうか」x10

10人のアレルが杖を構えた

「……(勝てない……)」

すでに、自分がアレルにかなわないことを、ギトーは理解している

「……(しかし……逃げるなんてことはしない!!)」

ギトーも杖を構えた

「これを見て、まだ戦うのですか……いいでしょう、ミスタ・ギトー。」

あなたの最強の呪文を僕に放ちなさい」

「……情けか？」

「いいえ、あなたのその行動に敬意を払っただけです」

そう言って、笑顔でギトーに話すアレル

「……いいだろう、私の本気を見せてやろう」

そう言って、三人のギトーは詠唱した

「「「これが私の全力だ！！ライトニング・クラウド！！」」」

強力な風系統の魔法である雷（電撃）がアレルに向かう

アレル達の目の前に水の壁が現れ、それにギトーの放った攻撃があたり、周囲に水蒸気が発生した

「はあはあ」

ギトーはすでに精神力のすべてを使い果たし、遍在も消えていた

「はあはあ、これでどうだ」

発生した水蒸気でアレルの姿は見えないが、ギトーの攻撃は間違いなくアレルに当たった

だんだん、水蒸気が消えてなくなり、そこには無傷のアレルが立っていた

「なかなか、いい攻撃でしたよ」

と、アレルはギトーに言う

「では、僕の番ですね」

10人のアレルの杖の先から水色の魔力が空の方へ延びていったんだんだんと雲が集まってきた

「頑張つて受けてくださいね」

雲の中から水色の巨大な龍が現れた

その龍からは巨大な力を感じる

その龍の口に光が集まり、ギトーに放たれる

「ギヤー」

ギトーの叫び声が響く

「……………(死んだんじゃね?)」「……………」

その龍から放たれたブレスはそこら辺の龍なんて比較にならない威力だ

煙が晴れてぼろぼろのギトーが現れた

どうやら、気絶しているようだ

「……………(無事なのか?)」「……………」

「安心して、寸止めだから」

笑顔で言うアレル

「……………(絶対違う!!)」「……………」

「一応、回復させとくか」

そういつて、ギターに杖をふる

水色の光がギターを包み、みるみる傷を治す

「これで、大丈夫」

レビテーションでギターを浮かべて医務室に向かうアレルの後ろ姿を見た生徒は後日

「」（アレルを怒らせないようにしよう）「」

と、いうことが決まったらしい

この事件は後に「水帝の怒り」と言う伝説になり、トリステイン魔法学院に代々語り継がれることになる

「……」ルイズはアレルがギターにかけた回復魔法が秘薬を使わずあれほどの怪我を直したことに驚き

「……もしかしたら、あいつの魔法だったら、ちい姉さまも……」

そうつづやいた

アレルVSギター(後書き)

感想お待ちしております

キュルケ(前書き)

これから、毎週土曜日に更新する予定です。

キュルケ

ギトーとの決闘から数日がたった

「シエスタ、紅茶とケーキおかわりちょうだい」

「はい、ただいま」

午後の優雅なひと時

アレルは校庭で優雅に午後のティータイムを過ごしていた

「・・・しかし、本当にアレルはよく食べるね・・・」

アレルと同じ席で一緒に紅茶を楽しむギーシュが言う

「マルトーさんのケーキは絶品だからね」

シエスタからおかわりのケーキを貰い嬉しそうなアレル

「やれやれ、これがあの『水帝』の二つ名を持つものとは・・・」

アレルとギトーの決闘後、周りの生徒が勝手にアレルの二つ名を『水帝』と呼ぶようになった

「みんなが勝手につけたんじゃないか、その二つ名」

本当のアレルの二つ名はあるのだが、身分を隠している以上、それを使うことができないのは、仕方がない。

先ほどから、アレルとギーシュの座る席の方に、周りの女子生徒から熱い視線が集まる

あの決闘以降、アレルの学院での人気はうなぎのぼりなのだ

ギターからセクハラを受けた女性陣、特にメイドからの支持が多いアレルの平民を差別しない言動も平民から多くの信頼を勝ち取っている

「あつ！ケーキがもうない！！」

おかわりのケーキも食べてしまったアレルはしょんぼりした顔をする

「……はうつー！！」「……」

そんなアレルを見た女性陣の母性本能をくすぐる

「失礼、ミスタ」

「はい？」

顔を上げると、赤い髪の子が目の前にケーキののった皿が置いた

アレルの眼がきらきらと光った

「よろしければどうぞ」

「いいの！？」

「ええ」

「ありがとう」

満面の笑みを浮かべケーキを食べるアレル

「……はふん」「……」

さらに女子生徒の母性に直撃するようなことを無意識にやるアレル

「（これは・・・）そ、そう。喜んでいただけただけかしら」
女子生徒は顔を真っ赤にしながら言う

「隣、よろしいかしら？」

「いいよ〜」

「僕もかまわない」

アレルとギーシュも同意する

「え〜と、君は確か・・・」

「キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーよ」

「ああ、そうそう」

まだ、クラスの生徒の名前を全員覚えていないアレル

「で、どうして僕に声をかけたの？」

「あら、最近有名な『水帝』に興味がない人はいないと思うのだけ
ど」

「確かに・・・」

キュルケの話に同意するギーシュ

「そうなの？」

「」「」「そうだ（よ）」「」

キュルケとギーシュ以外の生徒もうなずく

「ふん、キュルケは僕なんかに興味があるの？」

「そりゃ、生徒が先生を負かしてしまうなんて話を聞いたらね・・・

」
ギ・シュは目の前でケーキを食べるアレルにあきれながら言う

「（くそ、僕だって・・・）」

内心アレルに対して対抗意識を向けるギーシュだが勝てる要素がないので黙る

「（うふふ）」

アレルと話をしながらキュルケは自分の情熱に火がつく

アレルの興味はケーキのほうにいつてしまっている

「ミス・ツエルプストーはゲルマニアの出身だったかな？」

ギーシュがキュルケに話をふる

「ええ、そうよ。ミスタ・ランカスターと同じね」

「へえ、またどうしてトリストインに？」

「実家から逃げてきたのよ」

「へっ？」

アレルもキュルケの話に反応した

「ミス・ツエルプストー、それは何故に？」

「キュルケでいいわよ」

アレルは最初から呼び捨てにしている

「じゃあ、キュルケはなんで実家から逃げたの？」

アレルはキュルケに聞く

「家の親が私を無理やり結婚させようとしたのよ」

「へ〜、別に普通のことじゃないか？」

貴族が若いうちから結婚するのはハルケギニアでは当たり前のことなのだ

早くに結婚しその家の跡継ぎを生むことは貴族の女にとって、重要な役割である

「・・・60歳を超えるお爺ちゃんでも？」

「「・・・」」

「（年の差がある結婚はよくあることだが、さすがにそれだけ離れていると・・・）」

さすがにアレルもこの結婚をキュルケが嫌がるのは無理ないと考えた

「さすがに年が離れすぎだね・・・」

「確かに・・・」

「本当よ、全く。いくら、ゲルマニアで実力がある貴族らしいけどね、年がね・・・」

「(ツエルプストーの当主は何をやっているんだか)」
キュルケの父親とはパーティや軍事の会議でアレルは何度か会ったことがある

「(典型的なゲルマニア人だもん仕方がないか。ゲルマニアが「成り上がりだ」とか「野蛮」とか言われる所以は完全な実力主義の社会なのだからしょうがないが、自分の娘まで道具として使うか?)」
そう考えながら、ふと思いついた

「(あれ?確かパーティで会ったことあるよな)」
ケーキに夢中で今まで忘れていたアレル

「(やっぱ、王族だつてことばれているよね……)」

「そうそう、ミスタ・ランカスター」

「ああ、アレルでいいよ、キュルケ」

「あらそう?じゃあ、アレル。あなた、私と会ったことがあるわよね」

最上級の笑みを浮かべながらアレルの手を握るキュルケ

「(やっぱり)……えっと、たしかパーティで何度か……」

「そうよね、やっぱり」

キュルケは確信した

「(ふふふ、この子を恋人にできれば、無理な結婚をさせないでしょ)」

キュルケはアレルを利用して縁談話などを回避しようと考えていた

「（それに、うまくいけば、玉の輿）」

「あの、キュルケさん……」

「なあに、ダーリン」

いきなり、アレルの呼び方が変わる

「ダ、ダーリン!？」

「ぶっ!?!ごほごほ」

すっかり、蚊帳の外状態のギーシュが紅茶を噴出した

「なんで?」

「ふふふ、私の二つ名は『微熱』なの。いい男は大好きよ」

「ははは、それは光栄だね、キュルケ。でもね」

そう言つて、アレルはキュルケの後ろを指さす

「?」

キュルケが振り返ると後ろに数人の男子生徒が立っていた

「キュルケ、僕との約束は?!?!」

「おい、何言っているんだ、彼女は僕と約束したんだ!」

「違うよ、ぼくだ!」

E t c …

「え」と
アレルの方を向くキュルケ

「なるほど、『微熱』の二つ名はこういう意味なんだ」

「いいえ、彼らとはお友達の関係だけなのよ」

「（なんだか、男共が一齐に自分が恋人だと主張しているんだが）
そうなんだ」

笑顔を崩さずキュルケと話す

「ええ、今の私はアレル、あなたしか映ってないわ」

「ふん、じゃあ、ゆっくりお話をしようか、僕の部屋で
キュルケの顔を自分の方に近づけい」

あと少しで唇と唇が触れそうな距離で話すアレル

「え、ええ……」

自分から誘っておいて、声が裏返ってしまうキュルケ

「「貴様！！彼女から離れろ！！」」

自称、キュルケの彼氏達がアレルに杖を向ける

「じゃあ、行こうか」

「ええ、もちろん」

キュルケはアレルの腕に自分の胸を押しつけながら歩きだす

「「無視するな〜！！」」

三人から『火』『風』『土』の魔法が放たれる

「まったく」

そう言つてキュルケを抱き上げる

俗にいうお姫様抱っこをして、アレルは足に風の魔力を込め飛び上がる

「っ……」

アレルにお姫様抱っこされている、キュルケの顔は真っ赤
ゆっくり、着地するアレルとキュルケ

「やれやれ、トリステインの男はレディのエスコートも満足にできないのかい？」

キュルケをおろしながら魔法を放った貴族に言う

「はん、これだから野蛮人は」

また、ゲルマニア人だからという理由だけでアレルを馬鹿にする
さすがのキュルケもむっとした表情になる

「……」

「言いたいことはそれだけかな？じゃあ、キュルケ行こうか」

「そうね」

二人はそう言つて歩きだす

「おい、まだ終わっていないぞ！！」

「野蛮人なんだろう？君たちからしたら、僕もキュルケも」

「っっあっ……」

「そうね、熱も冷めてしまったわ」

「」「」「」「」

「僕を無視するのは伯爵家を敵にすることでもいいんだな!」
約一名、負けず嫌いがいた。

「だから？」

「なに!」

「自分じゃ勝てないから、親の権威を振りかざすんだ」

「なんだと!」

「君が親の権威を使うのなら、僕の家は侯爵家だよ」

「」

「伯爵家の君が侯爵家の僕を非難していいの？」

男は黙ってしまった。

「じゃあね」

再び歩きだす

「」

「」

「こんな礼儀知らずの奴の親なんてたいしたことないだろ」

「ああ、たぶん彼の親は薄汚い平民だろ」

「そうとも、誇り高い貴族のはずがない」

「はは、もしかしたら、貴族の側室の子かもな」

「そうだな、平民の女なんじゃないか」

アレルに対する誹謗が両親の誹謗中傷に変わる

「………言いたいことはそれだけかい？」

先ほどからアレル達のやり取りを見ていた生徒たちは彼らの近くから離れる

アレルは顔は笑顔だが、目から光が消え、その生徒達を見据えた。

「僕自身についての悪口であれば、許そう………だが………」

アレルから膨大な魔力がにじみでる

「……ひっ」

三人はようやく自分が誹謗していた相手の力の強さを本能的に理解した

慌てて、逃げようとするが足がすくんで動けない。

「・・・僕の両親を侮辱するのは許さない!!」

「ちょっと、アレル」

キュルケがアレルに声をかける

「なんだい？」

「私も手伝うわ」

笑顔でアレルに言う

「ふふふ、そうだね、じゃあいつしよにお仕置きするか」

「ふふふ、そうね」

キュルケも杖を出して構える

「キュルケ」

「なに？」

「ちょっとおもしろいことをするから手伝って」

「? いいわよ」

「じゃあ、ちょっと失礼」

そう言っつてキュルケの手と自分の手を絡める

「えっ!？」

突然のことでキュルケは驚く

「じゃあ、いくよ」

そういうと、アレルはギトーとの決闘では使わなかった『風』の魔法を練る

「キュルケは『火』の力を練って」

「ふふ、わかつたわ」

キュルケはアレルの支持通り、『火』の力を練る

「……なっ、何をやる気だ?」

二人の練り上げた精神力が絡みあった手から溢れ、空中で混ざり合う

全てのものを燃やしつくす『火』

全てのものを吹き飛ばす『風』

二つの属性が混ざり合い、巨大な竜巻を作り上げる

『風』のスペルである魔法に似ているがその竜巻からは荒々しい炎がみえる

「合成魔法だよ『火』と『風』の」

「ヘクサゴンスペル?」

ハルケギニアの王家の者同士が扱うことができる魔法

その魔法は反則的な威力で王族の者でない者は打てないとされていた

「（やっぱり彼は……けどゲルマニアに始祖の血はないはず）」

キュルケの言う通りトリスティン、アルビオン、ガリアには始祖の血が流れているがゲルマニアには始祖の血は流れていない

王家にしか許されない魔法を平然と使っているアレルにキュルケは首をかしげる

「うんとね、王族しかヘクサゴンスペルが使えないっていうのは間違いだよ」

「そうなの？」

「うん、精神力の波長が似ている人だったら使えるよ」

「あら、じゃあ、あたしとダーリンはそうなんだ」
キュルケは嬉しそうに言う

「そうだね（本当は僕がキュルケに波長を合わせているからなんだけどね）」
本当は違つらしい

「さて」

アレルの両親を侮辱した生徒の方に顔を向ける

「……ひっ……」

顔面蒼白でアレルとキュルケを見てくる馬鹿共

「「じゃあ、逝つてらっしゃい」」
二人から最上級の笑顔をもらう

「「バーニング・ストーム」」

その魔法は馬鹿三人を飲み込んだ

「「「ギヤァァァ」」」

「「「「」」」」

ギャラリーもアレルが規格外すぎることに驚いた
それから、馬鹿三人がぼろぼろになって落ちてきた

「じゃあね（ようやく、キュルケと話ができるよ）」
馬鹿三人を放置して行ってしまっアレルとキュルケ

「「「「」」」」

後日、アレルの二つ名に『風帝』がプラスされた
馬鹿三人はこの後、アレルとキュルケに復讐を企てるのだがその話
はまた今度に

キュルケ（後書き）

いかがでしょう

ひねりがないへくサゴンスペル名ですが・・・

どなたか、こんな魔法を主人公が使ったらいいなという案がありましたら教えてください

誤字・脱字がありましたら教えてください

後、主人公の使い魔をどうするか案をください

今のところ無難に龍かと考えていますが、ペンギンとか人魚とかどうでしょう？

感想お待ちしています

偏見(前書き)

一週間ぶりの更新です。
毎週土曜日に更新します

偏見

場所：アレル自室

馬鹿貴族を締め上げた後、アレルとキュルケは男子寮最上階のアレルの部屋に行った

部屋に行く途中周りから視線が痛い

アレルはキュルケを狙う男子から視線

キュルケはアレルを狙う女子からの視線

二人ともゲルマニア人でありながら、学院内でトップの人気を誇る部屋に入ってからキュルケはアレルの腕に抱きつき自分の胸を押しつけていた

「ねえ、キュルケ」

「なあに？ダーリン」

「いつまで、抱きついているの？」

「ずっとよ」

ベツトに腰掛けながらアレルとキュルケは話す

「キュルケ、ここは男子寮の僕の部屋だよ」

「そうね。私とアレルの『愛の巢』ね」

「（おいおい）ははは」

「も、てれちゃって」

先ほどより強く胸を押しつけてくるキュルケ

「（やれやれ）じゃあ、こんなことをされても？」

そう言っただけでアレルはキュルケをベットに押し倒す

「……」

「キュルケって良い匂いがするね」

「そ、そう？」

アレルはキュルケの髪をなでながら言う

「ねえ、キュルケ」

「な、なに？」

「男の部屋に女が来るといふことがどういふことか分かるよね？」

「う、うん……」

キュルケはアレルにペースを崩されてしまい、いつもよりしおらしい

「あ、あのね、アレル」

顔が真っ赤になってしまっているキュルケ

「うん？なに」

「そ、その…私、初めてだから…や、優しくしてね…」

「…うん」

だんだん二人の唇が近づき…

あと少しで二人の唇が触れそうな時

来訪者を告げるベルが鳴る

「……………」

空気の読めない来訪者のせいで、さっきまで部屋に充満していた甘酸っぱい空気は霧散していた

「（やれやれ）誰か来たみたいだね……」

「……………そうね……」

キュルケは乱れた衣服を直しながら、ベットから起き上がる

アレルは鏡の所に行き、来訪者が誰かを確認した
ピンクの髪の少女が映っていた

「・・・ルイズか」

「・・・ヴァリエールですって!!」

「（ああ、そう言えば仲悪いんだっけ？家が）」

ルイズside

「アレル!! いるんでしょ!! 開けなさい」

アレルの部屋の前でピンクの髪の少女がドアを何度もノックしている
ルイズはこの前アレルの見せた魔法が、病弱な姉カトレアに効くか
もしれないと思いわざわざ男子寮に訪ねてきたのだ

「（なんで公爵家三女の私がわざわざゲルマニア人を訪ねなくちゃ
いけないのよ!!）」

ここに来る前に何度かルイズはアレルに接触しようとしたが、ルイズ自身の取り巻き（主にヴァリエールの名に群がってきた貴族）に邪魔されたのとアレルに群がる女子生徒達によって上手く接触できなかった

「さっさと開けなさい!!」

ゲルマニア人なんかに頭を下げるなんてことを本当はしたくないルイズ

ヴアリエール家とツエルプストー家の関係が悪いせいかゲルマニア人に差別的な考えをルイズは持っている

「（あゝ、魔法でドアを吹き飛ばそうかしら）」

メイドにアレルはいるかどうかを聞いたので、部屋にアレルは間違いない

「ふふふ、いるのは分かっているよ。出て来ないなら・・・」

そう言っ杖を出し、呪文を唱えようとするルイズ

しかし、次の瞬間、扉の横にいた甲冑が動き出し、ルイズを持ちあげた

「きゃゝ、な、なにすんのよゝ!!」

ルイズは足をつかまれ宙づりにされる

足をつかまれた時、ルイズは杖を落としてしまった

手をバタバタ振り回して必死に甲冑の拘束から逃げようとするがふりほどけない

「何やってるの?」

ルイズの視線の先に扉が開き、中からアレルがルイズを見ていた

ルイズ side out

「なにやってるの?」

部屋の前で甲冑に逆さにつるされたルイズがいた

「見てないで、早く助けなさい!」

必死に甲冑の拘束を解こうとする

「……ていうか、おさえなくていいの?」

「何を?」

「スカート」

「……はっ!」

只今、ルイズは甲冑に逆さにされている

つまり、スカートの中が丸見えなのだ

「うっう、は、早く助けなさい」

スカートをおさえて、ルイズはアレルに言う

「（はあく）はいはい、分かりました」

甲冑に指示を出し、ルイズを床に下ろす

「な、なんで、こんなものがあるのよー!!」

元々いた位置に戻る甲冑を指さすルイズ

「あゝ、なんでも警備用のゴーレムらしいよ」

「なんで、こんなところを警備してるのよー!!」

「ここが、特待生の部屋だからしいよ」

「あんだ、特待生なの？」

「そうだよ」

「「「「「「「」」」」」」」

ルイズはアレルがゲルマニアの留学生で水魔法がすごいぐらいの情
報しか知らない

「ちょっと、いいかしら」

アレルの後ろからキュルケが顔を出した

「な、な、な」

「「「な？」「」」

「なんで、ツエルプストーの女がいるのよ!!」

「「は?」」

場所を変えて、ただいま、アレルの部屋ではルイズがアレルの横にいるキュルケを机を挟んで睨みあっていた

キュルケは動じていないが

「さて、どんな御用かな?ミス・ヴァリエール」

「・・・話をする前に、その女を私の視界から消してくれない」

「あら、ずいぶんな事を言うのねヴァリエール」

「ふん、ゲルマニアの娼婦なんかが私の家名を呼ばないでくれる。汚れるわ」

「あら、そんなこと言っていると燃やすわよ」

「「ふふふふ」」

二人の視線がぶつかりあって火花が出てきている

「（あゝ、クッキーがうまいな）」

アレルは実家から送られてきたクッキーを食べながら二人の話を聞いていた

「そんな、重りなんかいつもぶら下げて大変ね」

「あら、なさすぎるのもよろしくないわよ」

「（紅茶もおいしい）」

「な、なくても困らないわよ!」

「あら、その大きさと殿方を満足させることなんてできないわよ」

「（長いいな）」

「うっ……でも、小さいのには小さいの良さが……」

「あら、それは是非教えてほしいわミス・ヴァリエール」

「「「なによ」」」

完全に来た目的を忘れているルイズ

「ねえ、アレル」

「うん？」

キュルケがアレルに話をふる

「やっぱり大きいほうがいいわよね？」

自分の胸を手で持ち上げ協調するキュルケ

「う、私だって、ちい姉さまみたいになるんだから・・・」

「誰よ、それ」

「私の姉で・・・あっ!？」

何かを思い出したみたいだ

「「?」「」

「アレル!! あんた、この前決闘が終わった時に使った回復魔法を
教えなさい!!」

「「(人にもものを頼む態度か?)」「」

どこまでも相手を見下すように話すルイズ

「この私、ヴァリエール家の三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・
ブラン・ド・ラ・ヴァリエールに魔法を教えるなんて光栄なことな
のよ」

「「(何言ってるんだ(よ))」「」

「さっさと、教えなさい」

「(うん) いやだ」

「な、なんでよ！！この私ルイズ・フランソワーズ・ル」

「だって、人にものを頼む態度？トリステインの貴族って礼儀知らずなの？」

「なんですつて！！」

「ゲルマニア人だから、そんな風に言うんでしょ？」

「・・・」

「凶星か」

「はあく、いい加減にしてほしいわよね」

キュルケも同意する

「・・・」

「用事がそれだけなら、帰ってくれるかな？」

「・・・そんなこと言っているのかしら」

「なんで？」

「・・・私はトリステイン公爵家の娘よ。」

「で？」

「私の家系はトリステインの王族と親戚関係なのよ」

「……」

「その私のお願い（命令）が聞けないのかしら」

「……」

アレルとキュルケはあきれていた

「（……）」

部屋の温度がどんどん下がってきた

「そもそも、野蛮人であるゲルマニア人が公爵家の娘のお願いを（命令）を受けるなんて名誉なことなのよ」

アレルの目つきがどんどん冷めていくのにルイズは気がつかず、自分の持論を並べる

「……言いたいことはそれだけか？」

「なによ！！まだ話はおわ……」

ルイズはようやくアレルの様子が変わっていることに気付いた

「悪いが、お前のわがままに僕がつき合う義理はない」

「あなたはゲルマニア人でしょ！！ 私達トリスティンの貴族より格下のおんた達がなんで私の言うことがきけないのよ……！！」

「それだよ、その他人を見下す考えが気に入らない」

「はぁ？何言ってるの・・・」

「それ以上わめくな！！ さっさとこの部屋から出て行け」

アレルの手には剣が握られ、ルイズの喉元に剣先が突きつけられていた

「ちょっとダーリン！！」

アレルからは尋常じゃないほどの殺気が溢れ、ルイズはぶるぶると震えていた

「あ、あ、あなた・・・こ、こんなこと、して、た、だ、ですむとお、おつもってるの？」

アレルの殺気を真正面から受けているルイズはまともに話せない

「わ、わたしは、こ、こうしゃくけの」

「・・・ミス・ヴァリエール、お前が偉いのか？」

「・・・と、とうぜんでしょ！！」

「ミス・ヴァリエール、君はただの公爵家の三女だ。君は公爵夫人なのか？違うだろ？」

君はただの公爵の三人目の娘と言っただけだ」

「・・・」

怒りに顔をゆがませアレルをにらむルイズ

ルイズは公爵の娘だが三女だ

学院を卒業しても家督を継ぐことはできない

どこかの自分より地位の低い貴族の家に嫁ぐぐらいしかない

「学院の中では身分・国籍・人種に関係なく平等な存在ではないの
かな、僕らは。君が言っていることは、ダダをこねるガキと何ら変
わりはない」

すこし、殺気を弱める

「……」

ルイズは真っ青になりながら、床にすわりこんだ

「さて、お引き取り願おう」

「……覚えていなさい」

よろよろとルイズは立ち上がり出て行った

アレルは剣を鞘にいれた

「キュルケ」

「なあに、ダーリン？」

「君は、何故ヴァリエールが僕の魔法を欲するか知らないか？」

「え〜と、病弱な娘が一人いるらしいってことは聞いたことがあるけど」

「そうか・・・」

「でもダーリン、一応ルイズはトリステインの大物貴族の娘よ。大丈夫なの？」

もし、ルイズが今日アレルにされたことを公爵に伝えれば、問題になる

下手をすれば国際問題に発展する

「・・・しかたがない、ヴァリエールには口を出せないように手をつとくか」

そう言って、アレルは出かける準備を始めた

「どこかに行くの？」

「うん、公爵に会いに行ってくるから、帰ってきたら、さっきの続きね」

「・・・／／／」

キュルケは真っ赤になった

「じゃあ、行ってきます」

と言って、アレルは部屋から出た

アレルは広場に出て荷物の中から笛を出し、吹き始めた

トリステイン学院を美しい笛の音が包む

アレルの笛の音を聞き、生徒が集まりだした

しばらくして空の向こうから一体の風竜が飛んできた

竜の翼から発生する風が広場に小型の竜巻を引き起こす

その竜巻の中心で笛を吹き続けるアレルの姿は神々しかった

その竜はアレルの目の前に降りてきた

アレルは竜の顔を撫でた

アレルが竜の顔を撫でる姿は幻想的で神々しく生徒たちは見惚れてしまった

名義上アレルはランカスター侯爵家の長男である

その領は実際に存在する

一応アレルが領主の仕事をしている

ランカスター領では獣人や亜人、翼人、エルフ、竜種、など様々な種族がこの領では生活している

住む場所を奪われ行くあてのない者たちをアレルは保護した

この領はゲルマニアの支配を受けない独立した存在のため、人種に
関係なく生活ができる

この竜は怪我をして動けないところをアレルが見つけ拾い保護した

怪我が治るまでアレルが面倒を見たためアレルに懐いたのだ

ちなみにこの竜の性別は雌らしい

「じゃあ、行こうか」

竜の背に乗る

騒ぎを聞きつけ人が集まってきた

「何の騒ぎですか!」

はげ頭もといコルベールが来た

「ああ、コルベール先生、ちょっと外出します。2、3日で帰りますんで、オスマン学院長に連絡を頼みます」

「ちょっと、待ちなさい!!ミスタ・ランカスター」

「飛んで」

「クル」

竜は一声鳴き飛び立った

偏見（後書き）

いかがでしょう？！ご意見・ご感想お待ちしております。

光の祝福（前書き）

現在 小説の手直しをしています

光の祝福

「ここからは一人で行くから」

ヴァリエール領近く、ゲルマニア寄りの森の近くで風竜から降りた
アレル

ここからは風竜に乗ると目立ってしまうので、ここからは徒歩でヴ
ァリエール公爵家まで行くことにした

「クー……」

風竜は悲しそうに鳴く

「ここまで運んでくれてありがとう。帰りにまた呼ぶから」

風竜の顔を撫でながらアレルは言う

「クル」

アレルに撫でられとても気持ちよさそうに鳴く

風竜と別れ、アレルは森の中を歩き、整備された道に出た

「……」

ただいまアレル君、絶賛迷子中

整備された道に出たとしても、目的地のヴァリエール家がどこにあるか知らないアレルはどっちに行けばいいかわからない

「とにかく歩くしかないか」

そう言っただけでアレルは道を歩き出そうとした時声をかけられた。

「お困りですか貴族の旦那？」

「はい？」

農民がアレルの後ろにいた。

「いや、助かったよ」

アレルに声をかけたのは、ヴァリエール領に住む平民だった

ちょうど、隣の領に用事があった帰りに馬にも乗らず、護衛も引きつれないで歩く、貴族のアレルを見つけたので声をかけたのだそうだ。

業者の席に並んで座り、アレルはヴァリエール家まで行くことになった。

「いえいえ、それにしても貴族様はどうして、あそこにいたんですか？」

「なに、ちょっとヴァリエール公爵の娘さんに用があつてね」

「へへ、じゃあ、貴族の旦那も公爵様に呼ばれたんですね」

「へっ？」

アレルはヴァリエール公爵に呼ばれてなんていないからその平民の言ったことが分からなかった

「えっ、旦那は公爵様のお嬢様に用があるんですよね？」

「そうだよ」

「てっきり、公爵様のおふれを聞いてきたのだと、思っていました」

「何、そのおふれって？」

「へえ、公爵様のお嬢様のカトレア様の病を治すことのできた者は褒美をとらすそうで」

「褒美って？」

「なんでも、カトレア様を妻にできるそうです」

「へへ」

「連日、他の領から優れた水メイジの貴族様が来られて、カトレア様の治療をしています。誰一人、治せないそうです」

「……へえ」（連日って、そんなことしたら逆効果だろ）」

回復魔法を病人に使うのは確かに、体の具合は良くなる

しかし、それは一時的なものである

「（ヴァリエール公爵は娘を本当に助けたいのか？下手したら死ぬぞ）」

しばらく、その平民にカトレアのことをいろいろ聞いてみた

ヴァリエール家の次女

ルイズ同様、桃色がかったブロンドの髪を持ち主

幼いころから体が弱く、領地を一步も出たことはない

平民に対しても優しく、傷付いた動物を発見しては拾って手当てをしているため、彼女の馬車や部屋の中は動物園と化しているらしい

町に着くまで、アレルはいろいろなことを話した。

「あそこに見えるのが公爵様のお屋敷です」

「ああ、ありがとう」

親切な平民に礼を言い別れた

「かなりでかいな。さすがは公爵家かな」

トリステインの大貴族である者が住むにふさわしい立派な屋敷である

「（まっ、家の屋敷より少し小さいかな）」

アレルの住むゲルマニアの屋敷はこの公爵の屋敷より大きく、屋敷の近くにある村や町の大きさも勝っていた

しばらく歩き、門の前に着いた

そこにはたくさんの馬車が止まっていた

「……すごいね」

トリステインの大貴族が一声かければこれだけの貴族たちが集まるのか？

と、いうほどに集まっていた

どうやら、門の前で受付をしなければならぬようだ

金髪で長身の鬼（女性）が受付で癩癩を起していた・・・

「（まちがいなく、ルイズの姉だな）」

アレルはそう思いながら自分も受付をしようと近づいた

エレオノ ルside

「（ああ、この役立たずが！！）」

ここ数日、妹のカトレアを治療する者を選ぶ役目を父親に言いつけられたエレオノル

一向に良くならない妹の病

下心丸見えでここにくる貴族の男共

ある貴族は治療といって、カトレアの服を脱がせようとした者がいたりしたが、間一髪、エレオノルがその貴族を魔法で吹っ飛ばした

もちろんその貴族はそのあと、公爵と公爵夫人の前につれていかれ・

・・・

「（まったく、ろくな奴がないね！！）」

今朝から、来るわ、来るわ、ヴァリエールの名に引き寄せられてきたボンクラ共が

「ふふふ、（ちびルイズを弄りたくなってきたね）」

エレオノールはルイズを弄ることによってストレスを発散していたが、ルイズが学院に入学してしまったためストレスをぶつける相手がいなくなってしまうた

そのため、ここに来る貴族にそのストレスをぶつけていた

エレオノールのせいで何人が貴族が泣きながら帰って言ったそうだ・
・
・

「（ああ、バーガンディ伯爵様は今、何をされているのかしら？）」

現実逃避を始め、自分の婚約者を思い浮かべるエレオノール

「あの〜」

「（ああ、伯爵様〜）ふふふ」

「もしもし」

現在、エレオノールの頭の中には花畑で自分を追いかける伯爵の姿が……

「……ふ〜」

「ひゃっん!!」

突然エレオノルは可愛らしい悲鳴をあげた

「な、何すんの!!」

怒りと羞恥心で真っ赤になったエレオノルの目の前に魔法学院の制服を着た銀髪の男がいた

エレオノル side out

さつきから何度呼びかけても反応してくれないので、アレルはルイズの姉らしき人の耳に息を吹きかけた

その女性は可愛らしい悲鳴をあげた

「（ふむ、なかなか良い声で鳴くな）」

軽くS気が出てきたアレル

「な、何すんのよ!!」

「先ほどから何度も声をかけたのですが、全然反応してくれなかったので、つい」

「『つい』って・・・あんたのせいで変な声を出しちゃったじゃない!!」

怒りと羞恥心で真っ赤になりながらアレルに詰め寄るエレオノル

「ふふふ、なかなか可愛らしい反応でしたよ」

「……………」

明らかに狙って言っているアレル

「……………」

周りにいた他の貴族も二人のやり取りを見て啞然としていた

「さて、ここで受付をすればいいのですよね」

「……………まあ、いいわ、はあ」

疲れ切った顔のため息をつくエレオノール

「その恰好からして、トリステイン魔法学院の生徒ね」

「はい、そうです」

「じゃあ、名前と出身は？」

「アレル・ラ・フォン・ランカスター。ゲルマニア出身です」

エレオノールのペンを持つ手が止まった。

「……………お帰りください」

「どうしてですか？」

「ゲルマニアのような野蛮人に私の妹を任せられないからよ!!」

「（やっぱり、姉妹そろって差別主義者か・・・）分かりました、残念です」

そう言っアレルは元来た道を引き返す

？「お願いします!!」

「ええい!!しつこい!!」

「うん？」

アレルの視線の先には必死に貴族の男に頭を下げる女性がいた

服装から見て平民だろう

その女性の腕の中には一人の女の子が抱きかかえられていた

「無礼者!!」

「どうか娘を、娘を治してください!!」

「ええい、触るな!!」

「きゃっ」

貴族の一人が女性を突き飛ばした

「この私に無礼を働くとは、覚悟はいいな」

そう言つて杖を出し、呪文を唱える

誰一人として、止めようとしな

これがハルケギニアの貴族が平民に対する仕打ち、これは日常的事
ことなのだ

「ファイアーボール」

火の玉が女性に向かって飛ぶ

その女性は腕の中の女の子をかばうように抱く……

しかし、ファイアーボールが女性に当たる前に突如、水の壁が表れ
女性と子供を守った

「誰だ！！私の魔法を止めたのは！！！」

その貴族は周りの貴族をにらみながら、自分の魔法を止めた者を探
した

「大丈夫ですか？」

「は、はい」

いつの間にか、アレルは女性の所にいた

「何故、こんな無茶を？」

ハルケギニアでは今のようになり、貴族が平民を虫けらのように殺すことは当たり前なのだ

「……貴族様だったら……私の娘を治せると……」

女性の腕に抱かれた子供はかなり顔色が悪く、ひどい熱を出していた

「……この足はどうしたんですか？」

女の子の右足は太ももから下が無くなっていた

「……町で貴族の方の足を踏んだという理由で……」

「そうですか……つらかったですでしょう」

アレルは女の子の頭を撫でながら女性に話しかける

「……はい……」

「では、私がこの子を治療しましょう」

「ほ、本当ですか!？」

「ええ、ちょっと失礼」

アレルは女性から女の子を預かり胸に抱く

「もう大丈夫だからね」

アレルは呪文を唱える

するとアレルの周囲に光が集まる

「「「「「な、何だ!？」「「「「「

周りにいた上位クラスのメイジ達は何が起こっているか理解できなかった

ただ、その光は優しく辺りを包む

まるで、幼いころ母の腕で抱かれていた時のような温かな光

光がおさまると、そこには元通り足がついた女の子がアレルに抱かれていた

「もう、大丈夫です」

そう言ってアレルは女性に女の子を渡す

「有難うございます。有難うございます。有難うございます。」

「気にしないでください」

恥ずかしそうに笑うアレル

「「「「「「「「「「「「」

カトレアの治療に来ていた貴族のほとんどはその光景をただ黙って
見ることしかできなかった

光の祝福（後書き）

内容が薄いという意見があったので、直します。
なるべく、早く直そうと思います。

5月29日（土） 第一部「旅立ち」から第五部「物語」まで編集
6月05日（土） 第六部「蒼髪姉妹」から第九部「決闘騒ぎ」ま
で編集

最新話はまだ投稿できませんでした。

天帝（前書き）

遅くなりました。
最新話です。

天帝

カトレア side

今日も診察を受けるのかな？

私はベットの上でそう思っていた。

ここ数日、何人もの水メイジがきて私に治療をした。

ちょうど、妹のルイズが学院に行ってしまった時ぐらいから、私の身体は思うように動かなくなった。

もともと原因が分からない病を幼いころから罹っていた。

それまでは、無理をしなければ、外に散歩に行ったり、中庭で拾ってきた動物達と日向ぼっこをして過ごすことができた。

最近、父は私の病気を治せる水メイジをトリスティン中で集めようとした。

『我が娘の病を治した者を娘の婿として迎える』

両親は私が元気になってくれることを望んでいる。

しかし、私は貴族としての義務を果たすことができない。

貴族の女として生まれたなら、他の貴族と結婚し、立派な子を産む。

今の私には無理だ。

名目上ではあるが、父は私にラ・ヴァリエール公爵より領地を分け与えられている。

厳密に言えば私はラ・フォンティーヌ家の当主である。

父が病弱で家を出られない私のことを不憫に思った結果である。

私の姉や妹にはすでに婚約者がいる。

姉には軍人の家系で父とも交流があるバーガンディ伯爵。

妹のルイズには隣のワルド子爵。

両親の考えでは、姉や妹のどちらかの婿をヴァリエールの次期公爵とするらしい。

私はこのラ・フォンティーヌ領（実質ヴァリエール領）にずっといるということになる。

病弱な私を妻にするような貴族はいない。

私と結婚しても、一代限りの領地しか得られない。

私に婚約者がいない理由だ。

公爵家の始祖はトリスティン王の庶子であるため、王家とは血縁関係にある。

その公爵家の権威はトリスティン王族の次に強い。

父は治癒の腕に覚えのあるメイジ達を国中から呼んだ。

王立魔法研究所”アカデミー”の優秀な研究員で王都にいるためたまにしか帰ってこない、エレオノール姉様が帰ってきた。

姉は父の考えには反対らしいので、私の治療をする者の選定役になった。

少しでも、私に会う者を減らそうとしているのだろう。

父もそのために姉を呼び戻したようで、かなりの者が私に会う前に帰って行った。

中には、かなりの力を持ったメイジもいたが私の病を治すことは無理だった。

最近私は考えてしまう。

私は一生、この病とともに生きていく？

病のせいで私はヴァリエールの領から出たことがない。

仕方のないことだけど分かっている、つらい。

私の願い・・・

この病がなくなり、普通の生活を送ること・・・

今日もベットの上から窓の外の景色を眺める。

外では姉が私を治すために来たメイジの選考をしているだろう。

複数の声がする。

突然、窓の外からまばゆい光が射し込んできた。

太陽ではない。

その光はとても温かく、辺りを包む。

窓の外を覗くと銀色の髪の子（女の子？）が子供を抱えて立っていた。

カトレア side out

エレオノル side

私はその光景にただ驚いた。

先ほど追い払った、ゲルマニアの貴族が見たことのない魔法で平民の子供の治療をしたからだ。

『土』・『水』・『火』・『風』の四系統のうち、治癒に優れた系統は、『水』である。

『水』が何故、治癒に優れているのか。

人の身体には水（血）が流れている。

水メイジはその流れを操り、治癒を行う。

水の流れがおかしければ、その原因を取り除き正しい流れにする。

傷を治癒するときには秘薬の補助を受けて、その水の流れを増幅させることで傷を塞ぎ、後は自然に治るのを待つ。

それが一般的に治癒という魔法のはず。

しかし、その青年の使ったのはまず『水』ではない。

他の系統でもない。

では何の系統？

『水』の治癒で、失ってしまった手足を元通りにするなんてことはできない。

仮にできたとしても、それにはとんでもない量の精神力が必要ならず。

見たかぎり、青年は秘薬の類を使って用には見えない。

まさか、『虚無』？

始祖ブリミルが6000年の昔、ハルケギニアにもたらした魔法。

土・水・火・風の四系統に加え、伝説の系統とされる『虚無』。

失われし系統。

もし、あの青年が『虚無』の系統であるなら、あの魔法にも納得ができる。

伝説として語られる『虚無』であれば、あれだけのことをできるかもしれない。

あれだったら、カトレアも治るかも……

「(すこし、派手にやりすぎたかな?)」

治癒を終え、少女を母親に返したアレル。

先ほどから、貴族達から好奇の視線を向けられている。

「(まっ、大丈夫だろ)」

どこまでも、プラス思考のアレル君。

なんだか、向こうで金髪のツリ目の女性が口をパクパクさせているけど本人は気にしていない。

アレルの使った魔法は『虚無』ではない。

これは複数の水の精霊の力を借りた、多重魔法の一種。

普通のメイジが使う系統魔法の治癒だけでは失った身体を元に戻すことはできない。

そこでアレルは精霊の持つ力で少女の手足を復元した。

アレルがその魔法を使う時、光が周囲を包む。

これは、アレルの呼びかけに応じた精霊達が集まってきたときに起こる現象。

本来、精霊は才能のある者にしか見えないのだが、複数の精霊が集まることで才のない者の目にも、光であるが見える。

アレルがギターにこの治癒を使った時は、それほど精霊を集める必要がなかったので、光らなかったのだが、今回のような、失った部位を復元するには、大量の精霊の力が必要だったので、このようになつた。

「では、気をつけて帰ってくださいね」

少女とその母親は何度もアレルに頭を下げ、帰って行った。

「さて、帰るか」

そう言って、アレルは歩きだした。

しかし、

「まっ、まて!!--」

ようやく再起動をした貴族がアレルの前を阻む。

「・・・なにかようですか?もう僕のやることはないんですから、帰らせていただきたいのですが」

「貴様、どんな妖術を使った!!」

「は？」

「手足が元に戻る魔法なんて聞いたことがないぞ!!」

「だから？」

「異端だ!!」

「『『『異端だ!!』』』」

周りの馬鹿貴族が同調して騒ぎ出す。

「異端審問にかけろ!!」

「『『『審問だ!!』』』」

「.....」

「（何言っているんだこいつら？）」

貴族達がアレルを囲んで拘束しようと魔法を放つ。

「『『『なっ!!』』』」

しかし、その魔法はアレルを拘束するのではなく、その魔法を放った貴族自身が拘束されることになる。

先ほど治癒のために集めた精霊達が、アレルを拘束しようとした魔法の対象を換えたため、貴族達は自分で、自分を拘束することになってしまった。

「（やったの〜）」

「（ぐるぐるまきな〜）」

「（の〜）」

精霊達がアレルの周りで飛び交う。

「（馬鹿だね）なんの真似ですか？」

みのむし状態の貴族達を見下ろす。

「くっ、この異端者が！！我々を解放しろ！！」

「（・・・なに言ってるんだか）さっきほどから僕のことを、異端者」と言いますが何故ですか？」

「貴様が使った魔法は四系統の魔法ではない！！」

「「「そうだ！！」」」

「四系統でなければ貴様が使ったのは先住魔法。つまり貴様は人の皮を被ったエルフに違いない！！」

「ではあなた達は、僕がエルフであるから拘束して異端審問にかけ

ようとしたということでもよろしいですね？（エルフの部分は半分、正解だけだね）」

わざとらしく、アレルは拘束された（馬鹿）貴族に聞く。

「そつだ！！早く我々を解放しろ！！解放しないと始祖ブリミルの名において、貴様を天罰を下す！！」

「「「天罰を！！エルフには死を！！」」」

拘束されているが人一倍、プライドの高いトリステインの貴族達は騒ぎ立てる。

「（うーん、すこしお仕置が必要だね）」

アレルは杖をふって、拘束した貴族を水牢の中に閉じ込めた。

「「「「がばがば」」」」

みのむし（貴族）は、水牢の中から脱出しようともがくが、拘束された状態のまま閉じ込められているので逃げだせない。

アレルが杖をふるうと、水牢は浮き上がり、水が回転し、みのむし（貴族）が水牢の中でぐるぐる回る。

もう一度杖をふるうと、水牢が解除され、みのむし（貴族）が地面に落ちてきた。

「」「」「」

そこにはみのむしの代わりに屍？が横たわっていた。

「さて、お仕置き終了」

そう言っつて、アレルはその屍？を放置して帰ろうとするが、

「ま、まちなさい！！」

「（お仕置きが足りないのかな？）」

振り返ると金髪、攣り目の女性が立っていた。

「あなたも・・・僕を異端審問にかけたいのですか？」

「・・・いいえ」

「もう、僕には用がないのでしょうか？」

「・・・事情が変わったのよ」

「？」

「貴女にカトレアの治療をさせてあげるわ・・・ついてきなさい」

そういつて、エレオノルは屋敷の方に歩いていく。

「ええ」

エレオノルの逆方向に歩きだすアレル。

「ちょっと!!どこに行くのよ!!」

エレオノルが走ってきた。

「先ほど、貴女は僕の力は必要ないと言いましたよね？」

「うっ……」

「失礼します」

貴族らしく、礼をしてアレルは再び歩き出す。

「待ちなさい!!あんたのせいで、カトレアを治療するはずだった貴族がこんな状態になったのよ!!責任をとりなさい!!」

「その方達は仕方がないでしょう?いきなり僕のことを異端者と言つて、魔法を放ってきたんですから」

「……」

「それでは」

歩き出すが、こんどは岩石が飛んできた。

それも、水の壁が現れ、アレルには当たらなかつた。

ゆっくり、視線を岩石が飛んできた方に向けると、杖をこちらに向けているエレオノルがいた。

「（やれやれ）……これが、トリステイン貴族のゲルマニア貴族に対する扱いなのですね？ 思い通りにならなければ、力で従わせるのがトリステイン貴族なのですね？」

「ふん、何を言ってるの。野蛮なゲルマニア人がこの高貴なトリステインの貴族のために力を使えるのだから、むしろ光栄に思いなさい」

「僕は他国の留学生ですよ。その僕にトリステインの貴族、それも公爵家の貴女が攻撃してきた。これがどのような意味を持つか……貴女はわかりますよね？」

エレオノルの顔は真っ青になった。

「……ゲルマニアと戦争をするということでしょうか？」

「ち、ちが……」

「では、何故攻撃をした」

アレルは少し殺気をだしながら、エレオノールに詰め寄る。

「ひっ……」

「貴女の軽率な行いが、トリステインを滅ぼすんだ」

「……」

エレオノールは自分のしたことの重さによつやく気がつく。

しかし、すでに取り返しのないことになってしまった。

トリステイン王国は、始祖の直系の治める国であるがハルケギニアの国々の中で一番国力が低い。

それに対して、ゲルマニアはトリステインの何倍もの国土を持ち、強力な軍を持つ国。

戦争になったら、まずトリステインに勝ち目は無い。

「では、僕は帰らせてもらいます。いろいろ準備をしなくてはならないので」

「……待ちなさい！！たかが、ゲルマニアの一貴族の貴方に国を動かすことなんてできる訳ないわ！！」

「()ばらしていいか()そうだね、ただのゲルマニアの二貴族だったからね」

「どつ意味よ?」

先ほどとは違う雰囲気を出すアレル。

アレルの纏う空気が変わった。

「改めて自己紹介しよう・・・
僕はアレル・ラ・フォン・ランカスター。
帝政ゲルマニア、第一皇位継承権を持つ者。
そして、『天帝』の二つ名を持つ者でもある」

「天帝・・・」

天帝（後書き）

大学の授業が忙しくてなかなか更新できませんでした。申し訳ありません。

活動報告に今後の主人公に関してのアンケートが載せてあるので、よろしければ、読んでください。

誤字の指摘をしてくれた「嘉神祢将」さん、ありがとうございます。
アンケートの書き込みをしてくれた「るなくる」「闇の皇子」「キキョウ」さん方、ありがとうございます。

アレルと公爵（前書き）

多数の意見から「天帝」・「アレルと公爵」の2話を編集しました。

この話を読む前に、前話をもう一度読んでください。

アレルと公爵

エレオノ ルside

「・・・天帝」

聞いたことがある。

ハルケギニア最強と言われるゲルマニアの騎士団『天空』

様々な種族によって構成された騎士団メンバー。

そのトップに君臨する者を人々はこう呼ぶ。

『天帝』

天帝の正体は謎に包まれている。

アレルは騎士団のトップ、つまり『天帝』としてパーティに出席することがある。

アレルは『天帝』であるときは、常に仮面とローブを身にまとっている。

そのため、貴族や平民の間では、天帝が男なのか？

それとも、女なのか？

ある貴族は、「天帝は絶世の美女だった」

平民は、「超美男子だった」

ある貴族が、パーティで天帝が仮面を外さないことに怒り、無理やり仮面を外そうとしたことがあったが、一瞬で背後から杖を突きつけられていたそうだ。

何故、天帝は顔を見せない？

醜い傷を隠すために仮面を外せないのでは？

どこかの没落貴族なのでは？

いや、平民なのでは？

様々な噂がゲルマニア国内では流れていた。

誰ひとり、天帝の正体をつかめない。

その実力を疑う者もいるが、天帝が見せる圧倒的な力の見た者達は、その考えを改める。

ある時、巨大な竜巻を天帝が腕の一振りで鎮めた。

ある時、日照りが続く土地に雨を降らせた。

巨大な大地の揺れが起きた時、海の沖の方から来た巨大な津波を全

て凍らせた。

100匹ものオーク鬼を炎で炭にした。

ゲルマニア内で民を虐げる領主の館を宙に飛ばした。

貴族に殺されそうになった平民を助け、その貴族に雷が落ちた。

流行病が起きた時、天帝は騎士団の水メイジと共に平民達の治療をした……

平民からは絶大な支持

貴族からは尊敬と畏怖の対象

吟遊詩人・商人・旅芸座の一団などによりその実力、名声はハルケギニア中に広がった。

エレオノルもアカデミーで『天帝』の噂を聞いたことがあった。

しかしゲルマニアの戯言として、気にも留めなかった。

自分の目の前に、その『天帝』がいる。

「あ……あ……」

目の前の男の放つプレッシャーに声が出ない。

ただの貴族であれば、ヴァリエールの名を使えば大抵の問題は解決する。

しかし、今日の前にいる人物はゲルマニアの皇太子と名乗っている。他国の貴族、しかも皇族に対して杖を向けてしまった。

その結果、目の前の皇太子はトリステインと戦争すると言っている。私が原因で戦争……

私の目の前に立つ人物はいつの間にか仮面とローブをまとっていた。

仮面の眼の部分から覗く蒼い瞳は、私の心を見透かすように……

エレオノル side out

アレルは魔法で『天帝』として任務を行う際に使う仮面とローブを出した。

これもオリジナル魔法の一つで、見た目はただの仮面とローブだが、アレルの魔力で作った防具のようなもので、籠められている魔力以上の魔力を当てないと壊せない。

先ほどお仕置きをした貴族達も、目が覚めたようで、こちらを顔を蒼くして見ている。

自分達が異端審問にかけようとした人物がゲルマニアの皇族。

しかも、ハルケギニア最強と言われる『天帝』らしい。

間違いなく自分達は死刑。

アレルがゆっくり腰に差している杖を抜く。

「……これより、この女の罪を裁く」

エレオノルに杖を向ける。

エレオノルの身体がビクッと動く。

「何か、言い遣すことはあるかな？」

「……認めないわ」

杖を折らなければかりに握りしめながらエレオノルはアレルを睨む。

「……」

黙ってアレルはエレオノルの言葉に耳を傾ける。

「……ここにいるのは……そう皇太子を名乗る不届きものよ
!」

「……」

「あんたが皇太子という何の証拠もないんだから（例えそうでも、もう後戻りはできない）」

皇太子であろうとなかろうと、杖を向けた事実是不変ならない。

エレオノルはアレルに杖を向けた。

「……愚か者が」

アレルを中心に竜巻が発生し、エレオノルは竜巻に飲み込まれた。

「あゝ……」

竜巻の中から、叫び声が聞こえるがアレルは無視する。

「ちっ！」

突然発生した竜巻がアレルがたっていたところを通過しエレオノルが巻き込まれている竜巻にぶつかつた。

二つの竜巻は互いにぶつかり合い、消滅した。

竜巻が来た方を向くと、巨大な幻獣マンティコアアにまたがり、こちらに杖を向ける鉄仮面をつけた者がいた。

「……」

互いに睨みあう。

「……………『烈風のカリン』」

「……………『天帝』」

「「はっ」」

マンティコアに乗った『烈風のカリン』がエア・ハンマーを放ってきた。

『天帝』は、不可視の魔法を杖に纏わせたブレイドで切り払う。

「偏在！！」

烈風のカリンが5人に増え、天帝にブレイドで斬りかかってきた。

「レビテーション」

天帝は宙に浮かんだ。

偏在達も飛び上がり、天帝に近づく。

「アクア・ウィップ」

杖から細く長く無数に枝分かれした水鞭が偏在達を捕らえた。

マンティコアアとカリンも捕らえた。

「・・・少しはやるようですね」

天帝の後ろにブレイドを突きつけるカリンがいた。

マンティコアアにまたがっていたのが本体だと思ったが、それは偏在だったようだ。

水鞭に捕らえられていた偏在が全て消えていた。

「・・・拘束する」

烈風は天帝にそう告げると、風の戒めで拘束した。

「・・・けど、詰めが甘いかな？」

「!?!」

拘束されているはずの天帝は霧のように消えた。

そして、烈風の後ろから天帝の声がきこえた。

「さて、杖を捨ててもらおうかな？」

「くっ……」

ゆっくり、烈風は杖をおろす。

「……カリン様！！」「」

下から無数の魔法が天帝に飛んでくる。

天帝はその魔法をすべて打ち払ったが、その一瞬で烈風は自由になった。

魔法が飛んできた方を向くと、数名のメイジがこちらに杖を向けていた。

先ほど、天帝に魔法を放ったメイジは、公爵とヴァリエール家に仕えるメイジ達。

烈風ほどの実力はないが、烈風が直々に手ほどきをしたのでほとんどスクウェアクラスと言っていいメイジ達。

天帝は宙に浮かんだまま下を見る。

リーダーらしきメイジがこちらに来た。

「領内で騒ぎを起こしたのは、お前か？」

「誰？（知っているけど）」

「私は、ラ・ヴァリエール公爵だ」

50過ぎの、白くなりかかった金髪に口髭をはやし、左目にモノクルをはめ、威厳に満ちた男性が言う。

「何故、私の娘や私の招待した貴族がそこで倒れているのかな？ 事と次第によっては、お前を捕らえなくてはならない」

公爵の鋭い眼光がアレルを射抜く。

「そこに倒れている女性は最初、私の治療は必要ないと言っておきながら、後になって必要だと言って、治療をさせようと従わない私に魔法を放ってきた。」

その貴族達は、私を異端審問にかけようとしてきたため、そのような状態になっている」

天帝の指さす方向に金髪ツリ目のエレオノールと馬鹿貴族達が倒れていた。

「……わが娘の非を詫びよう。しかし、わが娘はなんの理由もなくそのようなことはしないはずだが」

「自分の思い通りにならないから癪癪を起したのでは？」

「……」

「性格きついでしょ？」この娘……」

「……ああ」

公爵は少し疲れたように言う。

「理由は分かった……しかし、これでお前を拘束しなければならなくなつた」

「何故？」

「ここにいる貴族はそれなりに実力のあるメイジだ。当然、家柄もそれなりに高い者達だ。それを倒した者を何もせずには帰してしまつわけにはいかない……」

そう言つて、命令を下す。

「……捕らえよ」

「」「」「はっ」「」「」

天帝に向けて様々な魔法が飛んできた。

全ての攻撃が直撃し、煙で天帝の姿は確認できない。

「お、お父様……」

エレオノルがふらふらしながら、烈風に支えられながら歩いてきた。

「分かっている。お前がカトレアのことを考えた上での行動だといふことは……」

公爵は抱きしめながら言う。

「だが、公爵家の者として、このような行動は感心しないな」

「……申し訳ありません」

エレオノルは妹の病が治せるかもしれない相手に軽率な行動をしてしまったことになだれる。

「しかし、私は公爵だ。領地内での争いを起こした者を野放しにしておくことはできないんだ」

「で、でも、あれは」

エレオノルの目線の先の煙がだんだん晴れてきた。

「これで終わりか？」

そこには、無傷の天帝が立っていた。

ローブには傷一つついていない。

「」「馬鹿な！！あれだけの量の攻撃を受けて無傷だと！？」「」

周囲にも動揺が広がる。

「・・・トール・ハンマー」

天より、巨大なハンマーの形をした雷が落ちてきた。

たった一撃で全滅した。

「・・・」

公爵が天帝に杖を向ける。

しかし、天帝は公爵の目の前に表れ、杖を奪い取った。

「お父様!!」

「あなた!!」

エレオノールと烈風が公爵を助けようとするが、天帝の『ミラージ
ユ』が二人を拘束する。

「くっ・・・」

怒りで顔をゆがめながら、天帝を睨む公爵。

「・・・さすが、公爵家の者だけはある」

ため息をつきながら、アレルは仮面を外す。

「なっ、お前、ランカスターの!？」

「ええ、お久しぶりです公爵殿」

アレルと公爵は面識がある。

公爵はゲルマニアのランカスター領内でしか出回らない水の秘薬を手に入れようと、秘密裏に、アレルに接触してきたことがあった。

その秘薬は本来売ったりはしない。

ランカスター領に住む人々のためにアレルが考えた秘薬で、店に行けば簡単に手に入るが、管理が厳しく、他領には出回らない。

アレルは特別に公爵に秘薬を渡した。

しばらくして、公爵から娘の病が少しだが回復したのもっと薬が欲しいという手紙が来た。

しかし、アレルは秘薬を何度も使うと逆効果だといって送らなかつた。

しかし、最近公爵が秘密裏に秘薬を手に入れ、使い続けているという情報を耳にした。

「私の忠告を無視して秘薬を使い続けているということを目にしたので」

「・・・」

「あの時の秘薬はお嬢さんに使い続けているんですよね？」

「……ああ」

「それで、そのお嬢さんはどうになりました？」

「……一時的には良くなる。しかし、それもだんだん効かなくなってきた」

「そうですか、効かないからといって量を増やしたり、他の秘薬と併用して使っていませんよね？」

「……」

公爵は黙る。

「やはり……」

「どづいづことだ？」

「量を増やすと確かに症状が良くなったように思いますが、いくら効く薬であろうと、使いすぎは病人に負担をかけるだけです」

「……」

「異なる秘薬を一緒に使ったりすると症状が悪化します」

「そ、そんな……」

二人の会話を聞きエレオノルは驚く。

烈風は黙って立っている。

「分かっている公爵殿は秘薬を使い続けたのですか？」

公爵は

「・・・あの秘薬しか、もうカトレアには効かないんだ」

「・・・私に連絡を取っていただければ、そこまで症状が悪化しませんでしたのに・・・何故ですか？」

あれから公爵は一度もアレルに連絡を取っていなかった。

「・・・私はトリステインの公爵家の人間だ。他の貴族の上に立つ者として、ゲルマニアに頼ることはできない・・・」

アレルと公爵が秘密裏に会っていたことはどこからか漏れてしまった。

その時は処分されなかったが、トリステインの代表的貴族がゲルマニアごと野蠻人の国に頼っているということが他の貴族から問題視された。

「仕方がないですね。伝統・誇りを重視する貴族が多いですからね」
公爵の表情から何かを悟ったアレル。

「本日、私が来たのは病の件だけのはずでしたが、ゲルマニア人と

「いうだけで面会すらできませんでしたよ」

「そ、それは……」

エレオノ　ルが口を出す。

エレオノ　ルは典型的なトリスティン貴族であると言えるため、そのような行動をした。

妹の病が治るかもしれない。

そのチャンスをエレオノ　ルは潰してしまった……

「これからどうするか……よく考えることです。伝統・誇りかお嬢さんの命、どちらをとるか」

アレルは帰ろうとするが、気絶した貴族たちが目を覚まし、騒ぎ出しました。

「おお！！公爵殿がいらっしやっただ！！」

「後ろにおられるのは、烈風のカリン殿では？」

「公爵殿！！カリン殿！！その者は、怪しき術を使う異端者です！！」

「公爵殿の手で制裁を！！」

「制裁を！」

「……」

「……」

馬鹿な貴族は騒ぐが、公爵やカリン、エレオノルは冷めた目を向ける。

おそらくここにいる貴族達はアレルのことを王宮に報告するだろう。

そして、頭の固い貴族達はゲルマニアと戦争すべきと主張するだろう。

今のトリステインにゲルマニアと戦うだけの力はない。

それを分かっている者が多い。

ここで公爵達がアレルを拘束するのは不可能。

「……」

アレル馬鹿貴族たちにむけて、杖をふるう。

うっすら紫色の雲がその貴族達を包んだ。

「なんだ、それは？」

公爵は見たことがない魔法に驚きながら聞いてきた。

「ナイトメア（悪夢）」

「「「ギャー」「」」

叫び声上がる。

「な、なに!？」

「これで、反抗できなくなるでしょう」

貴族SIDE

「なんだ!？これは？」

あの異端者の杖から、紫色の霧がでて、身体にまとわりついてきた。

「く、くそ!！」

必死に霧をはらおうとするが、風魔法がきかない。

「な、なんだ？」

「姿を現せ！！」

霧の向こうに人影が写った。

「何者だ！！」

霧の向こうから、人が現れた。

「平民が何のようだ！！」

「な、なんだ！？」

「返せ」

「妻を返せ」

『娘を返せ』

『息子を返せ』

『母さんを返せ』

『父さんを返せ』

皆、生氣を感じられない。

「わ、わたしは何も返すものなんてないぞ!!」

『『『返せ』』』

一人の平民が貴族の足にしがみついた。

「うっ!?!」

貴族の頭の中に、映像が流れてきた。

平民にしては美しい女を町で見つけた。

兵士に命じて、捕えた。

その時、平民の男が女を取り返そうと、こちらにつかみかかってきたので処刑した。

女は、悲鳴を上げて男のもとに行こうとするが、兵士に押さえつけられていたので無駄だった。

泣き叫ぶ女を屋敷に連れ帰った・・・

馬車の前に飛び出してきた、子供をかばう母親と共に処刑した。

頭の中で流れてくる映像のすべてに、私が出た。

そして、その平民が受けた傷の痛み、感情が私の身体に流れてきた。

霧が晴れて、出てきた貴族たちの顔は、苦しみで歪んでいた。

「何をした？」

「この人たちが今まで平民たちの受けた苦しみを、体験させているだけですよ」

「ランカスター、お前はいつたい・・・」

見たことのない魔法、圧倒的な力

「私の正体が知りたければ、そこのお嬢さんに聞けばいいですよ。但し、他言無用で。それと、今回は、ただのゲルマニアからの留學生の一人として来たので、トリステインと事を構えるつもりはありません。まあ、これだけ暴れてしまったのは・・・正当防衛ってことでお願ひします。」

そう言って歩き出すアレル。

「ああ、そうそう。」

止まって、公爵の方に振り返る。

「？」

「今回はこっそり娘さんの治療をしようと思っていたのですが、もし、治療がしたいのであれば、皇帝陛下とツエルプストー家に許可をもらってくださいね。それも、あなたに対する罰ですからね」

長年、さまざまなことと争っているヴァリエール家とツエルプストー家。

「・・・私に、頭を下げるといふのか？」

「言ったでしょ。これは罰であると。それに、憎しみは何もうみませんよ。どちらかが歩み寄らねば。」

「」「」「」「」

ヴァリエール一家は黙ってしまった。

何代も前から続く、憎しみの連鎖を。

始まりは、とても下らない理由。

ヴァリエール家とツエルプストー家の先祖が、一人の女性を奪い合ったことから。

互いにその女性をかけて、戦った。

結局は二人ともふられたらしいが・・・

それが、何代も続いている。

それを、自分の方から断ち切るといふこと。

それが、公爵に与えられた罰。

呆然とする公爵をそのままにしてアレルは、来た道に戻って行った。

そして、風竜を呼び学院に帰って行った。

アレルと公爵（後書き）

多数の意見から「天帝」・「アレルと公爵」の2話を編集しました。

誤字脱字等がありましたらどんどん指摘してください。

補足：キュルケが主人公と面識があったという話がありましたが、それは皇太子としてパーティに参加したとき。

今回の話では、『天帝』としてパーティに参加した時の話です。わかりにくくてすみません。

大騒ぎ（前書き）

いろんな人から、「マザリーニ」の話についての意見・感想がありました。

何度か書きなおしてみたのですが、満足いくものができませんでした。

矛盾がありすぎて、難しい・・・

なので「マザリーニ」の話は、削除します。

そして、「アレルと公爵」の話を少し変えてみました。

この話を読む前に、一度、前の話を読んでみてください。

何度も、中身を変えて申し訳ありません。

大騒ぎ

場所：トリスティン魔法学院

ヴァリエール公爵領から帰ったアレルは一人、黙々と掃除をしていた。

この前、勝手に学院を休んだアレルは、帰ってきてから、教師達からかなり怒られた。

その罰として、教室の清掃を命じられた。

現在、教室を一人で清掃中。

「まあ、しょうがないかな？」

黙々と、箒で教室内を掃く。

罰なので、魔法を使わず掃除をしなければならない。

杖は教師に預けた。

最初は一人で箒を使って掃除をしていたが、精霊達が集まってきた。

風の精霊は、小さな竜巻を発生させて、細かなごみを集めている。

水の精霊は、空気中の水分を集めて、床や窓の汚れを洗い落とす。

火の精霊は、水の精霊が綺麗にしたところを、熱で乾かす。

土の精霊は、教室の床のへこんだ部分を埋めていく。

「ぴかぴか　ぴかぴか　」

㊦㊦㊦㊦　ぴかぴか　　ぴかぴか　　㊦　㊦　㊦

アレルが箒で床を掃きながら歌うと、精霊達も歌う。

杖ではなく、箒を指揮棒のようにふると、それに合わせて、精霊が動く。

もし彼の他に人がいたなら、こういっただろう。

「光が彼の周りを飛び交っていて、幻想的だった」

30分もしないうちに、教室は新品のような輝きを放つようになった。

この教室を見た教師は、

「……魔法を使ってないよな？」

首をかしげたそうだ。

教師から杖を返してもらい、アレルは部屋に戻った。

場所：自室

アレルは部屋で紅茶を淹れてゆっくりしていた。

しばらくすると、キュルケが部屋に来た。

「ねえ、ダーリン」

「ん？なんだいキュルケ？」

「ヴァリエール領はどうだったの？」

「うん。一応治療をしようとしたんだけど、ゲルマニア人っていう理由で、できなかつたよ」

「やっぱり、トリステインはどうしようもないわね」

「うん、貴族の足を踏んだだけで、足を切られた女の子がいたから、治してあげたよ。それぐらいのことで、異端審問にかけようとするんだもん。こまっちゃったよ」

「・・・」

「どうしたの、キュルケ？」

「・・・よく無事だったわね」

「問題ないよ。それにキュルケは僕のこと知ってるでしょ？」

「ええ、ゲルマニアの皇太子でしょ」

「そうそう、一応伏せていたんだけどね。それでも、他国の貴族を異端審問にかけるなんて、馬鹿なことをする奴がいたのは驚いたけどね」

「可愛いそうね、その貴族達は・・・知らなかったとはいえ、ゲルマニアの皇太子に手を出しちゃったんだしね」

「別に気にしないよ。かなり脅しといたから、今頃、震え上がっているかもしれないけどね」

「・・・(アレルって、ドS?)」

しばらく、キュルケと雑談を交わしていると、新たな訪問者が来た。

「誰か来たみたいよ、アレル」

「うん?」

鏡を見てみると、メガネをかけた、緑の長い髪の毛の女性がドアの前で待っていた。

「マチ・・・じゃなくて、ロングビルか」

「オスマン学院長の秘書？なんでここに？」

「さあ？」

そう言って、アレルは警備用ゴーレムにマチルダを通すように指示を出す。

マチルダことロングビルが部屋に入ってきた。

「……ミスタ・アレル……」

顔を真っ赤したマチルダがアレルに言う。

「ん？どうしたの？」

マチルダがなぜ怒っているか分からないアレルは彼女に聞く。

「……そこにいる女はなんですか？」

笑顔でアレルに問うマチルダからは魔力が溢れ、周りのものを砂に変えていく。

それなりの実力者になれば、自身の身体からでる魔力で周りに影響を与えることができる。

土メイジなら、周囲の物体を砂に変える。

火メイジなら、周囲の温度を上昇させる。

風メイジなら、気流を生み出す。

水メイジなら、周囲の湿度を変える。

今のマチルダは怒りで、身体から魔力が溢れ、家具を砂に変えている。

「???なんで??」

「ダーリンは私がいるもんね　こんな年増より」

そう言って、キュルケはアレルに抱きつく。

「・・・ダーリン？」

マチルダから、また魔力が溢れだす。

真っ赤になるキュルケとマチルダ。

「し、しかたないね／＼／＼／」

「そ、そうね／＼／＼／」

アレルの右手にキュルケ、左手にマチルダが抱きつく。

「それだけ言ったなら、責任とってね／＼／＼／」

「勿論」

二人を優しく、ベットに押し倒しながら……………

翌朝。

アレルが目を覚ますと両脇に服を着ていないキュルケとマチルダが寝ていた。

「……………」

二人とも幸せそうな顔で寝ていたので、起こさないようにそっとベツトから出た。

そして、いつもの日課である鍛錬をこなした。

部屋に戻るとまだ二人は寝ていた。

「朝だよ、キュルケ、マチルダ」

「うん……あと少し」

まだ眠り足りないようだ。

昨夜はかなり激しかったからだろう。

「……………」

「ZZZZZZZZZZ・・・ふっむ!!」

アレルはキュルケの唇を奪った。

息ができずに、キュルケは起きる。

同じことをマチルダにして、二人とも起こす。

「起きた？」

「起きたわ(よ)////////」

二人は顔を真っ赤にしている。

「昨日がかなり激しかったけど、体調はどう？」

「・・・すこし、おなかの下あたりが痛いかな////////」

「あたしも////////」

おなかの付近をさすりながら二人はアレルに答える。

「ごめん、二人があまりに可愛かったから・・・」

そう言って、アレルは杖をふるう。

水の精霊が集まり、二人の身体を包む。

そして、

「あれ、痛くない？」

光が消えると、今まで痛かった部分が嘘のように痛みが消えていた。

「それで、大丈夫だから。二人のつらい顔を見るのは嫌だからね」

「あ、ありがとう／＼／＼／＼」

朝からアレルにドキドキな二人であった。

食堂に向かう途中、周りから突き刺さるような視線を複数感じた。

それもそのはず。

アレルの両腕をキュルケとマチルダが抱きしめているからだ。

その状態で、学院の廊下を歩いていれば、いやでも気がつく。

それに、二人は学院の中でもかなり、人気がある。

キュルケは、トリステイン女子にはない、野性的な魅力とその豊満な胸に、トリステイン貴族の男達は骨抜きにされていた。

マチルダことロングビルは、その知的な雰囲気と大人の魅力で、教師陣からの人気があった。

その二人を引き連れて歩いていれば、このような状態になるのは当

然である。

食堂に入っても、（主に二人を狙っていた男達から）今にも殺さんばかりの視線がアレルに向けられるが、本人はケロツとして自分の席に座る。

アレルの左右にキュルケとマチルダが座る。

キュルケはともかく、マチルダは貴族ではないのだが、オスマン学院長に食堂で食べることを特別に許可されている。

「や、やあ・・・」

先に席に座っていたギーシュが話しかけてくる。

「ああギーシュか。おはよう。どうしたんだい？そんなひきつった顔をして？」

「あ、ああああ」

アレルの後ろの席は学院の二年と三年生の席があるのだが、そこからの殺気がすごい。

アレルは背中を向けているが、ギーシュはアレルに向けられる殺気を彼越しに受けているのだ。

「寝不足かい？」

「い、いや、違うんだけどね……でもどうしたんだい？美女二人も連れて？」

ギーシュは皆の気持ちを代弁した。

「ああ、それはね……」

「そ、それは？」

「それは………キュルケもロングビル（マチルダ）も僕の大切な女性だからさ」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

食堂が一瞬、静寂で満ち、そして……

「……………な、なに

!!」……………

怒号が飛び交う。

特にキュルケとマチルダを狙っていた、教師や生徒は血の涙を流していた。

キュルケとマチルダは顔を真っ赤にした。

「そ、そうなんだ……（なんてうらやましいんだ）」

「ああ、だから、二人や僕に手を出そうとする人はこうなるよ」

そう言って、アレルは杖をふるうと、机の上に置いてあるシルバー（ナイフ・フォーク等）が空中に飛び上がり、食堂の陰から杖を構えていた者に向かい、食堂の壁に縫い付けた。

「……………」

食堂の壁にも固定化の魔法がかかって、強固なものになっているは

ずなのに、シルバーで陰から狙っていた者を縫い付けている。

ただの、シルバーではそんなことは普通できないのに。

縫い付けられていない者達は、皆そう思っていた。

「……ア、アレル。どうやったらそうなるんだい？」

ギーシュが恐る恐る、聞いてきた。

「ただ、シルバーに魔力を纏わせたただだよ。そこら辺にある、武器とは呼べないものとかも、魔力をまとわせることで武器として使えるんだよ」

そう言っつて、シルバーを一本とつてギーシュに見せる。

薄っすらであるが、シルバーに魔力が纏っている。

アレルはそれを壁に向けて投げる。

シルバーは、一直線に飛んでいき、壁を貫通した。

「「「「「」」」」」」

後日、宝物庫付近の壁に刺さっている、シルバー（スプーン）が見
つかったそうだ。

大騒ぎ（後書き）

うまく書けていたでしょうか？

誤字・脱字の指摘をお願いします。

たくさんのご感想がありました。矛盾点を指摘してくれた方々、本当にありがとうございます。また、矛盾点がありましたら、指摘してください！！

スレイプニールの舞踏会（前書き）

最新話です。どうぞ！！

誤字・脱字があれば、指摘の方をお願いします。

踊りの事は、正直よくわからん！！

スレイプニールの舞踏会

スレイプニールの舞踏会。

それは、トリステイン魔法学院の伝統行事。

トリステイン魔法学院に入学した新入生達はこの舞踏会で社交場デビューをする。

社交場に不慣れな新入生に対して、その雰囲気慣れてもらうためのイベントでもある。

この舞踏会は普通の舞踏会とは少し違う。

真実の鏡という魔法道具で自分を理想の姿に変えて参加する。

ほとんどの生徒は自分の父、母、兄、姉などになることが多い。

また、母国の王族などになったりする者もいる。

全ての学年の生徒が姿を変えるため、誰が新入生で、誰が上級生な

のかが分からなくなる。

だから皆、積極的に相手に話しかける。

そして、気に入った相手がいれば、ダンスを申し込む。

その相手のことが気に入れば、互いに真実の名を教える。

この舞踏会で、多数のカップルができる。

なので、上級生も下級生の男子もこのイベントで女の子とお近づき
になろうと張り切る。

「順番にこのカーテンの向こうに来てください」

受付で並び、順番を待つ。

「しかし、君はどんな姿になるんだい？」

「うん。誰だろうね？」

アレルとギーシュは、カーテンの前で並んでいた。

「ギーシュは誰になるか分かるのかい？」

「ふふん、当然だよ」

髪をかき上げながら言う。

「へえ、それは楽しみだね」

「はは、期待してくれたまえ」

順番がきたので、ギーシュはカーテンをくぐっていった。

「次の方、どうぞ」

そして、アレルの番になった。

「鏡の前にたつたら、目を閉じて、自分の理想の人物を思い浮かべてください。目を開いた時、あなたは、その思い浮かべた人物の姿になっています」

カーテンをくぐる前に先生に説明をうけた。

「これが・・・」

カーテンをくぐると、目の前に大きな鏡が置かれていた。

アレルはその鏡の前に立ち、目を閉じて自分の理想の人物を思い浮かべた。

アレルにとって理想の人物。

それは・・・

誰よりも強く。

誰よりも気高く。

誰よりも民を愛し。

誰よりも自分を愛してくれる。

現ゲルマニア皇帝

アルブレヒト三世

アレルの父であった。

「やっぱり、この姿か」

鏡に映る自分の姿をまじまじとアレルは見る。

そして、アレルはカーテンをくぐった。

そこは舞踏会の会場だった。

華やかな会場内では、様々な格好の人が談笑していた。

ある人は、自分の父や母。

ある人は、歴史上の偉大な人物。

ある人は、王族の姿。

特に多かったのは、トリスティンの姫であるアンリエッタの姿をした生徒が数人いた。

「豪華だな……」

周りを見渡し、アレルはつぶやく。

「やあ、アレルさっきぶり」

「……ギーシュか」

「よくわかったね」

「……変ってないじゃん」

アレルの目の前にいるのは、理想の姿？になったギーシュ。

「なんで変ってないんだ？」

「理想の姿……それは僕自身に決まってるじゃないか……！」

ギーシュは自分の身体を抱きしめながらくねくねしている。

「……まあ、いいんじゃないか」

「で、アレルはその姿が理想の人物なのかい？」

「ああそうだよ」

「うん。なんだか狡猾そうな顔をしているね。誰なんだい？」

「僕の魔法や武術の師でもある人だよ（そして大事な家族だよ）」

アレルは幼い頃に、父から魔法・武術の基礎を教わった。

さすがに、現皇帝が常にアレルに教えられるほどの時間があつたわけではないので、後は皇宮内の魔法衛士隊などから教わった。

「へえー、アレルの師匠か。じゃあ、かなり強いんだろう？」

「うん。剣だけで100人以上のメイジをふっ飛ばすからね」

皇帝はアレルと模擬戦をする時、ウォーミングアップと称して、魔法衛士隊と一対多数をする。

「そ、それは、すごいね」

「ああ、剣術だけでそれだからね……さすがに魔法も使われるとかなりきついよ」

前線から身を退いた父であるが、今でもその強さは健在である。

今でこそアレルは父に勝てるが、幼い頃は父の攻撃から逃げ回っていた。

今では、いい思い出である。

「トラウマになりそうだね……」

「そうかい？」

しばらくギーシュと談笑していると、急に会場が暗くなった。

生徒達が騒ぎ出す。

「静粛に!!」

舞台の一角が照らされ、オスマン学院長が表れた。

「新入生の諸君、ようこそ!!ようこそスレイプニールの舞踏会へ。
今宵は身分を気にせず楽しんでくれたまえ」

そして、オスマンはカーテンの向こうに消え……

カーテンの向こうから絶世の美女が現れた……

「オスマンじゃ」

「「「「「……「「「「「

数名の先生は無言で学院長の頭をぶん殴り、引きずってどこかへい
った……

楽隊による演奏が始まり、ダンスの相手を見つげるために動き出す。

「じゃあ僕も美しい花（女性）を誘ってくるとしよう」

ギーシュは相手を探しにいった。

「さて、僕はどうしようかな？」

アレルは周りを見渡す。

すでに、何組かのペアが踊りはじめている。

「うーん。キュルケとマチルダを探すかな」

舞踏会の前に二人はアレルの元に訪れ、

「舞踏会で絶対、私を見つけてね（よ）！！！！」

周囲を見渡してみる。

「……どこにいるんだ？」

二人とも魔法で変身しているからどこにいるかわからない。

しばらく、会場内を歩いてみる。

「ん？」

会場の一ヶ所に生徒達が集中していた。

その中心地には金髪の女性が一人立っていた。

アレルはその女性に見覚えがあった。

「……シヤジャルさん？」

「あら、アレル」

女性がアレルの声に反応し、近づいてくる。

「……ロングビル（マチルダ）だね」

「あら、よくわかったわね」

「そりゃね……」

「意外だったかい？」

「そうだね、まさかテファのお母さんになるとは、思わなかったよ」

マチルダが変身したのはティファニアの母であるシャジャルさんである。

モード大公はエルフであるシャジャルと恋に落ち、テファが生まれた。

ハルケギニアでは、エルフは恐怖の対象であるから、当然、シャジャルとテファは、屋敷の外に出られない。

二人ともモード大公の屋敷にずっと隠れていた。

訪ねてくる人などいない。

シャジャルは、屋敷でテファと一緒に夫の帰りを待つ。

夫であるモード大公は、責任のある立場の人なのでたまにしか帰ってこない。

そんな妻と娘を思っでモード大公は、家臣であるサウスゴータ伯を呼んだ。

マチルダの父は代々、大公家に使える貴族の一門である。

そして、サウスゴータ伯は娘であるマチルダにシャジャル親子の世話を命じた。

最初マチルダは、エルフの親子を自分が世話をすることに抵抗があった。

なぜなら、ハルケギニアでエルフという存在は恐ろしいものであり、聖地を奪った相手である事を教えられていた。

しかし、シャジャル親子と会い、接していくうちに、その考えが間違っていることを知った。

そして、テファのことを本当の妹のように思い世話をしたし、マチルダ自身もシャジャルにとってもよく懐いた。

なぜ、マチルダがシャジャルに懐いたかというと、マチルダの母は彼女が幼い頃に亡くなったからだ。

マチルダは母親の事をあまり覚えていない。

うつすらではあるが自分のことを、抱き上げ、子守唄を聞かせてくれた。

父親が言うには、とても優しい方だったらしい。

しかし、マチルダが物心つく前に、流行病で亡くなった。

ほとんど、母親の愛情を知らずにマチルダは育った。

そんなマチルダに、シャジャルはテファと同じように愛情をもつて
せつした。

いつしかマチルダにとって、シャジャルは2人目の母のような存在
になった。

血はつながってはいないが、マチルダは本当にシャジャルのことを
母と思うようになった。

屋敷から外に出られないシャジャルとテファ。

281

もし、シャジャルとテファの耳が普通の人のようであつたら……

外に出て、いろいろな所に行きたい……

マチルダはエルフの耳ではないシャジャルとテファと一緒に出かけ
る夢を何度も見た……

真ん中にシャジャル。

マチルダはシャジャルの右手を握り。

テファは、シャジャルの左手を握る。

マチルダの理想の人・・・・・・・・・・・・・・・・

それは、“普通の耳”をしているシャジャル。

想像上のシャジャルだった。

「耳がね・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・うん」

すこし、しみりとした。

「・・・・・・・・でも、今日の君も美しいよ」

「／／／／／／／／／／ありがとう」

ちょうど演奏が終わり、新しい曲が流れ始めた。

「踊っていただけかしら、ミスタ？」

「喜んで」

マチルダの手の甲にキスをして、その手をとった。

アレルはマチルダの腰に手をあてる。

2人は踊りはじめる。

楽隊の演奏に合わせゆっくり、踊る。

互いに、相手の目を見つめあいながら踊る。

それほど長い曲ではないが、二人にとってはその曲がとても長く感じられた。

演奏が終わり、手をつないだまま2人は近くのテーブルの方に歩いて行った。

「ふ」。」「」

踊った後に、飲むワインの味は格別だった。

アレルとマチルダの周りには、二人に声をかけたい生徒が集まっていた。

それも、そのはず。

マチルダが化けているシャジャルの姿は、長く美しい金髪とおっとりとした瞳、全身から溢れる優しいオーラ。

何より、その大きな胸……

アレルが化けている父親の姿。

がっしりとした体格、少し癖毛のある金髪を短めに切りそろえている、瞳はどこまでも澄み切った空のような蒼、全身から王者として

のオーラを出す。

周りから見れば、二人とも美男・美女である。

そんな2人に声をかけたいのだが、話しかける勇氣はないようなので、少し離れた所から2人を見ている。

「なんか、視線が多いね」

ワイングラスを片手に持ちながらアレルは言う。

「マチルダがあまりに綺麗だからかな？」

「ふふ、アレルもかなりかっこいいですよ」

なんとも近寄りがたい。

アレルとマチルダはしばらく談笑した。

「そろそろ、キュルケを探してくるよ」

「ええ、いつてらっしやい」

マチルダとキュルケはアレルがどちらか一方だけを大切にするのはなく、平等に接してくれることが分かっている。

アレルがマチルダと離れると、彼女の周りに男達が集まり、しきりにダンスを申し込んでいた。

アレルも、キュルケを探す途中で何人かの女性に声をかけられたが、丁寧に断った。

「さて・・・キュルケは誰になっているんだろう？」

「は〜い、呼んだかしら？」

後ろから、抱きつかれた。

大胆に胸元あけた真っ赤なドレスを着た美女がアレルの後ろにいた。

「キュルケかい？」

「そうよ」

「僕が見つけるはずだったけど、先に見つけられちゃったね」

「ふふふ、私の方が先に見つけちゃったわね」

「そうだね」

アレルが振り返ると、今のキュルケをさらに大人っぽくした美女がいた。

「ツエルプストー辺境伯の奥方かな？」

「よくわかったわね。そうよ、私の母上よ」

「一応パーティーでお会いしたからね。奥方が若い頃の姿だね」

初めてパーティーでツエルプストー辺境伯とその奥方にあつた時は今のキュルケより少し歳をとっていたが、それでもパーティーに来た貴族達をその美貌で虜にしていた。

「ええ、子供を産んでも体形が変わらなかったそうだし、今でも美しい身体を維持しているから、私にとって、母であり、美の師匠でもあるかしら」

「キュルケも将来は奥方以上に綺麗になるよ」

「ふふふ、ありがとう」

「踊っていただけのかな？美しいレディ」

「喜んで」

アレルはキュルケから差し出された手に口付けをする。

そして、二人はダンスの輪に加わった。

アレルとキュルケは周囲とは少し違ったダンスをする。

大多数の生徒達は楽隊の奏でる演奏に合わせて、静かにゆっくり踊る。

初め2人は楽隊の曲に合わせて踊る。

他の大多数の生徒と同じように踊るが……

((にや))

2人は徐々に、踊りのテンポを上げる。

他の生徒の踊りを例えるのであれば、決まった形のダンスで変化のない、つまらないもの。

2人の踊りは、そんな型に通りのダンスではない。

キュルケは自身の属性の『火』のように、荒々しく燃える炎のように激しく、そして情熱的に踊る。

アレルは、キュルケの踊りに合わせつつ、時折、力強い風を炎キュルケに送り、彼女に答える。

アレルとキュルケの踊りが終わるころには、他の生徒達は2人の踊りを魅入っていた。

最後にアレルとキュルケは手をつなぎつつ、円を描くようにまわった。

演奏が終わる瞬間

キュルケはくるりとまわり、アレルの胸の中におさまった。

演奏が終わった時、会場の中心で、2人は抱き合うような形で立っていた。

会場に生徒達から溢れんばかりの拍手が2人に贈られる。

アレルとキュルケは手をつなぎながらダンスエリアから出て、マチルダのいる所まで歩いて行った。

そして、舞踏会も終盤に差し掛かり、この行事で新しく何人かのカップルができた。

スレイプニールの舞踏会（後書き）

メインヒロインが全然出ない……

テファを出したいのに……

カトレアもどうしよう？ハーレム要員に入りはもう確定かな？

カトレア（前書き）

かなり、難しいかな・・・

少々スランプ気味です。

誤字・脱字の指摘をよろしくお願いします。

カトレア

「であるから、効率的に魔法を使うには

」

アレルはコルベール先生の授業を受けていた。

「……………（お腹すいた……………）」

授業を聞きながら空腹で授業をほとんど聞いていなかった。

しかも、彼の席は窓側のため暖かな陽の光が直撃する所にあるので

「……………ZZZZZZZZ」

眠った。

~~~~~

廊下を誰かが疾走する音が聞こえてきた。

「失礼します！！」

勢いよく、ドアが開けられ学院長の秘書であるロングビルことマチルダが入ってきた。

「ミ、ミス・ロングビル！？いったいどうしたのですか？」

コルベールが尋ねる。

「コルベール先生！！ミス・ランカスターはいますか？」

「ええと、あそこにいますが」

アレルがいる席の方を指さす。

「ミス・ランカスターにお客様がいらっしゃっているので授業を抜けてもらってもよろしいでしょうか？勿論、オスマン学院長の許可は頂いています」



「それなら、問題ありませんが」

「では—！」

そう言って、マチルダは眠っているアレルをレビティーションで持ち上げて連れていた。

場所：学院長室

「……………」

「……………」

「……………」

「あじあじ」

学院長室は気まずい空気が満ちていた。

「……………」

「まあまあ」

「……………」

「眠るな!!」

「冗談ですよ」

この部屋には、オスマン学院長、ヴァリエール公爵、カトレア、アレルの4人がいる。

「で、どのような用件でしょうか？」

笑みを絶やさず、公爵に訪ねるアレル。

「……………これがゲルマニア皇帝とツェルプストー辺境伯の許可状だ」

「拝見します」

□  
「  
ヴァリエール公爵から受け取った許可状には、ヴァリエール公爵の次女の治療を許可することが書かれていた。」

それには、皇帝陛下とツエルプストー辺境伯の署名と印がしっかりとされていた。

ディクト・マジックをかけて確かめる。

「……確かに、本物のようですね」

ゲルマニアの貴族である、アレルがカトレアを勝手に治療することはできない。

なので、アレルは内密にカトレアの治療をしようとしたが、騒ぎになってしまったので内密に治療をするというわけにはいかなかった。

「……治療の報酬として用意できるものは、ランカスター殿が望むものを出来る限り用意しよう」

ゲルマニアで1、2位を争うと聞いていいほど、アレルの治めるラ  
ンカスター領。

その統治者であるアレルは勿論とんでもなく大金持ちである。

それこそ、トリステイン王国が民から集める税金以上の収入を毎月  
得ている。

そんなアレルに金銭的な報酬はあまり意味がない。

「分かりました。では、カトレア嬢を診察しましょう」

「よろしくね」

のほほんとしているカトレア。

場所を学院の保健室に変える。

ベットの上にカトレアは身体を横たえている。

アレルは最初に基本魔法である「ディクト・マジック」をカトレアにかける。

これは、水メイジが治療の対象の病気がなんなのかを見るときによく使ったりする魔法である。

この魔法で、対象の体内の水の流れを透視し、その流れがおかしいところを治癒するのが基本的な治癒の方法である。

「……うん、水の体内の流れには異常は見られないな」

「あら？そつなですか？」

さらに解析の精度を上げてみても、結果は変わらない。

「……（ディクト・マジックでは分からないのか？）」

アレルの目には、カトレアの体の隅々の水の流れが見える。

「健康な人の水の流れと大差はないのですがね・・・」

「・・・・・・・・（秘薬の使い過ぎでもないのか？）」

予想していたものと違っていたのでアレルは首をかしげる。

「カトレア嬢、少しお願いがあるのですがよろしいですか？」

「どのようなことですか？」

「これから私が行使する魔法は少々変わっているので驚かないでくださいね」

「分かりましたわ」

「では・・・・・・・・」

アレルの周りに、公爵領で平民を治療した時と同じ、光が集まりはじめた。

「……綺麗」

カトレアは光の中心にいるアレルをみて、その美しさのため息をついた。

「みんな、頼むよ」

アレルのお願いを聞いて、光がカトレアの身体を包んだ。

（なんだ！？この魔力の塊は？）

アレルは精霊達の力を通して、カトレアの身体を見てみると驚いた。

彼女の身体の心臓付近にある異常な魔力の塊を見つけた。

その魔力の塊は、カトレアの心臓を圧迫するように存在していた。

さらにカトレアが魔法を行使する際に精神力を通す回路を圧迫していた。

それらの影響が身体全体に広がっていた。

（ただの魔力の塊であれば、先ほど使った『ディクト・マジック』で見つけることが可能なはず……しかし、それでは見えなかった……）

アレルは精霊の力を借りて、初めて見る事ができたこの塊について考えていた。

似たようなケースをアレルは見たことがある。

そのケースでは、その人の系統の塊が身体のどこかでできて、体内の水の流れや精神力などの流れを阻害していた。

事前にカトレア嬢の系統は土であると聞いていたが、この塊は土ではない。

そして残りの火・水・風でもない……

では、この塊はいったい何の系統なのか考えていると



『これ、昔みたことあるの〜』

『あるの〜』

『大いなる意思の敵なの〜』

『嫌い〜』

カトレアについた精霊が口々にアレルに訴える。

「………解析終了」

カトレアを包んでいた光が消えた。

「あら、もう終わりなの？」

カトレアは少し残念そうに言った。

「ええ、終わりました」

「それで、私の病は治るのかしら？」

いつにもなく真剣な顔でカトレアはアレルを見る。

「結論から言えば治ります」

「っ！！ほ、ほんとう？」

何人もの高名な水メイジに見てもらっても、治らなかった病が治るということにカトレアは驚いた。

半ばあきらめていたからだ。

自分はもう治らないと思っていたから。

「治ります。カトレア嬢の心臓付近にある魔力の塊を取り除けば」

「魔力の塊？」

「ええ、カトレア嬢の心臓付近に魔力の塊ができていますよ。それ自体は珍しいことではないのですが……」

「どこがおかしいのですか？」

「普通であれば魔力の塊はその人の系統の塊なのですが……カトレア嬢の塊は火・水・風・土の系統でないのです」

「？」

「火の系統の塊であれば発熱、水の系統の塊であれば低体温、風の系統の塊であれば血流の異常、土の塊であれば身体の硬化があげられます、カトレア嬢に当てはまる症状は？」

「え〜と、ほとんど当てはまりますね」

「しかし、カトレア嬢の体内にある塊は四系統の塊ではない」

「じゃあ、なんなのですか？私の体内にあるものは……」

カトレアは自分の胸の付近を握りながらアレルに尋ねる。

「……おそらく『失われた系統』でしょう」

それが意味するのは……

「…………『虚無』…………」

「ええ、カトレア嬢の体内にあるのは『虚無』の魔力の塊です……  
・おそらく貴女には虚無の系統の素質があつた……しかし、  
それを使えるような身体の構造ではなかつた……使われずに体  
内で行き場を失つた『虚無』は蓄積していつて、様々な症状を引き  
起こした」

「……………」

カトレアも言葉を失つた。

始祖ブリミルが使つたとされる系統『虚無』

すでに伝説とされている系統。

その『虚無』が自身の身体を蝕んでいた。

「……………どつして?」

「『虚無』の系統を行使できたのは始祖であつた……その始祖の血脈である王家はその系統に目覚める可能性が高い（現にテファはそうだし）……ヴァリエール家は王の庶子の血脈であるから可能性は高いですね」

「でも、私には『虚無』の素質はあつても、使う、素質はないのでしょ？」

「ええ、そうです」

「じゃあ、とりだしてくれませんか？」

「分かりました、目を閉じて深呼吸をして、気を楽にもってください」

「はい」

カトレアは目を閉じゆっくり深呼吸をした。

少しだけであるが、カトレアは震えていた。

「……………」

「……………うん？」

アレルはカトレアの頭を優しく撫でた。

「大丈夫、必ず助けるから」

「はい」

カトレアは顔を少し赤くしながら頷いた。

アレルは再び精霊達を呼び、彼等の力を借りた。

ゆっくり、カトレアを中心に精霊達が回る。

部屋が光で満ちる。

しばらくするとカトレアの胸の付近から、『虚無』の塊が出てきた。

「……………術式固定」

アレルの魔力は精霊達を介してその塊を覆う。

しばらくして、アレルは魔力の流れを止めた。

カトレアの胸の上で浮遊していた塊は消えて別のものになった。

それは桃色の美しい宝石だった。

アレルはそれを手に取り、ディクト・マジックをかける。

その宝石には、おびただしい量の魔力が込められていた。

アレルはそれに封印魔法をかけた。

「……………うっ」

カトレアが目を覚まし、ベットから上体を起こす。

「気分は？」

「とても良いわ・・・さっきまでと全然違う」

「これで、貴女の病の原因は無くなりました」

「立ちあがっても大丈夫かしら？」

「ええ」

アレルはカトレアに手を差し出す。

カトレアはアレルの手をとり、マットから起き上がる。

「すごい！・・・身体がすっごく軽いわ！・・・」

はしゃぎまわるカトレア。

「きゃっ」

カトレアは勢い余ってバランスを崩す。



「おっと」

カトレアをアレルは抱きとめる。

「//////////」

アレルの腕の中で真っ赤になるカトレア。

「まだ、病み上がりなんだから気をつけて。それに、病が治っても体力はまだ回復していないんだから」

「はっ、はい」

顔を赤らめるカトレア。

「んっ？どうしたんだい？」

俯くカトレアにアレルは尋ねる。

「……もう少し……このままでいいですか？」

上目づかいでアレルを見上げるカトレア。

「喜んで」

しばらく、アレルとカトレアは抱きしめ合っていた。

それをカトレアの様子を見に来た公爵が見てしまい、公爵がアレルに決闘を申し込み襲いかかってきたが、突如現れたゴーレムの腕が公爵を握りしめた。

そこには、満面の笑みを浮かべたカトレアが杖を父である公爵に突きつけていた。

「お父様？何をされようとしたのですか？」

「い、いや、カトレア？」

普段の優しいカトレアからは想像できないプレッシャーが出ていた

ので、公爵は上手く返せなかった。

「お父様、この方は私の病を治してくださいましたのですよ。その方に杖を向けるなんて……それに……」

「？」

アレルはカトレアと公爵の話の横で聞いていたが、カトレアの発言に驚いた。

「……この方は、私の夫になる方ですよ」

「へっ？」

アレルはカトレアの発言に驚き。

「な、な、なな」

公爵は顔を赤色や青色に変えた。

「あらっ？私のこと嫌いのですの？」

アレルに上目づかいで尋ねてくるカトレア。

「え〜と・・・僕には婚約者がいるんですけど。今3人いるんだ」

頬をぼりぼり掻きながらカトレアに向く。

公爵からは殺気が向けられる。

それに気付いたカトレアは父親をゴーレムの手でさらに強く握りしめた。

「それでもいいの？」

「はいー」

アレルに抱きつくカトレア。

「ほほほほ、ええの若いものは・・・」

「アレル……」

遠見の鏡で保健室の様子を覗いていたオスマンとマチルダ。

「ミス・ロングビルどうじゃい？わしと……」

「ふざけんじゃないよー!!」

セクハラをしてきたオスマンをマチルダはゴーレムで潰した。

## カトレア（後書き）

いかがですか？

前話の最後で、マチルダとキュルケを食ったところの批判があったので消しましたが、今後の予定で、かなりまずい部分が出る可能性があるがあるので、どうしようか考え中です。

感想や指摘をしてくれた方に返信をしたいのですが、なにぶん本文を書くのと、大学の講座が忙しく、時間があまりとれません。申し訳ないです。

## 長期休暇 1 (前書き)

お久しぶりです。

大学の授業が忙しくて、書く暇がありませんでした。

しばらく、ハーレムルートの方を執筆すると思います。

## 長期休暇 1

かりかりかりかり

かりかりかりかり

かりかりかりかり

・・・・・・・・

本日。

トリステイン魔法学院は長期休暇前の実力テストを行っている。

筆記試験は現代語学・古代語・歴史・算術・選択科目。

実技試験は魔法薬調合・課題魔法・錬金。

トリステイン魔法学院では、必修科目以外は生徒が自由に自分の受



けたい授業に出る。

選択科目の授業に出るのも出ないのも生徒の自由なため、サボり気味の生徒も多々いる。

生徒達は今、目の前の羊皮紙に書かれている古代語の解読をしている。

現在は使われなくなった言語である古代語は必修科目である。

『もし、この授業で良い点をとれなければ……長期休暇は無いものと思え!』と、言われるぐらいの課題を休暇中に出されるので、皆必死で解読する。

『000年、トリステイン王国で

』

トリステインの歴史の一節を訳す問題があった。

ルイズ&キュルケ&タバサ(すらすらすら)

学年秀才組は楽々解いていく。

それと比べて……

ギーシュ&マルコリア&ヴィリエ).....)

口から青白い雲のようなものが出している.....

アレル(ZZZZZZZZZZZZZZZZZZZ)

試験開始15分で、アレルは問題を全て書いたので寝ている。

『そこまで!』

試験監督の先生が指示を出す。

「「「終わったー!」「」」

魂が帰還したギーシュ、マルコリア、ヴィリエが叫ぶ。

『結果は一週間後に発表されます。』

先生は集めた羊皮紙を確認して、教室を出て行った。

そして、一週間後……

1位：アレル

2位：ルイズ・キュルケ・タバサ

15位：モンモランシー

休暇中の課題対象者：ギーシュ・マルコリア・ヴィリエetc……

掲示板の前で試験の結果を見ているギーシュ達は真っ白になっていた。

学院前では、帰省する生徒達を迎えにきた馬車で大混雑していた。

門の前から少し離れた広場でアレルはマチルダのことを待っていた。

「待ったかい？」

「いや、今来たところだよ」

アレルとマチルダは長期休暇をウエストウッド村で過ごす約束をしていた。

「キュルケは来ないのかい？」

マチルダはアレルに尋ねる。

「誘ったんだけど、彼女は一度実家に帰るらしいよ」

「そうかい。で、風竜で行くのかい？」

アレルは学院に風竜を連れてきている。

しかし、その風竜がいる小屋は空っぽだった。

「ああ、彼女は少し用事があるらしくてね」

「用事って・・・風竜が？」

「里帰りらしいよ」

「（風竜が里帰り？）・・・じゃあ、どうやってアルビオンまで

行くんだい？」

アルビオンは浮遊大陸のため、翼を持った幻獣もしくは、船で行くしかない。

「大丈夫、もうすぐ代わりが来るから」

「？」

すると門の前付近が騒がしくなる。

皆、空の方を指差しながら騒いでいる。

彼らの指さす先にいたものは………

純白の白い身体と鳥のような翼を持ち、トリステインの空を駆ける幻獣『ペガサス』がいた。

ペガサスはトリステインでも滅多に見ることができないくらい珍しい幻獣である。

ある古い記録によれば昔はハルケギニア全土にペガサスが生息していたらしい。

当時のハルケギニアではペガサスの持つ羽を使った物（例えば、帽子に付ける羽飾り、羽を使った枕 e t c . . . ）が流行し、それに

よりペガサスの乱獲が始まり、その個体数を減らしていったそうだ。そのため、今現在ペガサスが生息している場所はハルケギニアでも「魔の森」と言う、強力な幻獣が多数生息する所だけになってしまった。

ペガサスはトリステインで王族の馬車を引くユニコーンより、上位のランクの幻獣であるため、過去何度か、トリステインでもペガサスを捕獲しようと軍隊が魔の森に向かったがことごとく失敗した。

そんな滅多に見ることができないペガサスがここトリステイン魔法学院に表れたので、帰省するために馬車を待っていた生徒達は大興奮していた。

そして、ペガサスはしばらく学院の周囲を巡回した後、学院の広場に降りてきた。

「おい！あれってペガサスだよな？」

「なんでここにいるの？」

「誰かの使い魔か？魔の森のペガサスか？」

生徒達がペガサスの降りた広場に群がり、口々に話す。

「・・・大騒ぎだね」

「そっだね」

「・・・あれが代わりかい？」

「そっだよ」

アレルはそう言って、今降りてきたペガサスの方向に向かおうとしたが、突然一人の生徒が「素晴らしい！このペガサスはこのトリステイン貴族の僕にこそふさわしい！！」

そう言って、その生徒はペガサスに向けて火のラインスペル『ファイアー・ウィップ』を放った。

しかし、その魔法はおえがさすに達する前に、見えない壁に阻まれ消えてしまった。

「なっ!？」

生徒は驚愕するが、「・・・ふふふ、ますます欲しくなった・・・」

生徒はペガサスに対して様々な魔法を放つが全て、不可視の壁に阻まれた。

「ゼーゼー・・・いかげん僕の物になれ!!」

そんな生徒のことは眼中にないとばかりにペガサスは周囲を見渡す。

そして、生徒達の群の向こうに目的の人物を見つけた。

ペガサスはゆっくりその人物の元に歩いて行った。

「おい！まだ僕の話は終わっていないぞ！！」

さつきから、ペガサスに魔法を放っていた生徒が喚くが、ペガサスはその生徒を無視する。

最初、目的の人物のいる方にいた生徒は、

「（もしかして、僕（私）？）」

と考えていたが、ペガサスの視線が自分達に向いていないことが分かるとその視線の先を見た。

そこには、微笑を浮かべているアレル・ラ・フォン・ランカスターがいた。

ペガサスはアレルの前に来ると、その首を下げた。

アレルはそんなペガサスの首を撫でた。

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

周囲の生徒達は、アレルがペガサスの首筋を撫でる姿が、神聖な儀式のように思えた。

しかし・・・





そうやって、アレルはペガサスの首筋を撫でていた手を離し、少し離れる。

「高貴な家柄の私が触れられないはずがない！」

そうやって、その上級生はペガサスに触れようとするが、後1mと  
いうところで不可視の壁によって跳ね飛ばされた。

尻もちをついたその上級生は顔を真っ赤にして、もう一度、ペガサ  
スに触れようとするがまた見えない壁によって吹っ飛ばされる。

「無駄ですよ。この子は主と、主が認めた者にしか触れることがで  
きないし、乗ることもできません。それに、貴方もご存じのはずで  
す。トリステインのユニコーンが王族と乙女しか騎乗を許さないよ  
うに、ペガサスも邪な考えを持つ者は騎乗させないのでですよ」

アレルはそうやって、上級生を見る。

「貴様！僕はトリステインの伯爵家の長男だぞ！！そんな無礼が許  
されるのか！今すぐそのペガサスを僕に引き渡せ！！」

男は杖を出して喚くが既に精神力を使い果たしてしまって、魔法を  
行使できない。

「ほう・・・我が領のペガサスを貴方に何故渡さなければなら  
ないのですか？それも他国の貴族の貴方に？大方、このペガサスを手  
に入れて、王宮に献上するつもりでしょ？」

アレルの冷めた目が男を見る。

「うっ……そんなことはない」

上級生は顔を背けるが、周囲から見て彼が何を考えていたか分かった。

確かに、これほど珍しい幻獣であるペガサスを王家に献上すれば莫大な褒美が支払われるだろうし、王家に対して顔が売れる。

「もし、我が領のペガサスを無理矢理奪うのであれば、それ相応の報いを受けてもらうことになりますよ？それに……そろそろ僕も帰りたいので失礼させていただきますただきたいのですが？」

「なに！？まだ話は終わっていないぞ！！そのペ」

「確か貴方の家は幻獣から採れる秘薬などを扱っていましたがね？いたいその秘薬はどこで手に入れたのでしょうかね？」

アレルは微笑を浮かべたまま言うが、目が笑っていない。

「そ、そんなの決まっているじゃないか！幻獣を討伐した時や、売りに出された物を」

「ほ……では最近、幼い幻獣が狙われる事件を御存知ですか？」

「う……さ、さあ、知らないなあ」

「確かに、成体の幻獣は扱いが難しい……しかし、まだ幼い幻獣

であれば？どうなるのでしょうか？特に、子育てをする時期の幻獣は気性が荒くなる・・・そんな幻獣が我が子を殺されてしまったら？」

「さ、さあ」

「当然、我が子を殺した人間を探します。そして復讐する・・・」

「な、何が言いたいんだ」

「ある筋の情報で、それを専門にする貴族がいると聞いたのですよ。平民を幻獣の巣に送りこませ、幻獣の気が平民に向かっていている間に、別の者が幼い幻獣を狙う・・・戻ってきた幻獣は我が子が殺され、無惨な姿になっているところを見て、おとり役の平民を殺す・・・」

「うっ、し、失礼する。」

上級生はこれ以上何を言われるかわかったものじゃないので、急いで、自分を迎えに来た馬車に乗り込んで、逃げるように去っていった。

「・・・」

「さて、僕らも行くところか」

マチルダの元に行きアレルは言う。

「ごめんね、暗い話をして」

アレルがマチルダに謝る。

「・・・いや、大丈夫だよ。でもアレル・・・そんなこと話して大丈夫なのかい？」

「問題ないよ。僕の話聞いてあの上級生のことを嫌悪した者はほとんどいないようだしね・・・」

アレルは悲しそうに言った。

「幻獣もそうだけど、やはり民の扱い方はひどいようだね」

「・・・そうだね」

2人はしばらく黙りこんだ。

「行こうか」

「そうだね」

いつまでもそうしているわけにはいかなかったので、2人は気持ちを切り替えた。

「で？あたしはペガサスに乗れるのかい？」

ペガサスの前に来たマチルダがアレルに尋ねる。

「ああ、問題ないよ。それに・・・よつと」

「きゃっ!」

アレルはマチルダをお姫様抱っこしてペガサスに騎乗した。

「ちょっと、ア、アレル」

マチルダが顔を赤くしたまま抗議の声をあげる。

「大丈夫。このペガサスは主の認めた者には従順だから」

「そ、そうゆうことじゃなくて!」

「じゃあ、出〜発」

アレルがそう言うと、ペガサスは閉じていた羽を広げた。

そして、学園の広場を軽く走ると、空に飛びたった。

「風竜より少し時間がかかるけど、今日中にラ・シエーロの港まで行って、そこにあるランカスター家の船に乗るから」

アレルはマチルダの抗議の声を無視して笑いながら言う。

「はははははははは」

「い〜や〜あああああ」

『コロン』

学院の空には、アレルの笑い声とマチルダの叫び声とペガサスの鳴く声が響いた。

後日、トリステインの伯爵家の1つが多数の幻獣に襲われたそうだ。

その後、アレルからペガサスを奪おうとした上級生の姿を見た者は一人もいない。

## 長期休暇1（後書き）

いかがでしょうか？

約3カ月ぶりの更新なので、いまいちかもしれません。



長期休暇2（前書き）

すこし遅れました。

どうぞー！

## 長期休暇 2

S i d e : 港の警備兵

「……暇っすね」

空をぼんやり見ながらそうつぶやく男がいた。

「しょうがないだろ。今日はラ・ロシエールからの空船を飛ばないんだから」

先輩の警備兵がそう返した。

アルビオンは一定のコースでハルケギニア上空を周回浮遊し、2つの月が重なる夜にトリステインのラ・ロシエールに最接近する。

現在アルビオン大陸が浮かんでいる場所はラ・ロシエールから一番離れている。

この港は主にラ・ロシエールから来る空船を係留するための港のため、船の来ない日は暇なのだ。

「でも、離れていても空船は飛ばせるじゃないですか?」

警備兵は疑問を口にする。

「あのな、これだけラ・ロシエールから離れていたらこの港に来る前に風石が無くなって、落っこちまっぞ」

先輩の警備兵はそう答えた。

「それなら、風石を大量に積みばいいじゃないですか？」

「そんなことしたら、とんでもない量の金が吹っ飛ぶわ！」

「あつ、確かに」

ハルケギニアで使われる空船は風石を動力にして宙に浮かぶ。

風石1つで、空船はかなりの時間浮かぶことができる。

そして風石のほとんどはアルビオンで産出される。

アルビオンは浮遊大陸のため、アルビオンの地面の下には風石の鉱脈がある。

その鉱脈の権利は王家にある。

王家は風石の鉱脈を許可なく採掘し、それを売ることが禁じている。

一部、王家に許可された者（ほとんど貴族）がその権利を手に入れ、さらにその権利を商人達に高値で売る。

風石は小さな塊でも膨大な風の力を有しているため、アルビオン王家はその力が軍事利用して、ハルケギニア1の空軍を作り上げた。

それに目をつけた各国も、空軍を作ろうとしたが船を浮かべるための風石はアルビオンが握っているため、アルビオンと同程度の空軍

を作ることは実質不可能だった。

アルビオンは風石をそれらの国に高く売り、かなりの利益を得た。

そして、商人たちはアルビオンで生産できない物をアルビオンに輸出し、帰りに自分達が使う分以外の風石を独自のルートで手に入れ他の国に売る。

それでも空船を動かすにはまったく足らず、風石の値段はトリステインでは2〜3倍の値段で売れる。

そうになると、商売をする者や船を動かす者はなるべく風石の消費を少なくしてたくさんのお金を儲けを出したいのでアルビオンが接近する日や気流を上手く使うものが増えた。

こんな日に、ラ・ロシエールからこの港に空船は来るはずがないと警備兵は思っていたので、

「まあ、俺寝るわ」

そう言っつて、同僚は木の箱の上に寝そべった。

「先輩、寝るんすか？」

声をかけるが既にいびきをかいて寝ている。

「は〜俺一人で警備ツすか・・・」

ため息をついた。

しばらく真面目に警備をしていると、雲の切れ目に何かが見えた。

「なんだ？」

徐々にその何かがこちらに近づいてきた。

急いで先輩の警備兵を起こす。

「先輩、先輩、空船が近づいてきますよ！」

「うっ、うるさいな、帆に印は？」

基本的に空船にはマストと帆があり、帆には貴族であれば家紋、商人であれば商標、客船であれば客船の印が描かれている。

「貴族の家紋でした。それと気になることが・・・」

「なんだ？」

「どつやらその船はラ・ロシエールから来たみたいですよ」

同僚の指差す方を見ると、巨大な空船が港に近づいてきた。

「」  
「」  
「」

そしてその空船は目の前の港に入港した。

ハルケギニア1の空軍を保持するアルビオンでもこれほど巨大な船は見たことがない。

警備兵はその船を呆然と見ていた。

「なあ」

「はい」

「でかいな……」

「でかいっすね……」

「……」

「「仕事するか（しますか）」」

2人は人夫を集め停泊作業をした。

しばらくして、船から緑色の髪の妙齡の美女が現れた。

警備兵も人夫も手の動きを止めた。

「うほっ！いい女！！」

「先輩……口説くつもりっすか？」

「勿論！」

鼻息の荒い先輩の警備兵を見ながら言う。

「おっ！美少女が！！」

さらに船から銀髪の美少女？が現れた。

緑の髪の女性はその銀髪の美少女の腕を自分の腕で挟み、こちらに歩いてきた。

「よっしゃ〜！！俺の紳士的な対応をお前にみせてやる」

「はいはい」

先輩の警備兵は自分の服装をチェックした。

そして、2人を出迎えた。

「ようこそ、アルビオンへ！お嬢様がた！」

緑色の髪の女性はため息をつき、銀髪の少女？は笑顔だが目が笑っていないかった……

そして、港に断末魔が響いた。

「くそ、まさか男の娘だったとは・・・」

地面に手をつき先輩の警備兵はうなだれる。

その後、先輩の警備兵は銀髪の少年からO・H・A・N・A・S・Iをうけた。

「先輩・・・」

そんなみつともない先輩を見ている警備兵。

「ちくしょー！今日はとことん飲むぞ！！お前もこい！！」

涙を流しながら、後輩を誘う。

「あつ、すいません先輩。仕事終わったら彼女とデートなんでむりっす」

さらっと、後輩が爆弾発言をする。

「・・・」



「お前って、彼女いたんだ・・・」

「はい」

「・・・」

「ちくしょ〜」

先輩の警備兵は泣きながら走り去っていった。

「さて、残りの仕事片付けますか」

走り去った先輩を放って、仕事を再開する後輩の警備兵だった。

Side end 港の警備兵

「じゃあ行くっか」

「・・・ええ」

マチルダはアレルの腕を抱えた。

警備兵に O・H A・N A・S I をしたので、アレルの機嫌は少し良くなった。

そして、手配をしてあった馬車に乗り込みウエストウッド村に向かった。

途中、馬車の横を泣きながら走りぬく者がいたが、無視した。

ウエストウッド村の森の前で馬車を降りて、2人は森の中へとはいっていった。

しばらく森の中を歩くと、数件の小屋が見えてきた。

アレルは一軒の小屋の扉をたたいた。

「はい」

家の中からマチルダにとっては妹同然の少女の声。

アレルにとって愛しい人の一人である少女の声がした。

「どちらさまですか？」

ドアが開き、その少女が顔を出した。

「ただいまテファ」

アレルとマチルダは微笑みながらその少女に言った。

「お帰りなさい、マチルダ姉さん、アレル」  
少女も笑顔で2人を迎えた。

家の中に入って、しばらく2人は小さな子供達の相手をした。

マチルダもアレルもこの村の子供達にとっても懐かれている。

マチルダの場合。

「ねえ、マチルダ姉ちゃん、外の話聞かせてよ！」

「私も！ほら、あ『土くれフーケ』のお話！」

「お姉ちゃん、ゴレム出して！」

「おやおや」

マチルダは苦笑いをした。

マチルダは子供達にトリスティンの悪い貴族をこらしめる怪盗「土くれフーケ」の話聞かせていた。

子供達の大好きなお話の1つである。

この話はマチルダが昔、悪政を行う貴族達から財産を奪い領民に分け与えた話で、子供達にとって『土くれのフーケ』はヒーローなのだ。

アレルの場合。

「兄ちゃん！『天帝』の話を聞かせて！」

「古代竜との戦いのお話」

「古代竜はその後どうなったの？」

「どうなったの？」

「そうだね」

アレルは苦笑しながら子供達の相手をする。

そんな2人の様子を見て、テファは微笑む。

1時間ぐらい2人は子供達の相手をした。

その後、アレルは子供達と一緒に、村の泉に泳ぎに行った。

久しぶりにテファとマチルダはいろいろな話をした。

手紙のやり取りは頻繁にしていたが、やはり直接話した方が話かは

ずむ。

マチルダはテファの淹れた紅茶を飲みながら、トリステインの学院長秘書をしている時の話や、アレルが学院に入学してきてからの話をテファにした。

学院でのアレルの評判。

ギトーとの決闘。

告白。

カトレアの治療。

自分達以外の婚約者について。

様々な話をした。

テファはキュルケやカトレアの話聞いた時、特に気にしていないようだったので、マチルダは少し驚いた。

「テファ・・・気にしていないのかい？」

「何がですか？」

「えっと・・・アレルがテファ以外の女と付き合うこと」

「ええ、かまいませんよ」

「どうしてだい？」

「姉さん、アレルがどういった性格か知っているでしょ？」

「ええ」

「私はアレルが好きになった女性であるならきつといい方だと思います」

「そうだね」

2人は微笑む。

マチルダは紅茶を飲むとするがカップの中は空だったのでテファに紅茶のお代わりを頼んだ。

テファはマチルダからカップを受け取り台所に向かった。

「・・・強くなつたね」

マチルダは義妹の成長に言葉をもらす。

突然、台所の方から食器が割れる音が聞こえた。

「テファア!？」

マチルダは急いで台所に向かう。

洗って置いてあった食器が床に落ちて粉々に砕けていた。

流しの傍に真っ青な顔のテファアがいた。

「テファア、どうしたんだい!？」

マチルダがテファアに駆けよる。

「だ、だいじょうぶ」

テファアは真っ青な顔で微笑みながらマチルダに言う。

「そんな顔しているの無理するんじゃないよ!」

マチルダは急いでテファアを寝室に連れて行きベッドに寝かせた。

「テファア、具合はどうだい?」

ベッドで横になっているテファアに心配そうに聞く。

「ごめんね姉さん、もう大丈夫だから」

そう言って、テファアはベッドから起き上がるつとめるが

「だめだよ!今日はゆっくりしてるんだ!」

マチルダはテファを無理矢理ベットに寝かしつけた。

「具合が悪いならそう言えばいいのに……」

「ごめん……最近体が少しだるくて……」

「指輪は使ったのかい？」

テファが指に嵌めている指輪を見ながらマチルダは聞く。

「うん、試しに使ってみたけどあまり効果がなかった」

「そうかい……アレルが帰ってきたら一回見てもらおうね」

マチルダはテファの頭を優しく撫でながら言う。

「うん……」

テファはこくりと頷く。

「テファ、何か欲しい物はないかい？」

「オレンジが欲しいな」

「はいよ、今すぐ取ってくるから」



そうやってマチルダは数分しないうちに村の果樹園で採れるオレンジをいくつか取ってきた。

オレンジの皮をナイフで剥き、一口サイズに切ってテファに渡した。

テファはマチルダが切ってくれたオレンジを食べた。

けっこうな量があったがテファは全部食べた。

「食欲はあるみたいだね」

「うん、でも急に酸っぱい物が欲しくなったりする時が最近多いの」

「（酸っぱい物が急に欲しくなる・・・）テファ・・・これから聞くことに正直に答えてね」

マチルダは真剣な顔でテファを見た。

「まず

」

アレルは子供達にお願いされて、村の泉に泳ぎに行った。

魔法で大きな滑り台を作り遊んだり、水魔法で作った幻獣の背中に乗って競争をしたりしてたくさん遊んだ。

「そろそろ帰ろうか」と、子供達に言う。

「え〜もつと遊びたい!」

「そうだよ!」

「まだ暗くなってない!」

子供達はまだまだ元気いっぱいだった。

「ははは、確かに皆まだ元気だし、日没まで時間があるけど、今日は早めに帰って夕食の準備を皆でしよう。今日のデザートは僕とテファの作ったケーキだからね」

「ほんと!」

「やった〜!」

「すぐ帰る!」

子供達は大急ぎで、家の方へ走っていった。

「おいおい、転ぶなよ」

アレルは苦笑して子供達の後を追った。

小屋に着くと、様子がおかしかった。

床には割れた皿が散乱していた。

テファアやマチルダが片付けた様子がない。

アレルは心配そうに見てくる子供達に微笑み、杖をふるって割れた皿を直した。

そして、テファアの寝室に向かった。

アレルはテファアの寝室の扉をノックした。

「テファア、入っていいかい？」

「ア、アレル」

中からテファアの驚く声が聞こえた。

「アレルかい、入ってきな」

中からマチルダの声が聞こえてきた。

「失礼」

アレルは扉を開けて部屋に入った。

部屋にはベッドで寝ているテファと横の椅子に座っているマチルダがいた。

「テファ！どうしたんだ！」

アレルがテファの傍に駆けよる。

「だ、だいじょうぶ、すこしふらつとしただけだから」

「ふらつて・・・今すぐ治癒を」

「ア、アレル」

テファは今までアレルがこれほど動揺する姿を見たことがないので驚いた。

「落ち着け！」

マチルダはアレルの頭をたたいた。

「はっ！？僕としたことが」

マチルダにたたかれたことで正気に戻ったアレル。

マチルダはアレルが子供達と出かけている間に起こったことを話した。

「そうか・・・今は平気なんだよね」

アレルはほっとした顔でテファに聞く。

「うん・・・」

「よかった」

アレルは微笑みながらテファの頭を撫でる。

「そ、そのね、アレル・・・」

テファは毛布を口のアたりまで持ち上げながら言う。

「どうしたんだい、テファ」

アレルは優しく言う。

「姉さんとお話して・・・もしかしたら・・・」

・・・赤ちゃん・・・できたみたいなの・・・」

テファは顔を真っ赤しながら言う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

アレルは笑顔のまま固まった。

その様子を子供達はこっそり扉の向こうから見ていた。

## 長期休暇2（後書き）

まあ、原作ブレイクしました。

テファって何歳だっけ・・・犯罪だよな。

感想をお待ちしています。なんか、批判がいつぱいきそっ・・・

長期休暇3（前書き）

すみません。

遅くなりました。

内容、ぐたぐたですがどうぞ。



### 長期休暇3

一隻の大型空船が帝政ゲルマニア領内を航行している。

船の帆にはランカスター家の家紋の盾の前に剣と杖が交差したものが描かれていた。

船はランカスター領ではなく、ゲルマニアの首都に向かっている。

豪華な内装の船内でウエストウッド村の子供達は元気に走り回り、その様子を椅子に座りながら見ているアレル、テファ、マチルダがいた。

数日前。

360

テファの懐妊を知ったアレルは最初、驚き固まってしまったが、その後、彼女を抱きしめ喜びの声を上げた。

そして、アレルは急いで本国にこのことを知らせる文を送った。

アレルは一日のほとんどをテファと過ごした。

テファが家事をしようとすると一緒に手伝い。

子供達の汚れた服を洗って干そうとすると、代わりに干した。

食事の準備もテファの横にいて手伝った。

その様子をマチルダは羨ましそうに見ていた。

その夜。

「……マチルダ？」

アレルは手足を拘束されベットに転がっていた。

月明かりが窓から差し込む部屋に、アレルの上に乗るマチルダがいた。

「テファには先を越されちゃったっけどね……私も……」

マチルダは妖美に笑いながらアレルに覆いかぶさった……

翌日。

「……姉さん？」

肌がてかてかしているマチルダがアレルを引き連れ居間に来た。

何故か、アレルの肌もてかてかしていた。

アレル達はしばらくウエストウッド村に滞在していた。

ほぼ毎晩、アレルはマチルダに襲われた。

逆に襲ったりした。

数日後。

本国から返事の文が届いた。

『嫁達とその関係者を全員つれて、戻って来いと、書かれていた。』

アレルはテファとマチルダ、孤児院の子供達を引き連れ本国に戻ろうと考えた。

ウエストウッド村にはテファ以上に年齢の高い者が常にいるわけではないし、最近アルビオンでは貴族達の不審な動きがある。

遠くない未来、アルビオンで戦争が起こる。

そんな場所にテファ達を置いておくわけにいかない。

それに、設備の整った場所にいる方が万が一の場合に対処できる。

アレルはテファと話し合った。

そして、ウエストウッド村を出てゲルマニアに行くことにした。

子供たちは初めて村以外の外の世界に行けるといいうことを聞き、はしゃいだ。

「……ありがとう」

テファは今まで住んでいた村を見て、そうつぶやいた。

自分と姉がアルビオン王政府から逃げ、この森に逃げてきてからずっと過ごした村。

たくさん思い出の詰まった村。

テファはその村に別れを告げた。

途中、ツエルプストー領に立ち寄りキュルケの実家に寄った。

テファ達はそれほど気にしていないが、順番から行くとテファは第一夫人、マチルダは第二夫人、そしてキュルケは第三夫人の立場になる。

そのことについて、アレルは少し揉めるのではないかと考えていたが、ツエルプストー伯や夫人は『娘が幸せになるのなら問題ない』『娘が増えたみたいなものよ』と言って、アレル達の婚約を認めた。

その日はツエルプストー家に泊まった。

テファとキュルケは仲良くおしゃべりをしていた。

キュルケはテファのお腹にアレルの子がいると聞いた時、目が一瞬光った。

その晩、マチルダの時と同様にアレルはキュルケに襲われた・・・

ツエルプストー家にしばらく滞在した後、キュルケとツエルプストー伯、夫人、キュルケの姉妹や兄弟を伴って、首都に向かった。

アレル達の乗る空船はゲルマニアの首都ウィンドボナに近くの港に入港し、そこからは馬車で城に向かう。

ウエストウッド村の子供達は空船のなかでも元気であったが、馬車に乗ってからも元気だった。

窓から見える外の風景に興奮して騒いでいる。

ウィンドボナに着くとテファ達は馬車を降りた。

町の見学をしたいという子供達の希望からそうなった。

ウィンドボナはランカスター領の次に発展している所であると言われている。

道幅はとても広く、一気に何台も馬車が通れる。

道は城まで一直線に続き、その脇には様々な店がある。

売り子の威勢のいい声が聞こえてくる。

道を進んでいくと途中に広場と噴水がある。

ベンチがいくつか置いてあり、買い物をした後一休みをする者達がここに集まる。

噴水の周りには、母親の買い物についてきた子供同士で遊んでいた。

その様子を母親達がおしゃべりをしながら見ている。

昼になる少し前の時間帯なので、人通りは多い。

キュルケの両親は皇帝に挨拶をしてくると言っており、先に城に向かった。

アレルは少し用事があると言って、テファ達とは別行動をとった。

テファ、マチルダ、キュルケは子供の世話をしながらいろいろな店を見て回った。

人通りが多い時間帯だが、テファ達の周りには人があまりいない。

テファは美少女、マチルダとキュルケは美女。

そして皆、子供？を連れている。

そんな、彼女らに声をかけるには相当な勇気がいる。

しかも、1人は貴族の証のマントを羽織っている。

男達は3人を遠くから見ているが、声をかけられないでいる。

しかし、

「失礼、美しいお嬢さん。お名前を伺ってもよろしいですか？」

マチルダが少し目を離れたすきに1人の貴族がテファに声をかけた。

服装からしてゲルマニア貴族ではない。

その貴族の周りには、護衛の家臣が数名とトリステインの勅使を示す紋章が描かれた馬車が止まっていたことから、トリステイン貴族であろう。

その貴族は言葉は丁寧だが、テファの身体を舐めるような目で見ていた。

その貴族を怖がって子供達がテファの後ろに隠れた。

テファは子供達を守るように前に出たが不安そうな表情が見てとれる。

「テ、テファニアです」

テファは男の質問に答えた。

「ほう、素敵なお名前ですな」

男は笑いながら言う。

「あ、あの・・・」

テファはおどおどしていた。

「ああ、失礼。まだ私が名乗っていませんでしたね。私はジュール・ド・モットと申します。トリステイン王国の伯爵です」

「?どうして、トリステインの貴族様がここに？」

「ああ、私は今回、トリステイン王宮の勅使としてゲルマニア皇帝に謁見をした帰りです」

「はあ？」

「その途中、あなたのような美しいお嬢さんを見かけました。是非お話をしたいと」

それから、戸惑うテファを口説くモット伯。

「それですね、是非あなたに、我が屋敷に来ていただきたいのですが」

テファの手をとりながらモット伯は言う。



周囲の人が息をのんだ。

平民の女性が貴族の屋敷に招待されるといっことは、ほとんど妾になれと言っことと同じことなのだ。

「そ、その、わたしには、婚約者がいて……」

ウエストウッド村から初めて外の世界に出たばかりのテファにとって、上手くモット伯をあしらえない。

「ほうっ……」

先ほどまでとはうって変わって、モット伯の目が怪しく光る。

「貴族の私の招待をあなたは断ると……言うのですか？」

モット伯の護衛がテファの周囲を囲む。

そして、テファの手を掴む手に力がこもる。

「い、いたい」

テファはモット伯の手から逃れようとするが逃れられない。

周囲に緊張が走る。

「テファー!!」

マチルダが異常に気付き、走ってきた。

「姉さん」

テファはほっとした様子だ。

「（ちつ、まずいね）これはモット様ではありませんか。私の妹に何か御用でしょうか？」

マチルダはトリステイン魔法学院で学院長秘書をしているので、トリステインの貴族がどのような者がいるか知っている。

その中で、モット伯は最悪な人物だ。

モット伯は王宮の勅使としてトリステイン魔法学院を訪れては、平民の若く美しい娘に目を着けると自分の屋敷に買い入れ、夜の相手込みのメイドとして雇っている。

モット伯はテファの手をゆっくり離して、マチルダを見る。

マチルダはテファとモット伯の間に入った。

「おや、ミス・ロングビルではありませんか。ほう、あなたの妹さんでしたか。なに、彼女を我が家に招待しようと思いませんか。そうだ、あなたも一緒にどうですか？」

モット伯はマチルダに言う。

「……申し訳ありません。私達はこれからいかなければならぬ用事がございますので。失礼します」

マチルダはテファアの手を掴むとモット伯から離れようとした。

しかし、

行く手をモット伯の護衛が塞いだ。

「……どうゆづことでしょう」

マチルダはモット伯の方を振り返り尋ねた。

「いえ、是非ともお二人には我が家に来ていただきたいのね……」

「

そう言って、ねっとりとした視線を2人に向ける。

「丁重にお連れしろ」

モット伯は護衛に指示を出す。

「……は」「……」

護衛達は2人の手を掴んだ。

「なにするんだい！はなしな！」

「や、やめて」

2人は暴れるが男の力に女が勝てるはずもなく、ずるずると馬車の方に連れて行かれる。

2人の異変に気付いたキュルケが急いでこちらに来るが間に合わない。

「僕の婚約者達に何をしているんですか？」

突如、突風が巻きあがった。

突風はテファとマチルダを拘束していたモット伯の護衛だけを吹き飛ばした。

「わっぷ」

ついでにモット伯も吹き飛ばされた。

「大丈夫かい？」

そこには2人の愛する男がいた。

彼は巨大なマンティコアに乗っていた。

そして後ろにはピンクの髪の女性に乗っていた。

モット伯 *side*

「まったく！これだから野蛮人は！！！」

モット伯は馬車の中で悪態をつく。

王宮の勅使としてゲルマニアに来たモット伯は自分の思い通りにいかないことにイライラしていた。

トリステイン王国は始祖の国の1つとはいえ、アルビオン、ガリア、ロマリアと比べて最も国力がない国である。

そのため、他国との同盟が必要だった。

初めアルビオンと同盟を組もうと考えたが、アルビオン国内の政情が不安定なため貴族達の反対にあった。

次にガリアと同盟を結ぼうと考えたが、これもまたトリステインの貴族達の反対を受けた。

自分達より国土も歴史も古いガリアとの同盟によって、自分達の伝統と格式が負けてしまうことを貴族達は恐れたのだ。

そして宗教国家のロマリア。各国から貧民が押し寄せてくるので、同盟の対価に多額の金銭を要求された。

そんなお金のないトリステインは最後に残ったゲルマニアと同盟を結ぶことにした。

ハルケギニアで今一番景気が良い国と言えばゲルマニアだ。

上手く交渉すれば、自国の利益になること可能性がある。

しかし、同盟には対価がある。

その対価を何にするか、議会で論議を呼んだ。

国土、財貨、人、魔法、技術 e t c . . .

全てにおいて、トリステインの上に行くゲルマニア。

トリステインにあつて、ゲルマニアにないもの . . . .

貴族達は頭をひねった。

モット伯はその時閃いた。

そしてそれを議会に出席した貴族達に言った。

トリステインにあつて、ゲルマニアにないもの . . . .

それは . . . .

始祖の血

同盟の対価に始祖の血をゲルマニアに渡す。

議会は荒れに荒れたが、それ以外の対価が見つからなかった。

そして、モット伯を勅使としてゲルマニアに送った。

モット伯は、皇帝に謁見し同盟を申し込んだ。

その代価は始祖の血を引くアンリエッタ姫。

そのアンリエッタをゲルマニアの第一皇位継承者のアレル・ド・ゲルマニアの妃に。

モット伯の話聞いたゲルマニア皇帝は始終無言だった。

そして、

『それだけか？』

『へっ？』

『それだけの対価で、我国がトリステインと同盟を結ぶと考えているのか？』

『し、始祖の血はいらないというのですか！？』

『今の我国に始祖の血は必要ない。お引き取り願おう』

そう言つて、皇帝は謁見室を出て行った。

謁見室ではモット伯が呆然と立っていた。

そして、モット伯はトリステインに戻る為に馬車に乗った。

モット伯はいらいらしながら馬車の中から外の風景を見てみると、平民にはなかなか綺麗な娘を見つけたので馬車を止めた。

「失礼、美しいお嬢さん。お名前を伺ってもよろしいですか？」

モット伯 side end



長期休暇3（後書き）

突っ込みどころ多い気がします・・・

感想、意見お待ちしています。

誤字があったら教えてください。

#### 長期休暇4（前書き）

遅くなりました。

大学の課題が山のように出たので書く暇がありませんでした。

結構期間が空いてしまったので、もともと少ない文才がさらに少なくなっただかも……

来月試験があるので更新ができません。

次に更新ができるとしたら来年の1月28日以降だと思います。

#### 長期休暇4

テファ達と別れアレルはウィンドボナの町のメインストリートを歩いていた。

町は活気が溢れ、たくさんの人で混んでいた。

買い物をする者。

恋人と歩く者。

品物売る者。

目当ての品を値切る者。

食事をする者。

客を呼びこむ者。

そんな人達でウィンドボナのメインストリートは賑わっていた。

アレルはそんな人達を眺めながら自分の目的地へ向けて歩く。

アレルが女性の横を通り過ぎると、その女性は振り返って彼を見る。

前から彼を見た女性は立ち止り彼を凝視する。

彼氏持ちの女性でさえ、彼を見る。

そして、彼の後を尾行する女性が複数いた。

(やれやれ)

アレルは大通りから脇の路地に入った。

彼の後をつけていた女性たちは急いで路地に入るが、アレルの姿はそこにはなかった。

女性たちは周囲を探すが彼の姿は煙のように消えた。

女性たちは残念そうな顔をして帰っていった。

その様子をアレルは建物の上から見て、ほっと息をはく。

そして、どこから出したのか空色のマントと仮面を身につけ、建物の屋根から屋根へと飛び移る。

次々と屋根から屋根へと飛び移るアレル。

アレルは屋根の上から飛び上がり、滞空してウィンドボナをみた。

皇帝の住む皇宮と平民達が住む城下。

城下町から宮殿へと続くメインストリート。

区画整理がされ、無秩序に建てられた建物は一掃されたことによつて、歪に曲がりくねった道は広くなり、まっすぐな道になった。

馬車が2台以上走ることができるよう広々とした道が町の至る所にある。以前は接触事故が絶えなかった道はなくなり、人々は安心して道を歩くことができる。

さらに道の途中には広場が作られているので、旅の商人がここで露店を開く。

商人たちは一定の税を商人ギルドに納めることでこの場所で自由に商売をしていいので連日、多くの商人がこの国にやってくる。

各国の珍しい商品がここに集まるので、多くの人がここに集まる。

その広場を抜けたさらに先にゲルマニア皇帝の住む宮殿がある。

そして宮殿や町を守るように東西南北に建てられた4つの塔が見える。

その塔を越えると宮殿が見えてくるのだが、アレルの目的地は宮殿でも塔でもない。

アレルは地上に降りた。

いきなり上から人が降ってきたことに人々は驚くが、アレルが身につけているマントと仮面を見るとその驚きがさらに大きくなった。

『天帝様！？』

『うそ！本物？』

『きゃー！』

人々がアレルの周りに集まる。

集まった人々は彼に握手を求めた。

アレルは微笑みながら何人かと握手をした。

あっという間に彼の周りには人だかりができた。

握手を求める者。

自分の店の商品を彼に渡す者。

彼に自分の子を抱き上げてくれよう願う者。

彼はその者達の願いを一つひとつに答えるが、人が多すぎて終わらない。

「すみませんがこれから用事があるので……」

そう言って、申し訳なさそうに彼らに言う。

人々はようやく彼を解放してくれた。

そして、彼は目の前の建物に入った。

S i d e 受付嬢

前任の受付係の一人が騎士団の男とくつついて辞めてしまって、新しく私がここに配属されて3週間ぐらい経った。

毎日、騎士団には多くの依頼が来る。

幻獣や亜人の討伐依頼。

大物貴族の護衛依頼。

式典の警備。

貴族の子弟に魔法の指導。

E t c ……

とにかく、その依頼量は恐ろしい。

それらの依頼を分類したり、本部内の業務をするのが私の仕事だ。

私に与えられた依頼内容の書類の山を見た時は頭が真っ白になった。

しかし、隣りの先輩の席を見たら、私の3倍近くの書類が積まれていた。

先輩達は黙々と書類を分類して騎士団のメンバー達に振り分けていく。

私も一生懸命書類を分類していくが、私が半分も終わらないうちに先輩は自分に振り分けられた分の仕事を終わらせてしまった。

しかも私の仕事を手伝ってくれた……

『最初はこんなものよ』

先輩はそう言ってくれたが、正直へこむ。

書類仕事が終わったら、騎士団内の清掃や受付をする。

先輩が休憩に入ったので、受付は今私一人の状態だ。

忙しい時間帯は過ぎたので、今は暇な時間帯だ。

受付でぼーとしながら立っていると扉が開いて……  
・素顔を仮面で隠し、空色のマントを身にまとった不審者が入ってきた。

受付嬢 side end



騎士団本部に入ると受付係以外に人はいなかった。

この時間帯であれば、騎士団のメンバーは訓練。

事務方の女性たちは交代で休憩。

依頼関係も午前中に振り分けたので、緊急の依頼や来客以外に人はここにはあまり来ない。

受付係の女性はこちらを凝視し、何か言いたげだったが、アレルは早く用事を済ませたかったので無視し、隊長クラスの者の部屋がある方へ向かおうとするが、

「ま、待ちなさい！」

受付嬢がアレルの行く手を塞いだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しばし、2人は睨みあった。

アレルが彼女を避けて右に進もうとすると、彼女も右へ。

左に避けて進もうとすると、彼女も左へ。

右へ行くと見せかけ、左へ。

左へ行くと見せかけ、右へ。

「……………」

無言で睨みあう。

「……………なにかようかな？」

アレルが彼女に尋ねる。

女性はアレルに向かって指を突きつけ大きな声ではっきりと言う。

「不審者！」

受付嬢は箒を構えながらアレルに言う。

「……………私は不審者ではない」

「嘘だ！」

受付嬢はなお譲らない。

しばし、2人は睨みあった。

「あら、どうかしたの？」

「あつ、先輩！不審」

「あら、天帝様お戻りになられていたのですか？」

先輩が言った言葉に彼女はそれ以上言葉を続けることができなくなり、ぎぎぎという音を出しながら後ろを振り返った。

(て・ん・て・い……………天帝……………)

みるみる彼女の顔は青くなった。

自分が今まで不審者扱いしていた相手が騎士団最高責任者にしてハルケギニア1のメイジである『天帝』だということに……………

彼女はおそろおそろ自分が不審者扱いした人を見た。

(仮面で素顔を隠し、空色のマントを身につけている……………)

まさに目の前にいる人物はそんな恰好をしている……………

「あ……………あの……………」

「申し訳ありません。この娘は最近入ったばかりの新人なんです」  
先輩の受付嬢が助け船をだす。

「ああ・・・気にしていないから仕事に戻っていいよ」

アレルはそう言って騎士団長の部屋に向かった。

「・・・・・・・・・・」

彼女は呆然と立ち尽くす。

「・・・・・・・・どんまい」

そんな、後輩を先輩の受付嬢が励ます。

アレルは騎士団長の部屋に入る。

「あら、お帰りなさい」

部屋に入ると、見覚えのある女性が部屋で書類を見ていた。

「……………」

アレルは扉を閉める。

そして、辺りを見渡す。

「……………この部屋だよな？」

間違いなく彼の目の前の部屋が騎士団長専用の部屋だ。

もう一度、扉を開く。

「あら、どうして閉めたの？」

「……………」

再び閉める。

「……………疲れているのか？」

そう言って立ち去ろうとするが、扉が開き部屋の中に引きずり込まれた。

女性はアレルに抱きついて彼の胸に顔をこすりつけている。

「ふんふん？」

「……………どうして君がいるんだ？……………力  
トレア」

アレルはカトレアに抱きつかれた格好のまま尋ねる。

「あら、知らなかったの？」

「？……………何を？」

アレルには全く覚えがなかった。

「わたし、ここの騎士団長代理なの」

カトレアはにっこり笑いながらアレルに言う。

「……………はあ！？」

「……………どうしてカトレアが騎士団長代理なの？」

『天空』騎士団の長は本来、アレルがやっていたが学院に入学する関係でしばらく休むことになっていた。

勿論、騎士団長がない間の依頼などは副騎士団長がやることになる。

アレルは仕事関係の引き継ぎをして学院に向かったので『天空』騎士団に今、騎士団長はいないはず。

騎士団長になるにはかなりの実力がいる。

それに、その証であるある物が必要だ。

「あら、ちゃんと試験は受けたわよ」

そうやってカトレアはアレルの目の前に手帳をつきつけた。

ハルケギニアには『天空』騎士団以外にギルドというものが存在する。

騎士団もギルドにも通常、そこに所属する者には身分を証明するためにギルドカードが配られる。

これには、持ち主の名前・戦闘タイプ・ランク・依頼達成数などが書かれている。

一定の依頼を達成するとランクが上がる仕組みになっていて、D・C・B・A・A・A・A・A・S・SS・SSS・Zまでランクはある。

Zランクになるほどの実績がある者にはアレルが魔法で作り上げた特製の手帳が配られる。滅多にZランクを越える者がいないので今

現在、手帳を持っているのはアレルと彼の父と母、それとギルド長ぐらいが持っている。

アレルの父親は混乱期のゲルマニアを治めた実力者であり、母親はエルフの中でも上位の精霊魔法の使い手である。他のギルドの長達も魔法や武術の使い手が多い。

今カトレアがアレルの目の前につきつけている手帳は間違いなく彼が以前作っておいた手帳の1つだ。

「……間違いなくそれは僕が作っておいた手帳だ」

そういつてアレルはカトレアの手帳を開いて中に書かれている内容を確認する。

名：カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フ  
オンテイナー

戦闘タイプ：メイジ（風：スクウェア・土：スクウェア）& 幻獣使い  
ランク：Z

依頼達成数：亜人討伐×30・竜種討伐×15・幻獣討伐×50  
etc……

「……………」

アレルは手帳に書かれたカトレアの依頼達成数に驚いた。

「ぶぶぶすじいじよ」



カトレアはアレルに病気を治してもらった後、ランカスター領を見に行き、しばらくの間、そこに滞在していたそうだ。

その時、動物好きのカトレアはランカスター領にある幻獣飼育エリアで幻獣達の世話をしている、その飼育エリアの幻獣達のほとんどを彼女は調教？した。

カトレアの出す独特な雰囲気に近いの幻獣達が寄ってきただけかもしれないが、彼女の命令に幻獣達は皆言うことを聞いた。

カトレアはランカスター領にいる幻獣のほとんどを支配下に置いた。

そして、支配下に置いた幻獣に乗ったカトレアがランカスター領の草原を走り回る姿が何度も目撃されたそうだ。

そんなカトレアの噂を聞いた騎士団のスカウトが彼女に接触し、『  
天空』騎士団に勧誘した。

ゲルマニアには未だ人の手が入らない土地が数多くあり、そこに住む幻獣や亜人が時折、人里に下りてくるので問題になっていた。

スカウトはカトレアにそれらの土地にいる幻獣や亜人達をなんとか説得してもらおうと考えた。

カトレアはスカウトの話聞いて、承諾した。

彼女は母親の『烈風のカリン』が昔来ていたような服を着て、マンティコアに騎乗しゲルマニアのそつ言った土地に行った。

任務が終わると様々な種類の幻獣達や亜人達を引き連れ戻ってくる。

そんなカトレアを見た民衆達は彼女を『幻獣使い』の二つ名をつけた。

そして、カトレアは短期間でゲルマニア中のそう言った土地を周った。

ランカスター領にはその土地からカトレアについてきた幻獣や亜人が住むようになったので、土地が足りなくなった。

そこで、比較的人に慣れていている幻獣の一部を王宮やギルドなどに引き取ってもらったり、まだ開拓をしていない土地を切り開くための労働力などに充てた。

しかし、それだけでZランクになるなんてことはあり得ない。

確かにカトレアの話聞き、彼女のことを慕ってくれる幻獣や亜人は多いが、やはり分かりあえないものもいた。

そういった幻獣や亜人をカトレアは討伐した。

気付けばZランクに相応しい実力を彼女は身につけていた。

Zランクの試験を受けるには、他のZランクと対戦をして勝つか、それ相応の実力を見せつけければ良い。

カトレアが選んだ相手は……………

アレルの父親のアルブレヒト3世だった……………

この時、カトレアは数匹の幻獣と共闘しアルブレヒトに挑んだ。

アルブレヒトは魔法をメインに使い、幻獣を殺さないようにしながら

ら闘った。

カトレアの勝利条件はアルブレヒトに剣を抜かせることだった。

カトレアは幻獣がアルブレヒトを攻撃している間に詠唱をし、強大な『カッター・トルネード』を彼に放った。

カトレアの母親と同レベル、いや、それ以上の『カッター・トルネード』は演習場を破壊しながらアルブレヒトに襲いかかった。

アルブレヒトは後退しようとするが、足が急に動かなくなった。

下を見てみると、ゴーレムの手が自分の足を拘束していた。

目の前まで竜巻が来ている状態で足は固定されて動けない。

終にアルブレヒトは剣を抜き、自身の魔力を剣に籠め竜巻に向かって魔力刃を放った。

演習場はカトレアの放った竜巻と、アルブレヒトが放った魔力刃が衝突し演習場は壊滅した。

それによってカトレアはZランクに昇格した。

さらに、アルブレヒトがカトレアを『天空』騎士団の団長代理に任命した。

(やはり、親子だな……)

アレルはカトレアがああ『烈風のカリン』の娘であると再認識した。

「まあ、元気で何よりだ」

以前の病弱だった頃のカトレアを知っている人が彼女を見たら、『本当に病気だったのか？』と言ってしまいそうなほど、彼女は活き活きとしている。

アレルは彼女を見てそう思った。

しばらくカトレアに自分の学院での生活や他の婚約者についても話した。

そして、今、父親に呼び出されていることを彼女に話した。

アレルがここに来た目的は、カトレアを迎えに来ることだった。

まさか彼女が騎士団長代理をしているとは思ってもしなかったが・・・

その後、アレルはカトレアを連れて部屋を出た。

カトレアを連れてギルドの演習場にでた。

そこには、通常の3倍の大きさのマンティコアが演習場の隅で寝ていた。

そのマンティコアはカトレアが来たのが匂いで分かったのか、鼻を

ひくひく動かしながら起きた。

まだ寝ぼけているようで大きなあくびをした。

限界まであけた口は人一人がすっぽり入ってしまいそうなほど大きい。

そして、身体を震わせ起き上がりカトレアの元にゆっくり近づいてきた。

カトレアはそんなマンティコアの首回りを撫でた。

マンティコアも気持ちよさそうに喉を鳴らした。

「ちょっと、行くところがあるから乗せてくれる？」

「がっ」

マンティコアは地面に伏せ乗り易いようにしてくれた。

カトレアに手をひかれマンティコアの背に乗る。

マンティコアは自分の主と認めたカトレア以外の者が乗ることに少々不満そうであったが

カトレアが「この人は私の旦那様になるから」と言うと、大人しくなった。

そして、翼を広げ走りだし、空へと舞い上がった。

アレルはテファ達と合流する予定の場所に向かった。

飛んでいる途中にアレルは変装のためにつけていた仮面とマントをしまった。

しばらくカトレアと一緒に快適な空の旅をしていたアレルだが、合流予定の広場でテファとマチルダが数人の男に無理矢理馬車に乗せられそうになっているのを見つけた。

アレルはすぐさま杖を出し詠唱した。

『エア・ストーム』

アレルの杖から強力な風が螺旋状に広場の方に放たれた。

この魔法は広域殲滅型の魔法であるため細かな制御が本来できないはずなのでだが、アレルにとっては対象だけを攻撃することは造作ない。

にやにや笑っていたデブ貴族とテファとマチルダを拘束していた護衛らしき者達は吹き飛ばされた。

アレルとカトレアの乗るマンティコアはゆっくりと広場に降り立った。

アレルはマンティコアの背からゆっくりと降りてテファとマチルダの元に向かった。

「大丈夫かい？」

アレルは2人に微笑みながら尋ねる。

「いったい何があったんだい？」

アレルは2人に聞く。

マチルダは恐怖に震えるテファの肩を抱きながら事の経緯をアレルに説明する。

マチルダの話が終わり、アレルの目には怒りの炎が灯った。

騒ぎを聞きつけ、キュルケがやってきた。

そして、広場にはアレル、テファ、マチルダ、キュルケ、カトレア、モット伯とその護衛、騒ぎを聞きつけ集まった民衆。

突然アレルの背に向けて水の鞭が飛んできた。

アレルは『アクア・シールド』を無詠唱で発動させその鞭を防いだ。

攻撃した者がいる方向にアレルが顔を向けると

「貴様！この私にこんなことをしてただですむと思っちなよ！！」

護衛に手伝ってもらいながらモット伯は起き上がり、顔を真っ赤にしながらアレル達に言う。

「……………皆は下がっていて」

テファ達を下がらせアレルはモット伯の方に向く。

「（ふん、学院のガキか）わしをトリステイン王宮勅使と知っての狼藉か！」

モット伯は今までトリステイン王宮勅使と言う肩書を使い好き勝手にしてきた。

大抵の者は、王宮勅使と言う肩書を聞き、彼に許しをこころ。

今回もそうなるとモット伯は思っていた。

「私はお前の後ろにいる2人をわが屋敷に招待しようとしただけなのだがね」

モット伯は自分が有利な立場であると言うかのような態度だ。

「……………」

「今なら、そこにいる4人を私に寄こせば不問としても良いのだが



ね

モット伯はいやらしい目でテファ、マチルダ、キュルケ、カトレアを見て言った。

モット伯は目の前にいる極上の美女・美少女を何としても自分のものにしたかった。

アレルは無言でモット伯を睨む。

モット伯はアレルが黙っていたので、自分の言い分を認めたものと考え、護衛の兵士に指示をだした。

「あの女達を連れて来い」

モット伯の護衛達はテファ達の方へ行こうとする。

しかし、彼らはテファ達に触れる前にアレルが放った『エア・ハンマー』によって吹き飛ばされた。

「貴様！」

モット伯は杖を振るい、アレルに攻撃しようとする。

しかし、彼の杖が魔法を発動する前に、アレルが放った『エア・カッター』がモット伯の杖真っ二つにした。

モット伯の手から棒きれになった杖が落ちる。

護衛は気絶。

杖は使いものにならなくなった。

逃げようにも馬車に乗る前に確実にやられる。

モット伯は何とかこの状況から逃れる方法を考える。

「何の騒ぎだ！」

騒ぎを聞きつけ、衛兵が群衆をかき分け広場に表れる。

モット伯はにやりと笑い衛兵に

「そいつはトリステイン王宮勅使であるこの私に魔法を放った不届きものだ！すぐにそいつを捕えろ！！」

モット伯は衛兵に向けて大声で叫ぶ。

他国とはいえ、トリステイン王宮勅使の自分に魔法を放ったのだから、目の前で自分に杖を向けている男が捕まるのは当然だとモット伯は思っていた。

しかし……………

「で、殿下!」

衛兵は自分より若い少年に対して膝を地面につけ頭を下げる。

「ああ、巡回ご苦労」

アレルはそんな衛兵に労いの言葉をかける。

民衆もようやくモット伯に杖をつきつけている人物がゲルマニアの皇太子殿下であることに気付いた。

民衆も膝を折り、頭を下げる。

モット伯は目の前で起きている出来事を理解できなかった。

自分が権威をかざして脅した相手がゲルマニアの皇太子であることに。

大国ゲルマニアの皇太子に対して自分は不敬を働いたのだ。

知らなかったとはいえ、責任は免れない。

テファニアという少女が自分には婚約者がいると言っていたが、もしかしたらその婚約者とはあの皇太子では?

自分は皇太子の婚約者に手を出そうとしていたのか?

もはや、モット伯には逃げ道はない。

衛兵は自分達の国の皇太子に暴言を吐いたモット伯を拘束した。

何かモット伯は意味不明なことを叫んでいたが、衛兵によってどこかに連れて行かれた。

モット伯やその護衛は形式的な手続きなどをした後すぐに解放された。

ゲルマニアにとってこのような男を勅使という重要な役職に任命しているトリステイン王国などに時間を割くほうが馬鹿らしかった。

今回は解放するが、次何かしたら分かっているな？

モット伯を尋問したゲルマニア軍人は彼にそう言った。

モット伯は逃げるように本国に帰ったそうだ。

広場でひと騒動があった後、アレルはテファ達を連れて宮殿に向かった。

アレル達が乗る馬車には皇室の紋章がつけられている。

その周りを兵士が囲み護衛をする。

王宮へと続くメインストリートを皇室のついた馬車が進む。

周囲の人々は道を開け深々とお辞儀をする。

馬車はそんな人々の間を抜け皇宮に向かう。

アレル達を乗せた馬車は門を潜り、皇宮内を進む。

門から皇宮に着くまでかなりの距離があり、そこへ行く途中には剪定された木々、色とりどりの花々が咲き、風に吹かれている。皇宮内を流れる川には水鳥が集まり、その羽を休める。

広大な皇宮内を馬車で移動するアレル達。

ようやく正面に建物らしきものが見えてきた。

馬車は皇宮前の広場で止まった。

馬車の扉が開き、最初にアレルが降りる。

アレルが降りると皇宮内で働く貴族や衛兵、宮内で働く平民達が整列し彼を迎えた。

『皇太子殿下万歳！』

『ゲルマニア万歳！』

彼らはゲルマニアを称え、皇太子であるアレルを称える。

アレルは手を上げ彼らに答える。

そして、アレルは馬車内にいる自分の婚約者の手を一人ずつとり、馬車から降りるのを手助けする。

人々はざわめく。

皇太子であるアレルは本来そのようなことをしない。

それに皇太子の乗っていた馬車から降りてきたテファ達を見て皆思わずため息をつく。

馬車から降りてきた4人は美少女、美女であったからだ。

そしてアレル達は皇宮へと進む。

皇宮の入口へと続く階段を上がる。

階段を登りきったところに、アレルは見覚えのある男性と女性がちらに向かつて微笑んでいた。

男性の方は黒と赤を基調とした衣装に身を包み、頭に王冠をのせ、腰には剣をさげていた。

女性の方はドレスを着て、宝石をふんだんに使った装飾を身につけ、頭にはティアラをのせていた。

アレル達はその2人の前に来た。

「父上、母上、ただいま戻りました」

長期休暇4（後書き）

カトレア無双。

感想をお待ちしています。



## 長期休暇5（前書き）

テストがようやく終わり、やっと投稿ができました！

久しぶりの執筆だったので、うまく書けたかどうか心配ですが、どうぞー！！

## 長期休暇 5

アレル達は皇宮内のとある部屋の前に来た。

なんの変哲もない扉の先から

「うむむむむむ」

……という音が聞こえている。

アルブレヒトとアレルは扉を少し開けて中の様子を見てみると……

部屋の中に入らないはずの竜と虎が睨み……ではなく、

ツエルプストー夫人、ヴァリエール夫人が睨みあい、その横で、2人から発せられるプレッシャーに震える辺境伯と公爵、エレオノルとルイズがいた。

「……………」

2人は無言で扉を閉める。

「あら、どうしたの？」

アレルの母であるセシルが扉を閉めた夫と息子に尋ねる。

「うむ……………」

「ちょっとね……」

「もう、お客様はいらっしゃっているのだから、またせてはだめでしょう」

そう言って、扉を開けてセシルは部屋に入ってしまった。

「……………」

さすが、数少ないZランク保持者の一人である。

セシルが部屋に入ってしまったらしくして、プレッシャーが止んだ。

恐る恐る中を覗くと、セシルとツエルプストー辺境伯夫人とヴァリエール夫人が仲良く談笑していた。

（何があつたんだ？）

「あら、みんな早く入りなさい」

セシルに言われ、アレル達は部屋の中に入った。

「で、ここにいる娘がお前の嫁達か？」

アルブレヒトは、息子に尋ねる。

「ええ」

「あら、こんなに可愛い子達が私の義娘になるのね」

現ゲルマニア皇帝の妻であり、アレルの母であるセシル・ド・ゲルマニアが子供のようにはしゃぎながら言う。

「ふむ、お前が選んだ嫁だ、問題はないだろう」

アルブレヒトは、テファ達をみながら言う。

「ええ、そうでしょう」

アレルも嬉しそうに言う。

「そう言えば、ここに来る前にひと悶着あったという報告があったが何があった？」

「ああ、それは」

アレルは、皇宮に来る前にあったことを話した。

「ああ、トリステイン勅使のモットか。お前がくる少し前にアンリエッタ姫との見合いを申し込んできたぞ」

「なんですって!？」

皇帝の前なので、静かにしていたルイズが叫び声をあげる。

「「「「.....」」」」

アルブレヒトがそう言った瞬間にテファ達の動きが止まり、黒いオ  
ーラらしきものが彼女達から発せられる。

「まあ、勅使の態度が気に入らなかつたから、断つたがな。どうせ  
始祖の血をやるから、その代わりに食糧や技術をよこせと言つても  
りだつたんだらうな」

（（（（ほっ））））

テファ達は心の中で安堵した。

「トリスティンなんて手に入れても荷物にしかないからな」

「そうですね」

トリスティンは今ハルケギニアにある国家の中で最も弱い国である。

貴族達は自分達の欲を満たすために民を虐げるので、領民の中には  
逃げ出す者が続出している。

領民の数が減っているのに気付かず、税収が低いという理由で、さ  
らに残った領民に対して税金を重くする馬鹿貴族達。

それでも、貴族達の欲望は満たされない。

もっと、金を！

もっと、豪華な食事を！

もっと、豪華な衣服を！

もっと、贅沢な暮らしを！

大多数のトリステイン貴族達は狂いだしていた。

貴族達の中には、自分達の生活が良くなならない理由を王族のせいにする者達まで出始めている。

現在、トリステインの王座は空席である。

王が亡くなった後、王座に着く筈だった、マリアンヌがそれを拒否したため、貴族達が政治を好き勝手に動かしている。

今までマザリー二枢機卿がなんとか貴族達の行動を止めていたが、それも限界に近いのかもしれない。

彼らにとって、自国の王族ですら自分達の欲を満たすための道具にすぎないのだ。

それが、今回モット伯のようなものが、ゲルマニアに自国の姫を売り渡すような行動に出たのだろう。

「まあ、そんな愚かなことはもうしないだろう？」

「そうですね、これ以上馬鹿にするなら滅ぼした方がいいかもしれ

「ませんね」

「そうだな」

「はははははは」

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

アルブレヒトとアレルの話を聞いて、冷や汗をたらたら流すヴァリエール公爵。

「それでいつ結婚式を挙げるんだ？」

アルブレヒトは、アレルに問う。

「僕はすぐにでもしてもいい」『だめよ、学院はちゃんと卒業しなきゃ』  
「……んだけど」

アレルは苦笑しながら言う。

本来、皇族や王族は学院には入らない。

学院に入学するのは、全員が貴族。

そんな中に王族や皇族が入れば、貴族達は彼らに取り入ろうとしてくるだろう。

暗殺の危険もある。

常時、護衛を学院内に配置するわけにもいかない。

それに、王族には王族の義務がある。

学院に入っている時間などない。

しかし、セシルは普通の者と同じように学院に入学するようにアレルに言った。

これに、アルブレヒトや騎士団のメンバーも賛成した。

周囲の声を聞き、アレルは学院に行くことを承諾した。

しかし、皇族が学院に表だって入学するのは危険なため、アレル・ラ・フォン・ランカスターとして学院に入学した。

今のところ、アレルが皇族であることはばれていない。

しかし、本来の皇族という身分でテファ達と結婚してしまっただけは学院にいることは難しい。

今、ゲルマニア皇太子という身分で4人と結婚してしまつと、確実にアレルの正体がばれてしまふ。



「そうなるよ、結婚式は卒業してからになるが……さすがに子供を産んだ後に結婚式は難しいな……」

アルブレヒトはテファをみて言う。

「ええ、ですが、アレル・ド・ゲルマニアとしては、まだ式を挙げるのは無理ですが、アレル・ラ・フォン・ランカスターとしては問題ないでしょう?」

「……まあ、お前やその娘達がいいのであれば問題ないが」

数日後

ランカスター領は、領主の結婚式でお祭り騒ぎになっていた。

大通り沿いの建物には、ランカスター家の紋が描かれた大きな布がかけられた。

女達は、広場に集まり祭りに出す御馳走を作る。

男達は、蔵からワインの入った大樽を数人で運び出す。

小さな女の子は、母親の横で料理の手伝いをしたり、お菓子の生地をこねているいろいろな形にして遊んでいる。

小さな男の子は、父親が運ぶ大樽の周りを走り回っていたり、小さな樽を友達と一緒に一生懸命に運んでいる。

時折、料理のつまみ食いをする子供を追いかける母親がいたり、試し飲みと言って、大量のワインを飲む男がいたりするが、大人から子供まで、笑顔が溢れている。

式典用の装備をした衛兵達の護衛のもと、5台の馬車が大聖堂へ続く大通りを通過する。

祝いの準備をしていた者はその手を止め、その馬車に向かって拍手と祝いの言葉を言う。

『領主さま万歳!』

『おめでとございますー！』

馬車の窓から、アレルは彼らに軽く手をふり答える。

馬車は、ランカスター領内にある大聖堂に着いた。

新郎と新婦は別々の部屋に通され、式が始まるまでそこで待機する。

その間に、式の進行についての説明を受ける。

式が始まるまであと少し。

大聖堂内では、各国から集められた参列者が新郎と新婦の入場を待っていた。

今回の結婚式には、王族や有力貴族達が多数招待された。

『アレル・ラ・フォン・ランカスターが結婚する』

一代でランカスター領をハルケギニア1の領にした若き当主であるアレルが結婚するといった情報は一夜にして隣国に伝わった。

しかも、花婿1人に対して花嫁は4人というハルケギニアの常識では考えられないことをした。

ハルケギニアでは基本的に正妻は一人であるが、財力のあるものであれば妾や側室が何人が迎えることは可能である。

現にツエルプストー辺境伯には複数の愛人や側室がいる。ヴァリエール公爵は……  
正妻が怖くてそんなことができなかった。

そんななか、ランカスター当主は4人全員を正妻として迎えることを公言した。

その4人のうち2人が、古くからの因縁のある一族の娘たちである。

その2大貴族の娘が一人の男に嫁ぐことで、長年続く因縁に終止符がうたれることになった。

そのこともあって、この結婚式には多くの関心が集まった。

ゲルマニアからは皇帝夫妻、ツエルプストー辺境伯一家とその傘下の貴族達、ゲルマニアの有力貴族達。

トリステインからは、マリアンヌ皇太后、アンリエッタ姫、ヴァリエール公爵一家と傘下の貴族達、マザリーニ枢機卿。

ガリアからは、ジョゼフ王とイザベラ姫、タバサ。

アルビオンからは、ジェームズ一世、ウェールズ皇太子。

ロマリアからは、教皇ヴィットーリオと助祭枢機卿のジュリオ。

たかがゲルマニアの一貴族の結婚式にしては、招待された人物達はハルケギニアでも大きな権力をもつ者たちばかりである。

彼らにとって、それだけアレル・ラ・フォン・ランカスターの存在が大きいのだろう。

そして、聖歌隊による讚美歌がはじまる。

扉が開き、白を基調とし、細かなところに銀の装飾が施された騎士服と蒼色のマントを身につけたアレル・ラ・フォン・ランカスターが現れた。

彼は、ゆっくりと祭壇へと続く赤い絨毯が敷かれた道を歩く。

大聖堂内は静寂に包まれ、彼の歩く音が大聖堂内で響く。

そして、祭壇の少し前でアレルは止まる。

しばらくすると、再び扉が開いてウェディングドレスを身にまとったテファ達が見えた。

花嫁達はそろって、夫となる者のいるところへゆっくりと歩き出す。

『なんて美しい花嫁たちだ』

『はあ〜綺麗』

『まるで妖精だ』

参列者は花嫁達の美しさに賞賛の声をあげる。

テファ、マチルダ、キュルケ、カトレアの顔は幸福で満ち溢れていた。

花嫁たちは、夫のいるところまで来た。

アレルの右側にテファとマチルダが立ち、その反対にはキュルケとカトレアが立つ。

5人そろって司祭のいる祭壇へゆっくり進む。

そして、司祭のいる祭壇の前に来た。

今回のアレル達の結婚式で司祭役をする者は、現ロマリア教皇のヴィットーリオであった。

本来、その地区の司教が結婚式では司祭役をするのだが、ヴィットーリオは、アレル達の結婚式の司祭役を自ら行うことを宣言した。

たかがゲルマニアの一貴族の結婚式に教皇が出てくることに反対の意見があったが、教皇の強い希望で彼が司祭役になった。

教皇は彼らに優しく微笑みかけた。

彼は聖書を持ち、『これより、式をはじめます』

聖書を開き彼らに詔を授ける。

式はどんどん進み、誓いの儀式に入った。

『アレル・ラ・フォン・ランカスター、汝はここにいる娘達を妻として迎えることを誓いますか？』

「はい、誓います」

『汝は、この娘達を等しく妻とし、愛することを誓いますか？』

「はい、誓います」

『その言葉に始祖ブリミルの名に誓って偽りはないですか？』

「はい」

『テファニア・オブ・ウエストウッド、マチルダ・オブ・ウエストウッド、キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー、カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォンテーヌ』

「はい」「はい」

『汝らは、アレル・ラ・フォン・ランカスターの妻となることを誓

いますか？』

「「「はい、誓います」「」「」

『汝らは、夫を愛することを誓いますか？』

「「「はい、誓います」「」「」

『夫が困難な道を進む時、傍で支えることを誓いますか？』

「「「はい、誓います」「」「」

『その言葉に始祖ブリミルの名に誓って偽りはないですか？』

「「「はい、誓います」「」「」

『指輪の交換を』

アレルは、装飾の施された箱をポケットから出した。

中には、4つの指輪が入っていた。

リングにはそれぞれ異なった装飾が施されていた。

宝石をおさめる台座には、アレルが自身の魔力をこめて作った魔法  
宝石が埋め込まれている。

テファには、水色の魔法宝石の入った指輪を。



マチルダには、紫色の魔法宝石の入った指輪を。

キュルケには、赤色の魔法宝石の入った指輪を。

カトレアには、桃色の魔法宝石の入った指輪を。

アレルは彼女達の薬指に填めた。

そして、アレルに指輪を填める番がきた。

テファ達はアレルがポケットから出した箱に似たものを出した。

そこには、1つの指輪が入っていた。

しかし、その指輪の台座には、テファ達がアレルから貰った指輪のように宝石がおさめられていなかった。

参加者は何故台座に宝石がおさめられていないのか気になったが、すぐにその理由がわかった。

アレルとテファ達は、それぞれ杖を出し、指輪に向ける。

杖の先から、彼女達の魔力が流れ出し、台座に集まる。

アレルも同様に、自身の杖から魔力を指輪に注ぎ込む。

5人の魔力がその指輪に注ぎ込まれていく。

テファの『虚無』

マチルダの『土』

キュルケの『火』

カトレアの『風』

アレルの『水』

五系統の魔力が台座に注ぎ込まれた。

しばらくすると、台座に虹色に輝く魔法宝石が現れる。

4人を代表して、テファがアレルの薬指にその指輪を填めた。

アレルが指輪を填めると、5つの指輪が共鳴するかのように光出す。

テファ達の指輪は宝石と同じ色の光の道のアレルの指輪に向けてのばす。

その光がアレルの指輪の宝石部分に接触すると、彼の指輪は強く光り出す。

彼の指輪は虹色の光の道を彼女達の指輪にだす。

5人の指輪によって、つくられた光の道は祭壇のステンドグラスに反射し、大聖堂内の隅々を照らし、参列者たちは、その指輪の光が作りだす幻想的な空間に酔いしれた。

しばらくして、指輪からの光が止んだ。

『それでは、誓いの口付けを』

テファ、マチルダ、キュルケ、カトレアの順で、アレルは、ウエディングベールを外し口付けをした。

参列者からは溢れんばかりの拍手が彼らにおくられた。

そして、新郎新婦はそろって大聖堂の外へと続く扉へ向かう。

扉をあけると外にはたくさんの人たちが彼らに祝いの言葉と花の祝福を。

階段の下には、女性達が集まり、花嫁の幸せのお裾わけのブーケが投げられるのを待っている。

その中には、エレオノールとルイズ、イザベラ、タバサ、モンモランシー、そして、何故かギーシュがいた……

『アレルー！ブーケを！お恵みをー！』

『ちよつと、ギーシュー！』

『なんであんたがここにいるのよー！』

テファ達は、後ろ向きになり、同時に空に向かってブーケを投げた。  
歓声がわく。

『うおー！』

『ちょっと、おさないですよ！』

ギーシュが飛んでくるブーケに向かって飛び上がる。

『させないわ！フライー！』

ルイズがフライの魔法を唱える。

ズガン！

『ぎゃー』

『ギ、ギーシュ！？』

ルイズの爆発魔法を食らったギーシュは爆風でどこかに飛ばされて  
いってしまった。

ちなみに、ブーケを手に入れたのは

アンリエッタ、イザベラ、タバサ、そして……………

『とっ、とつたぞ……………』

なぜか、ギーシュが手に入れた。

『ちよつと！なんで私にはないのよ！！』

ブーケをとれなかったルイズはブチ切れる。

## 長期休暇5（後書き）

いかがでしょうか？

今まで、忙しくて、せつかく書いていただいた感想を返信することができませんでした。申し訳ありません。これからは、感想に対して、返信するようにしますので、ご意見・ご要望・誤字・脱字等がありましたら、感想に書いてください。

**披露宴（前書き）**

遅くなりました。

少し、違和感があるかもしれません。

## 披露宴

アレル達の結婚式が終わった後、披露宴が開かれた。

披露宴会場は、大聖堂前の広場では立食パーティ形式が開かれた。

あわただしく、給仕達が新しい料理や飲み物を参列者達に配っている。

会場の一角では、楽奏隊の演奏と聖歌隊による合唱が披露されている。

参列者達は彼らの、演奏と美声に酔いしれる。

それもそのはず。

楽器を演奏しているのは砂漠の民であるエルフ。

歌を歌っているのは海の民であるセイレーン。

特殊なマジックアイテムで、それぞれの種族の特徴である部分を人間と同じにして披露宴に参加している。

彼らは、人間と同じ顔をしている。

そして、皆、美形・美女である。

参列者の一部は彼らに声をかけて、口説いたりしている。



披露宴にはランカスター領で採れる珍しい果物や食物をふんだんに使った料理の数々、様々な国の酒類が並び参列者の舌を唸らせる。

そして、本日の主役達は参列者達に挨拶回りをしていた。

「ふっ」

「お疲れさま」

テファがアレルに飲み物を渡す。

「ありがとう」

アレルは一気にそれを飲みほす。

「それにしても、すごい人だね」

マチルダは、周囲を見回しながら言う。

トリステイン、アルビオン、ガリア、ゲルマニアの4国の王族や有力貴族達が参列した。

彼らの一部は、この機会を利用してランカスター家に取り入ろうとしてきた。

「お初に御目にかかります、私 国 の 」

「私 家の長女 」

彼らは内心、この若造にどうやって取り入ろうか考えていた。

貴族の娘達も、アレルの容姿を見て必死に自分をアピールしてきた。

また、アレルの妻となったテファ達の容姿を見て、彼女達に群がる貴族達もいた。

さすがに結婚式を挙げたばかりの彼女達を大っぴらに口説いたりする者は

「失礼、美しいレディ。私、グラモン伯爵家四男、ギーシュ・ド・グラモンです。アレル君とは学院のクラスメイトで 」

新妻を口説くギーシュがいた……

「是非とも、お近づきしたいと なんだい、僕はこの綺麗なご婦人方と 」

ギーシュは肩をたたかれたので、後ろを振り向く。

「へー、友人の嫁を口説くんだー」

金髪ドリルを逆立てた、モンモランシ が現れた。

「モ、モンモランシ、これは……その 」

ギーシュは汗をだらだら流しながらモンモランシに弁解する。

「ギーシュ……」

「ア、アレル！た、たすけ」

「モンモランシ」

アレルは笑顔を浮かべているが、目が笑っていない……

「O H A N A S I I ! ! !」

「ちよ、ま、」

ギーシュは、2人にどこかに連れて行かれた。

「ゆ、ゆるして、ちよ、何それ！？釘つきバットなんてどこから出したんだい！！や、あー！」

会場は、一瞬静かになった。

「はーすつきり！」

2人は、仕事をやり遂げたとばかりに、すがすがしい顔をして戻ってきた。

「……………」

ルイズside

「うー」

ルイズは、親族席で一人唸っていた。

（ちい姉様の病が治ったのはうれしいけど、なんでゲルマニアの貴族なんか嫁がなくちゃいけないのよ！しかも、あいつが義兄？）

ルイズは自分の大好きな姉がどこの馬の骨とも分らない男に嫁ぐことが許せなかったし、長年の宿敵のツエルプストー家のキュルケが義姉になるのが嫌だった。

そんな彼女の耳に他の貴族達の話声が聞こえてきた。

『しかし、公爵殿が羨ましいですな……』

『まったくだ……』

（何言ってるのよこいつら？）

『嫁ぎ遅れの次女一人を差し出して、かのランカスター家と関係をもつことができるんだからな』

『家の娘もランカスター殿を狙っていたのだが……』

「いや、正妻が4人もいるのだから、まだチャンスはある

」

ルイズの顔を怒りで真っ赤になっていた。

杖を抜こうとしたが、ブーケトスの時に爆発魔法をギーシュにぶっ放してしまったので、母親に取り上げられていた。

怒りの発散ができないルイズは、目の前に置かれた様々な料理をわけ食いした。

「は〜い、ルイズ」

「げっ、キュルケ・・・」

アレルの妻の一人のキュルケがルイズの前に来た。

「あら、なに？ご機嫌斜め？」

「当たり前でしょ！なんでちい姉さまがゲルマニアなんか・・・」

「は〜、あんた参列者の顔を見た？」

「それがどうしたのよ？」

「各国の王族や有力貴族、ロマリア教皇  
婚式に各国のトップが参加すると思っ？」

たかが侯爵家の結

「・・・何が言いたいのよ？」

「それだけ、ランカスター家、私達の旦那の持つ力は強大なことよ」

「たかがゲルマニアの侯爵家が!？」

「本当に分かっていないの？貴方だって、ここに来る前の町を見たでしょ？」

「たかが町がなによ」

そう言つて、ルイズはここに来る前にみたランカスター領の町を思い出す。

トリステインの城下町よりはるかに大きい町。

何台もの馬車が一度に通れるほどの広さとごみ1つも落ちていない大通り。

大通りは全て石造り。

各国の様々な商品が並ぶ店。

道を歩く平民達の質素なものであるが清潔な服。

見たこともない食物や果物、料理などがたくさんあった。

どれもがトリステインとは比べものにならないものばかりであった。

それだけのことをできる財力と技術をランカスター家は持っている。

「ふん、ただ大きいだけでしょ？ トリステインは歴史・由緒ある

」

そう言つて、ルイズは反論する。

「ねえルイズ、歴史や血統で民は豊かになるの？」

「はあ？」

「歴史や血統をもっているのは王族や貴族ぐらいでしょ。」

「勿論、姫様や私達貴族がいるから国は成立つよ！」

「じゃあ、平民は？」

「平民が私達に仕えるのは当然でしょ？ 王あつての国、貴族あつての国ですもの」

「・・・そう思っているなら、ルイズ、トリステインは一生ゲルマニアには追いつけないわ」

そう言つて、キュルケはどこかに行つてしまった。

「なんなのよ！」

最後にキュルケが言ったことがルイズは気にくわなかった。

「平民が貴族に仕えることは当然でしょう！私達は選ばれた存在なんだからね！」

ルイズは得意顔でそんなことを言っていた。

そんなルイズの声は人々の笑い声で消えていった。

テファ達は、新しいドレスに着替えに行っているので、アレルは、一人で参列者達に挨拶をしている。

ある貴族に挨拶をしていると

「失礼するよ」

金髪の美少年がアレル達が座る席に来た。

「久しぶりだね、ランカスター殿」

「これは、ウエールズ皇太子」

ウエールズ皇太子は、何度かランカスター領に来たことがある。

彼はランカスター領で開発された物や技術をどうにかしてアルビオンに入れられないかと僅かな護衛を連れて、交渉に来た。

なので、アレルとウエールズは顔なじみなのだ。



「うらやましいね、あんな美人を4人も妻にできて」

「ははは、そうかい？」

「ああ、僕なんて・・・」

何故か暗くなるウエールズ。

アレルは、ウエールズがアンリエッタの事を好いていることを知っていた。

「そういえば、あれから進展はあったのかい？」

「いや・・・」

ウエールズは言い淀む。

「なんだ、文通以外になにもしていないのか？」

「ああ・・・」

ウエールズとアンリエッタは相思相愛のはずであるが、2人はなかなか会う機会がない。

アンリエッタもウエールズも第一王位継承権をもつ。

2人が添い遂げた場合、どちらかの国に嫁ぐことになる。

アルビオンは、数年前に現王の弟のモード大公が粛清されてしまったため、ウェールズ以外に王位につけるものがないので、彼がトリステインに入婿した場合、王位につく者がいなくなってしまう。

トリステインは、現在王座にはだれもいない。先王が亡くなり、後を継ぐべき王妃は喪に服し、娘はまだまだ未熟な部分がある。

仮にアンリエッタがアルビオンに嫁いた場合、第二王位継承権をもつ者は、ヴァリエール家になる。しかし、ヴァリエール家の当主が王座に着いたとして、その後王座につく者は、ヴァリエール家の三姉妹の内の誰かである。順当にいけば、エレオノール、カトレア、ルイズの順番になる。

しかし、エレオノールは、連続婚約破棄記録更新中。

このまま記録を更新し続けると跡継ぎの問題もある。

その次のカトレアは、ゲルマニア貴族に嫁いでしまった。

最後にルイズは、まだ幼い。

ウェールズとアンリエッタが添い遂げると……どちらかの国で内紛が起こるのは確実。

「まあ……頑張れ」

アレルはウェールズを励ます。

「ああ……なんとかやってみるよ」

ウェールズは少し暗い顔をしている。

「あら、ここにいらしたんですか、ウェールズ様、アレル様」

「や、やあ、アンリエッタ」

急に声をかけられたので、ウェールズはすこし、ぎこちなく返事をする。

「このたびは、御結婚おめでとうございます」

「ありがとうございます」

「本当にお綺麗でしたね。わたくしもあのような花嫁衣装を着たいものですわ」

「ははは、アンリエッタ様が花嫁衣装をお召しになられたら、さぞお綺麗でしょうね。お相手の方が羨ましいですね」

「まあ、お上手ですね」

「（ウェールズ、上手くやれよ）」

「（ああ、やってやる！）」

アレルはウェールズに小声で話した。

「それでは、アンリエッタ様、私はこれで失礼します。披露宴をお楽しみください。」

「あら、もう少しおしゃべりしたかったのですが」

「

「アンリエッタ、向こうに珍しい料理やお菓子があつたから食べてみないかい？」

「まあ、本当ですか？」

「ああ、一緒に行こう」

「ええ」

ウェールズが上手くアンリエッタを誘ってお菓子などが置いてあるテーブルに連れて行った。

「がんばら」

2人を見送り、アレルは次にガリア一行が集まっているテーブルに向かった。

「失礼、ジヨゼフ陛下」

「おお、新郎殿か」

アレルは、ガリア一行が集まっているテーブルに来た。

「本日は、私の結婚式に参加していただいて、ありがとうございます。す。」

「なぐに、これだけ、うまい酒と料理があるしな」

ジョゼフ王は、盛大に笑いながらワインを一気に飲み干す。

後ろに控えていた、黒髪の美女がジョゼフのグラスにワインを注ぐ。

「そちらのご婦人は？」

「ああ、秘書のシェフィールドだ」

「初めまして、アレル様。ジョゼフ様の秘書をしております、シェフィールドと申します。」

シェフィールドは微笑みながら自己紹介をする。

「そうだ。俺の娘を紹介しよう。おいイザベラ！」

ジョゼフは、自分と同じ青い髪の少女を呼んだ。

「娘のイザベラだ」

「初めましてイザベラ様。私、アレル・ラ・フォン・ランカスターと申します。以後お見知りおきを」

「ふん」

イザベラはアレルの事をじっくり観察する。

「あの、何か？」

「あなたが噂のゲルマニアの『水帝』かい」

魔法学院での決闘後につけられた『水帝』の二つ名をアレルは名乗っている。

その二つ名は隣国まで知れ渡っている。

普段はおとなしいが、一度怒りだすと止められない。

まるで、竜のごとく。

その竜の怒りの後には、何も残っていない……

そんな畏怖の念も込められている。

「一度に妻を4人も娶るなんてね。始祖ブリミルにケンカを売っているんかい？」

イザベラは少し不機嫌そうにアレルに言う。

「ははは、イザベラ様にも良い殿方が見つかりますよ。」

「ふ、ふん！」

イザベラは、顔を赤くしてそっぽを向いた。

「……イザベラは、既婚者に惚れ」

「エ〜レ〜又〜」

イザベラは、その先を言わせないようにタバサのほっぺをつねる。

「ふあい、すふいだぐわ」

「がはははは、仲がよいことだ」

「ええ、本当ですね」

ジョゼフとシエフィールドは微笑みながら2人を見守る。

アレルはしばらくジョゼフ達と話をしていた。

「ジエームズ王」

「おお、ランカスター殿か」

次にアレルはアルビオン王の所に来た。

アルビオン王からの祝いの言葉に笑顔でお礼を言う。

しばらく他愛もない話をして

「ジョームズ王、内密の話があるのですが。後ほどお部屋にお伺いしてもよろしいでしょうか？」

「ふむ、ここでは話せないことか……あいわかった」

この後、アレルとジョームズ王との間で話された内容は後のアルビオンにとって重要なものであった。

披露宴も終わり、各々の貴族は自分達の泊るホテルに引き揚げて行った。

アレル達もランカスターの屋敷に戻った。



## 新しい生命（前書き）

最近忙しくて更新が遅くなりました。

少し短いですがどうぞ。

## 新しい生命

長期の休みから5カ月後。

冷たい風が吹き始めた頃の虚無の曜日。

トリステイン魔法学院の生徒達はこの休日自由に過ごす。

ある者は、自分の趣味のために。

ある者は、恋人との逢瀬に。

ある者は、城下町に。

アレルは、ランカスター領から送られてきた書類を処理していた。

大部分の書類はランカスター領にいる部下に任せているが、領主が目を通さなければならぬ書類はこうしてアレルに送られてくる。

「はい、これで最後だよ」

アレルの秘書兼妻のマチルダが書類を渡す。

「ふゝ、これで終わりか」

「お疲れ様。メイドにお茶をもってこさせるよ」

マチルダがメイドを呼ぼうとした時。

「アレル様！テファニア様が産気づかれています！」

メイド長が政務室に駆けこんできた。

「なに！？」

「なんだって！？」

アレルとマチルダは走ってテファの部屋に向かった。

途中ですれ違うメイド達もどこかそわそわしている。

「テファ！」

2人はテファの部屋に駆けこんだ。

テファはベッドの上で、寝間着のまま横になっていた。

彼女は意外にも落ち着いた様子であった。

アレルと手マチルダはそんなテファの姿に安堵した。

「テファ！大丈夫？苦しくない？」

「ええ、大丈夫よ」

「アレル様、産婆とお医者様にも連絡は済んでいます。出産経験のあるメイドによると、今夜生まれる可能性が高いそうです」

「そうか」

アレルはテファのベッドの横に座り彼女の手を握った。

「うっ……うっ……」

テファは陣痛に苦しむ。

アレルはテファの部屋の前を行ったり来たりしていた。

テファの陣痛がひどくなってきたので、産婆はアレルを部屋の外に出された。

今、部屋の中には出産経験のあるメイドとマチルダ達がテファに付き添っていた。

時折、テファの苦しそうな声が聞こえてくる。

『テファ、しっかり！』

『テファさん』

『頑張って！』

『息を大きく吸って、はいて』

どれだけ時間がたっただろうか？

扉の向こうで赤ん坊の泣き声が聞こえてきた。

泣き声が聞こえてきてからしばらくして、部屋の中でテファアに  
いたメイド長がアレルを呼んだ。

中に入ると、産着を着せられた赤ん坊がテファアに抱かれていた。

その周りを、マチルダ達と使用人達が見守る。

「おめでとつございます。元気な女の子です」

「テファア」

「アレル」

アレルは視線を我が子に向ける。

赤ん坊は周りの音に反応し身体を動かそうとしている。

その目は、アレルと同じ蒼色、髪の毛はテファアと同じ金色、そして  
耳はアレルとテファアと同じく少し長く尖っていた。

アレルはその子にそつと手を伸ばし、頭を撫でる。

その子の肌はとてもあたたかく、やわらかかった。

「抱いてみる？」

アレルはテファアから我が子を抱き上げた。

その目を覗きこむ。

どこまでも透き通った蒼色の瞳は、自分を抱き上げた者の目をじっと見る。

すると、アレルと契約している精霊達が周囲を飛び回った。

しばらくすると赤ん坊は泣き出してしまった。

テファアはそんな我が子を受け取りあやす。

「アレル」

「ん？何？」

「この子の名前は？もう決めてくれた？」

「ん？」

「エリカ エリカ・ラ・フォン・ランカスター」

「ふふふ、とつてもいいお名前を貰ったわね」

エリカを抱きしめるテファ。

「テファによく似ているね」

「そうかしら？アレルにも似ていると思うわ」

どちらに似ていても将来美人になることは間違いないだろう。

アレルは寝むっているエリカを見て微笑む。

「あう」

突然エリカが泣きだした。

テファがあやすがなかなか泣きやまない。

「お腹が空いたのかしら？」

貴族の多くは、自分で授乳せずに乳母に任せることが多いがテファは自分で授乳したいと言った。

出産経験のあるメイドに授乳の仕方を習い、テファはエリカに授乳をする。

エリカは一生懸命、テファの乳を吸う。

その姿は、聖母のようであった。

その後、

「おめでとございます。マチルダ様、キュルケ様、カトレア様も  
懐妊されています」

テファとエリカの診察をした後にマチルダ達の健康診断をした医者  
がアレルに伝えた。



## 新しい生命（後書き）

時間を少しすすめました。

これから一気に原作に突入していきたいと思えます。

夜空に咲く(前書き)

バイトが忙しくてなかなか書けませんでした。

それに短いです。

## 夜空に咲く

ここ、トリステイン魔法学院では1年を締めくくる舞踏会が開かれてた。

会場には煌びやかな衣装に身を包んだ生徒達が豪華な料理や酒を食べたり飲んだり、会場の真ん中で踊る者もいた。

また学院の生徒以外に年配の貴族の姿もあつた。

年齢的に言つて、生徒たちの親であろう。

何故、学院の舞踏会に生徒の親が参加しているのかというと、

この舞踏会は普通の舞踏会ではない。

少し特殊な舞踏会なのだ。

学院の生徒には今日開かれる舞踏会に自分の親しい人を外部から呼ぶことができるようになってる。

自分の家族・親戚・婚約者であつたり呼ぶ者は人それぞれである。

但し、それには招待状が要る。

学院の生徒には1人に1枚招待券が配布され自分の思いおもいの人に渡す。

しかし、1枚だけでは見栄っ張りのトリステイン貴族を満足させら

れない。

かといって、生徒が呼びたい人を全員招待しては学院の施設には受け入れられない。

そこで、オスマン学院長は生徒全員に一枚配布される招待券以外にそれを手にいれる方法を考えついた。

オスマン学院長が考えたのは、学院で様々な面で優秀な成績を収めた生徒に対して別途招待券が支給するというものだ。

魔法学・歴史学・魔法薬学・e t c……

優秀な成績を収めている人物であれば配布される招待券の枚数は増える。

生徒達にとってこの舞踏会に1人以上の招待をすることができるとは、自分は優秀な人物であるとアピールすることにもなる。

その中でもアレルは実技・教養でトップクラスの成績を収めていたので自分の妻と子供の分の招待券は簡単に手に入っただし、余ってしまった。

そこで余った分の招待券はカトレアとキュルケの両親を呼ぶのに彼女達に渡した。

一応、アレルの両親にも送っておいたがさすがに皇族がここに来るのは難しいだろう。

ルイズも実技はともかく、勉学の面で上位の成績だったので招待券を1枚以上手にいれることができた。

今回、ヴァリエール一家の分の招待券はルイズが用意した。

アレルとカトレアが気を利かせたのだ。

ルイズは今、久しぶりに家族全員と一緒にいる。

アレルもテファ達と一緒に今日の舞踏会を過ごしている。

『そろそろ、この舞踏会もお開きの時間じゃの』

生徒達からブーイングが聞こえる

『か　　っ！』

学院長が一喝する。

『おほん！最後に余興を用意した。皆、窓の外を見てみるがよい』

生徒達の視線が外に向けられた。

ひゅ~~~~~ずどん！

夜空に金色の花が咲いた。

学院長に依頼されアレルが作りだした花火である。

火の秘薬を大量に使ったものであるが、うまく調合すれば様々な色を作り出すことができる。

「上手く咲きましたね。コルベール先生」

「ああ・・・」

花火を打ち上げているところにアレルとコルベールの姿があった。

今回、アレルはコルベールに協力を申し出た。

コルベールは『火の魔法の平和的な利用』を模索していた。

攻撃的なイメージのある系統である火であるが、夜空に咲く火の花はそんな攻撃的なものではなく、美しく咲き、儂く散っていった。

2人の作りだす火の芸術は人々の心を魅了した。

その花火はトリスティンの城下の人々の目にも見えた。

そして、王城のとある少女の部屋からもこの光の花は良く見えた。

人々の心に照らし出される鮮やかな光の芸術。

いつしか、皆、空を見上げて見入っていた。

それほど、幻想的な光の芸術が夜空にはあった。

テラスの一角を確保したテファ達は夜空に咲く様々な色の花を眺めた。

「ほぐら、エリカ。お父様が作っているのよ」

「あうあう」

エリカは夜空に咲く花に手を伸ばそうとテファの腕の中で暴れる。

かなりの数の花火が

最後に一際大きな花火が上がった。

アレルはこの花火に想いをこめて打ち上げていた。

来年もこの平穏な時が続きますように……

しかし、この時、アレルも予想していなかった。

激動の時代は・・・

そのままで迫ってきている・・・



## 夜空に咲く（後書き）

主人公達の1年生での話はこれで終わりです。

そろそろ原作に突入します！

大学がそろそろはじまるので書く暇があるかわかりませんが、何とか完結できるように頑張ります。

意見を投稿してくれた方、ありがとうございます。参考にさせていただきます！

IF的な話でヒロインにしてほしいキャラを募集しようかと考えています！

前に多かったのがシエスタとかタバサだったかな？自分的にはイザベラとか入れたいかな？

ではでは、失礼します。

## 使い魔召喚の儀（前書き）

ようやく………ようやく原作に突入！

ここまでかなり時間がかかった……

すでに原作ブレイクをしまくっているけど今後どうしようかな？

それに原作が現在手元にな……い！

うる覚えだけど、どうぞ！

## 使い魔召喚の儀

新学期が始まって、アレルはキュルケ、タバサ、ルイズ、ギーシュ、モンモランシ などと一緒にクラスのクラスになった。

すぐに、二年生になったトリステイン魔法学院の生徒はある儀式をおこなわなければならない。

### 春の使い魔召喚の儀式

トリステイン魔法学院に通う生徒で二年生になった者を対象に行われる。

三年生に進級するには必ずこの儀式を行わなければならない。

この儀式で生徒は自分の使い魔を呼び出す。

メイジにとってこの使い魔召喚の儀式は神聖かつ重要なものであり、自分のメイジとしての実力を周囲にアピールする機会でもある。

メイジとしての実力が高ければ呼び出すことができる使い魔もドラゴン、マンティコア、ペガサスなどといった竜種や幻獣種を使い魔とすることができる。

逆にメイジとして実力が低ければ普通の動物などが出てくる。

生徒達は学院から少し離れたところにある草原に集まった。

「ミスタ・ギーシュはジャイアントモールと……では、次は」

コルベール先生が召喚した使い魔とルーンを記録する。

広場には既に召喚を終えた生徒の使い魔がかなりいる。

その中で2体の竜がひと際目立っていた。

タバサが召喚した青い鱗の風竜。

キュルケが召喚した赤い鱗の火竜。

メイジの実力によって召喚される使い魔は異なるが、基本的に自分の得意とする属性とメイジのクラスによって様々である。

竜種を召喚した2人の実力はかなり高いことがわかる。

「次はミスタ・ランカスターの番です」

監視役のコルベール先生が呼ぶ。

召喚される使い魔は普通の動物から強力な幻獣と様々なため、生徒

の安全のために実力のある教師が監督役になる。

そうなることとコルベールは相当な腕をもったメイジである。

しかしそのことに気付いているのはごく一部である。

「私の名は、アレル・ラ・フォン・ランカスター。私と共に歩むものよ来たれ！」

アレルが杖を抜いて、サモンサーヴァントの呪文を唱える。

すると………

風の吹く音

アレルの周囲にいる生徒のざわめき

使い魔達の鳴き声

生きとし生きる者の発する音が消え……

そして、動きを止めた……

世界が停止した

その停止した世界に一人たたずむ少年がいた。

サモンサーヴァントを行ったアレルである。

「……………」

アレルの目の前には巨大な光り輝く門が現れた。

そこから圧倒的な力をもつ存在がこの門の先にいることが分かる。

やがて

『わらわを呼んだのは主か？』

門から光り輝く竜が現れた。

「君が僕の使い魔か？」

『然り。わらわは皇竜族の長の娘じゃ』

「聞いたことがない種族の竜だね」

現在ハルケギニアで確認されている竜は風竜、火竜である。

文献には水竜、地竜が要るらしいがどちらも人間が到達できない地下深く海底深くに生息しているらしく確認されていない。

この目の前にいる竜はどうやらそれら火竜・風竜・地竜・水竜の頂

点に立つ存在らしい。

個体数はそれほど多くはないが、火竜より強力なブレス、風竜より早く飛べる、地竜よりも強靱な爪と牙、水竜より硬い鱗を持つらしい。

「そんなすごい竜族の長の娘が僕の使い魔に……でも良かったのかい？君には父と母がいるだろう。こんなところに来てしまった？」

『それなら問題ない。父もかつて人間に召喚されたらしい。その時は種族を偽り別の竜の姿で主となった者と共に様々なところへ行っただらしい。わらわの前にゲートが現れると父も母も喜んでわらわを送り出してくれたぞ』

「そうなんだ。いいかげん『君』って言うのも失礼だし、名前を覚えてくれないかい？」

『わらわに名はあるが主達の言語では発音できぬ。主が新しい名をつけてくれ』

「うーん……ステラなんてどう？」

『ステラ……わらわの新しい名はステラじゃ』

どうやら気に入ってくれたらしい。

「ところでステラ」

『なんじゃ主？』

「使い魔によつてそのメイジの属性や力量とか予想できてしまうんだけど、君も父親のように姿を変えられるかい？」

「勿論じゃ。これでどうじゃ？」

一瞬で彼女の光り輝く身体は青色の半透明な身体に変わった。

翼は退化し空を飛ぶ機能が失われ、その代わりに巨大になった身体。

深い海底の水圧に耐えるために強固になった鱗。

『主からは水の精霊の匂いが強い。おそらく水魔法ばかり使ってるんじゃない？だから水竜の姿をとってみたがこれでよいか？』

本来の大きさより少し小さくなったが、まだ大きい。

「なるほどね。じゃあ、普段はその姿でいてね」

「わかったのじゃ」

そして、再び時は動き出す。

周囲にとってアレルとステラが話した時間は一瞬でしかない。



アレルとステラは打ち合わせ通りに動いた。

「君が僕の使い魔かい？」

「きゆる」

「おお、ミスタ・ランカスター。珍しい竜ですね。では、コントラクト・サーヴァントを」

「我が名はアレル・ラ・フォン・ランカスター。五つの力を司るペインタゴン。」

この者に祝福を与え、我が使い魔となせ」

そう言って、アレルはステラの口にキスをした。

しばらくしてステラの胸のあたりにルーンが刻まれた。

「ふむふむ、見たことがないルーンですね」

コルベール先生はステラの胸のルーンをスケッチした。

アレルはステラを連れて妻達の所に戻った。

「お疲れ様。それにしても綺麗な竜だね」

「本当にそうですね。でも本当の姿はもっと綺麗なんじゃないかな」

「カトレア？何言っているのよ？」

カトレアはこういうことに鋭い。

「ああ、後で説明するから」

「はい」

「「？」」

（主。この者達は主に近しい者なのか？）

アレルの脳内にステラが直接語りかけてくる。

（僕の奥さん達だよ。屋敷の方にも後1人いるし、子供もいるよ）

頭の中で会話をしている2人。

そして、アレルの次に召喚を再び行っているルイズは相変わらず使  
い魔召喚の呪文で爆発を起こしている。

周囲はルイズの爆発魔法で挟られ、空に浮かぶ双子月の表面に似た  
物だらけになっていた。

「ミス・ヴァリエール、残念だがこれ以上は」

一向にゲートが開かないルイズにコルベールが声をかける。

「コルベール先生！最後にもう一度……もう一度やらせてくだ  
さいー！」

「・・・わかりました。これが最後ですよ」

ルイズは杖を握りしめる。

（これで失敗したら留年・・・失敗したら留年・・・留年・・・留年）

ルイズの頭の中には自分が1つ下の下級生と一緒に授業を受けるビジョンが浮かんだ

ルイズからまがまがしい？オーラが発生した。

明らかに精神力を練りすぎである。

今までの爆発と比べものにならないことがすぐにわかった。

「やばいね」

アレルは杖をふり自分達の周りに水の防御壁を作り上げた。

「  
！」

何か『宇宙』とか『神聖』とか『美しい』とか聞こえた。

サモンサーヴァントの呪文の後に使い魔に語りかける言葉は人それぞれだが、ルイズは何を使い魔に期待しているんだろう？

今までの爆発とは比べ物にならない爆発が起こる。

周囲は爆発で生じた煙で何も見えなくなった。

「あんだ誰？」

煙が晴れ、ルイズが爆発させたところに見たこともない服を着た少年がいた。

少年は周囲をきよろきよろ見ている。

『おい、ゼロのルイズが平民を召喚したぞ』

『本当だ！』

『さすがゼロのルイズだ！』

周囲の生徒はルイズを馬鹿にする。

『おいおい、いくら魔法が使えないからってそこから辺の平民を連れてくるなよ』

「ち、ちがうわ！ちゃんと召喚したもん！ミスタ・コルベール！もう一度やらせてください！」

「ミス・ヴァリエールそれは出来ない。神聖なこの儀式にやり直しは利かない。彼が君の使い魔だ」

「そ、そんな〜。〜。」

「さあ、早く契約をするんだ」

「うつつ、感謝しなさいよ、こんなこと滅多にないんだから」

ルイズは呪文を唱え、少年にキスをする。

少年は呆然としていたが、左手に刻まれるルーンの痛みに悲鳴を上げる。

「おや、義妹は変った使い魔を召喚したね」

「まあまあ」

「あれって、ファーストキスでしょうに・・・かわいそう」

ルイズはショックのあまり、カトレアの元に走ってきた。

「ちい姉さま！」

「あらあら、よしよし」

飛び込んできたルイズをカトレアは抱きしえ頭を撫でる。

「おい！説明しろよ！ここはどこだよ！」

ルイズの使い魔となった少年が彼女を追って走ってくる。

「うっさい！なんでこんなのが私の使い魔なのよ……」

「ルイズ、どんな使い魔でもあなたの一生を共にする使い魔なのよ。そんなことを言うてはだめよ」

「でも……」

「ごめんなさいね。この妹にも悪気はないのよ」

「あゝ、え」と……

ルイズの代わりに少年に頭を下げるカトレア。

少年はその大きく揺れた彼女の胸を凝視する。

それに彼女の周りには自分にキスをしてきた少女と比べ物にならないほどの大きな胸の女性がいっぱいいたので鼻の下を伸ばす。

「べ、べつに問題ないです!」

「あら、よかったわ この子と仲良くしてね」

「は、はい!」

カトレアの微笑みにでれでれするサイト。

「なあなあ、お前の姉ちゃん紹介してくれよ」

ルイズの傍に来て小声で話す。

「はあ?なんでそんなことをしないとイケないのよ」

「いいじゃん。紹介してくれよ」

「紹介したところで、ちい姉さまには夫がいるわよ」

「え……」

サイトはカトレアの左手に嵌められた指輪に気付いた。

「は……男がいるのかよ……じゃ、じゃあさ、周りの人は?」

サイトはマチルダとキュルケを指差す。

「……2人とも夫がいるわよ」

「そ、そんな〜・・・」

サイトはがっくりとうなだれる。

「ちくしょ〜、なんで、俺を召喚したのがこんな貧乳なんだよ・・・」

「なんですって!」

ルイズとサイトが言い合いを始めた。

「ちよ、いたたた」

「こんの〜、ばかばかばか」

そんな2人をアレル達は優しく見守るのだった。



## 使い魔召喚の儀（後書き）

いかがでしょうか？

使い魔召喚の儀が三年生の進級で大事なものであったと記憶しているのですがあってたでしょうか？

最近、作者は『聖闘士星矢』にはまりました！そこらへんのネタを少し入れるかも！

義兄として（前書き）

最新話です！

誤字がありましたらどんどん指摘してください。

それと感想がありましたらお願いします。

## 義兄として

今日はカトレアが召喚されたばかりの使い魔達の世話をするため、いつもより早めに屋敷を出た。

最近、この屋敷の食堂に青い髪の少女の姿を頻繁に見るようになった。

キュルケの友人タバサだ。

以前、キュルケが彼女を晩餐会に招待した。

どうやらこの屋敷の料理長が作った料理がお気に召したようで、ちよくちよく屋敷の食事を食べに現れるようになった。

たまに、新鮮な食材（さつきまで生きていた熊とか猪とか）をもって現れ

『・・・・・・・・ん』

と言って、渡してくる。

どうやらお礼のようだ。

今朝も、昨日召喚した風竜のシルフィードに乗って現れた。

手土産に大きな鹿を一匹持ってきた。

その後、自分の指定席に座るとメイド達がタバサ料理の乗った皿を

運んでくる。

それを無言で次々と空にしてゆく。

口いっぱい料理を詰め込む姿はどこか小動物リスを重ねてしまう。

キュルケは10人分の朝食を食べてお代わりをしているタバサともう少ししてから学院へ行くからと、アレルとカトレアを送りだした。

テファニアが玄関ホールまでエリカを抱っこして見送りに来てくれた。

軽く、行ってきますのキスをして外で待機していたステラの背に乗って飛び立った。

学院の庭に降り立つと、ちょうど他の生徒達が朝食を食べに食堂へ向かっているところだった。

アレルは、仕事があるカトレアと別れ、義妹ルイズの様子を見に行った。

カトレアから、ルイズが自分の部屋に使い魔用にわらもちこんだことを聞いていた。

動物であればわらの寝床は問題ないが、昨日召喚したのは人間。

ルイズの事だから召喚した少年をその寝床で寝かせただろう。

それに、食事に関しても……

食堂内には、朝から豪華な料理が数多く並ぶ。

生徒達は自分の席に座り、目の前の料理を食べてゆくが、少ししか食べなかったり、全く手をつけなかったりとせっかく厨房の料理人達が用意した食事を残飯へと変貌させてゆく。

その中で、アレルは義妹<sup>ルイス</sup>が昨日召喚した使い魔の少年を床に座らせているのを見つけた。

床には水のようなスープとカチコチに硬くなったパンが2個あるだけだった。

ルイスは自分の席に座り、朝からクックベリーパイを食べていた。

「……………はあ」

アレルはため息をつくと近くのメイドに声をかけた。

少しすると、メイドがシチューとパンがのったお盆を持ってきた。

それをアレルは受け取ると、義妹<sup>ルイス</sup>の所に歩いて行った。

「ルイス、おはよう」

「あら、義兄さま。おはようございます」

周りに人がいるので猫を被って丁寧に挨拶を返す。

「珍しいですね。屋敷の方でちい姉さま達と朝食を召し上がってきたと思っただのですが」

アレルの持っているお盆を見て言う。

「いや。これは僕の分じゃないよ」

そう言っつて、アレルはサイトに持ってきたお盆を渡す。

「……え？」

サイトは地面に置かれたルイズが用意した朝食と目の前のお盆を交互に見る。

床には、水のようなスープとカチコチなパン

お盆には、野菜と肉がたっぷりに入ったシチューとやわらかそうなパン

「マジで、これ貰っていいの!？」

昨日から何も食べていないサイトはルイズの用意した食事を見て落ち込んでいたが、昨日ルイズの姉と一緒にいた美少女?の一人が自分のために食事を持ってきてくれて舞い上がった。

「どうぞ。君のためにもってきた物だ」

「ちょっと義兄さん！人の使い魔に餌付けしないでくれませんか」

こめかみをぴくぴく動かしながら言う。

「ルイズ。使い魔として召喚されたとはいえ、彼は人間だよ。君の用意した食事はなんだ？それに公爵家の三女が使い魔の食事も用意できないと周りには思われるかもしれないけどそれでいいのかい？後・・・ルイズはそうやって使い魔を床で食事させているけど・・・そういつた特殊な趣味がある子と思われるかもよ？」

「なっ！？そんなわけないでしょ！」

慌てて言い返す。

そして、周りを見つめる。

自分に隠れてこそそこ何かしゃべっている生徒や自分を見ていたと思われる生徒と目があつた。

「ルイズって、あんな趣味があつたなんてね・・・」

「さすが『ゼロ』のルイズ・・・性的趣向も僕達と異なっているんだ」

「はあはあ・・・罵られたい」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

アレルはルイズの肩に手をのせる。

「大丈夫……カトレア達も理解してくれるよ……」  
優しくルイズに語る。

「うう……わかったわよ。サイト！それ食べていいわよ！後、厨房に頼んで食事を貰えるように言っておくわ！」

「え？マジで！よっしゃー」

サイトが悦びの声を上げる。

「じゃあ、僕は先に教室に行っているから」

「おっ！料理持ってきてくれてサンキュー！」

「さんきゅー？」

「ああ、俺の国の言葉でありがとつって意味だよ」

「ふふ、そうなんだ」

アレルはサイトに微笑み、食堂の外へと歩いて行った。

「うう（なんであれが義兄なのよ！）」

「うめえ！このシチュー最高！」

サイトはアレルが持ってきた食事にかぶりついていた。

「はあ……しょうがないわよね」



「なあなあ」

「なによ」

「あの娘。なんで男の恰好なんてしてんだ？」

「はあ？」

「だって、あの娘、女だろう？女だったらスカートをはかなきゃだ  
ろ」

「あんた何言ってるのよ。アレルは男よ」

「……え？」

「あんなにきれいなのに男なのかよ……まさか男の娘だったと  
は……あんだけ綺麗だと女にも男にももてるんだろうな……」

サイトがため息をつく。

「あんた何言ってるのよ。アレルがちい姉さまの夫よ」

「……へ？」

「それに、ちい姉さま以外にも奥さんが3にんいるわよ」

「俺と同じぐらいの年齢で……奥さんが4人も!？」

「後、このまえ子供が一人生まれたわ」

「子供もいるのかよ!?!」

サイトの絶叫が食堂に響いた。

今日の授業はシュヴルーズ先生の錬金に関する授業。

生徒達は昨日召喚した使い魔を伴って授業に出ている。

アレルやキュルケ、タバサの召喚した竜はこの教室には入れないので教室の外から中の様子を見ている。

「みなさん。おはようございます。みなさん無事に使い魔を召喚できましたよね。おや?ミス・ヴァリエールは変わった使い魔を呼びましたね。」

『おいルイズ!サモン・サーヴァントが出来なかったからってその辺にいた平民を連れてくるなよ!』

太っちょのマリコルヌがルイズのことを馬鹿にする。

「先生!『かぜつびき』のマリコルヌが私を侮辱しました!」

ルイズは勢いよく自分の席を立つと、顔を真っ赤にしてマリコルヌを睨みつける。

「誰がかぜつぴきだ！僕は『風上』のマリコルヌだ！大体、お前の『ゼロ』ってのは本当のことじゃないか！」

ルイズとマリコルヌが言い争う。

「だいたいあなたは ひゃあ!？」

ルイズが突然奇声を上げる。

「なにやってんだ。これだからゼロの うひい!？」

マリコルヌも奇声を上げる。

奇声の原因はアレルが魔法で作りだした氷だった。

あまりにうるさかった2人の背中に空気中の水分を凍らせて作った小さな氷の塊を入れたのだ。

「ちょっと！何をするんだい！」

マルコルヌはアレルに喰ってかかる。

「ああ。義妹<sup>ルイズ</sup>のことを馬鹿にしたものにちょっとしたイタズラさ」

「ぶ、ぶね」

そこでマリコル又は目の前の男が誰なのかを思い出した。

急速に頭に上っていた血が冷めたようだ。

アレルがこの一年間で学院で起こしたことを思えば、この程度ですんだことはまだいい方だ。

もし、これ以上ルイズを馬鹿にし続けると『水帝』の逆鱗に触れる。

「う、うん。しゃ、謝罪するよ。ル、ルイズ・・・ごめん」

「え?」

「うん。じゃあ席に戻りなよ。先生も待ってるし」

マルコリ又はかくかく頷き冷や汗をたらたらかきながら自分の席に戻っていった。

「さあ。ルイズも席に戻りなよ」

「え?う、うん」

何か納得のいかないルイズはともかく席に戻った。

「お騒がせして申し訳ありませんミセス・シユブルーズ。授業を再開してください」

「え?ええそうですね。では、授業を再開します。今日は一年生のときに習った錬金魔法の復習をします。何事も基本が大事です。では、まず私が実演します」

シユブルーズは小石を教壇の上に置き、呪文を唱えた。

すると、小石は光を発してきらきら光る物質に変わった。

「黄金ですか!？」

金髪ロール頭の女子生徒の一人が前のめりに乗り出して、シユブルーズが錬金した物がなんなのか訊ねた。

「いいえ。真鍮です。黄金に出来るのはスクウェアだけです。私はただの……トライアングルですから」

「えーそうなんですか・・・」

女子生徒は明らかに落ち込んだ様子で席に座る。

「では、一人ひとり前に出てきて実演してもらいましょうか。ミス・ランカスター、前に出てきて錬金をしてください」

「はい」

アレルは席を立ち、教卓の所に来た。

アレルは学院で水のスクウェアとして認知されている。

錬金魔法は、主に土系統のメイジが得意とする分野である。

水メイジは、主に治療向けの属性と言われている。

自分の得意な属性によって得意な魔法、不得意な魔法などがある。

典型的な例が、火メイジは攻撃型、治療系の魔法は苦手。

水メイジは、補助型、攻撃系の魔法は苦手。

ほとんどの水メイジは、錬金魔法が苦手である。

メイジのクラスによっては、自分の得意な属性以外の魔法も多少使えたりするようになるが、ほとんどのメイジは、両親のどちらか一方の属性を受け継ぐことが多い。

稀に両親の属性二つを受け継ぐこともある。

「強く錬金したい物質を思い浮かべてください」

「はい」

アレルは、杖をとりだし机の上に置いてある石に錬金の呪文をかける。

すると、黒くごつごつしていた石が輝き、白銀の光を出す塊に変わった。

「はい。ミスタ・ランカスター、素晴らしい錬金ですね！水メイジでありながら純銀を錬金するのはすごいことです。文句なくA評価です」

シュヴルーズ先生は大絶賛する。

アレルが水メイジでありながら銀を錬成したことに金髪ロールの少女がかなり反応していた。

何か得物を狙うような目でアレルと彼が持つ銀を凝視していた。

「ありがとうございます」

「それでは、次は」

次々に生徒達が錬金の魔法を実演していく。

そして………

「では、ミス・ヴァリエール。貴方の番です」

シユブルーズの言った一言で教室内の空気が凍りついた。

「先生、それはよした方が……」

「そ、そうですね……ルイズ、お願いだから止めて……」

生徒達は必死にルイズに魔法を使わせないように止める。

「やります!」

意地になったルイズにその言葉は聞こえなかった。

ルイズは教壇の前に立つ。

先ほどアレルが錬金をした時と同じように石が置かれている。

「ミス・ヴァリール。錬金したい物質を頭の中で強く思い浮かべるのですよ」

ルイズの横にシュヴルーズ先生が立ち、アドバイスをしている。

もはや、ルイズが錬金することは止められない。

そう判断した生徒達はすぐさま行動を開始した。

前の座席に座っている生徒は机を魔法で浮かせ後ろまで運び他の机の上に重ねる。

それに土系統のメイジが数人がかりで固定化の呪文をかける。

即席の防御壁ができあがる。

その防御壁の周囲に風メイジ達が風の膜を作りだす。

防御壁の後ろでは水メイジ達が怪我人が出たときのために精神力を高める。

火メイジはルイズの魔法で発生する爆風の熱を無効化するために備える。



僅か30秒で即席の防御陣が完成する。

去年、ルイズの爆発魔法で被害を受けた生徒達は一致団結し惨事に備える。

「さあ！ミス・ヴァリエール」

「錬金！」

ずがん！

ルイズの錬金魔法は予想通り対象の石を大爆発させた。

爆発の衝撃波と熱風が防御壁の周りに張られた風の膜を突破

第二陣の機の防御壁を衝撃波が襲う。

熱風は何とか火メイジによって霧散されたが衝撃波が重ねた机に直撃  
机の後ろで必死に固定化をかけた続けた土メイジ達は吹っ飛んできた  
机に巻き込まれる。

幸いなことに、吹っ飛ばされた生徒に怪我はないようだ。

被害も教室のガラスや机が吹き飛び壊れたりしたぐらいである。

と………思っていた。

誤算があった。

この前までいなかったものが教室内にいたことだ。

そう、昨日召喚したばかりの使い魔達……

爆音に驚いた使い魔達が暴走。

フクロウがガラスを突き破って逃げ出したり……

使い魔の蛇が使い魔のネズミを食べてしまったり……

使い魔の大きなクマが主を間違えて踏んでしまったり……

マルコリアの口の中に、とある女子生徒の毒々しいカエルが飛び込  
んだり……

『うわー！俺のラッキーが！』

『ぐえっ！？』

『じっくん……ぶくぶく』

『おい！マルコリア！しっかりしろ！』

『いやあー！私のロビンが！吐きなさい！いますぐ！』

教室内は阿鼻叫喚の状態になった。

「いつみてもすさまじいね……」

アレルも一年生の時、ルイズ（義妹）の爆発魔法を何度も目にした。初めてルイズの爆発魔法を見た時、今回と同じような授業だった。

アレルはとっさに防御魔法を展開した。

とっさに張った防御魔法とはいえ、スクウェアアークラスのメイジの魔法を受けてもびくともしないはずのアレルの魔法をいとも簡単に突破したのだ。

それからアレルは、ルイズが授業で魔法を使う時は四属性の精霊の加護を受けた防御魔法を張ることにしている。

たかが錬金で使う精神力でここまで強力な爆発を起こせるルイズの評価はアレルの中ではかなり高い。

これで、威力の調整や爆発する位置を自由にできるようになったら『天空』騎士団の中でも上位の位置にルイズは位置するなどアレルは思っていた。

義兄に高評価のルイズ本人は？というと・・・

爆風で髪はぼさぼさ

制服の一部は焼け焦げたり、吹き飛んでいたたり

顔は煤だらけ

ルイズはポケットからハンカチをだして顔を拭くと

「少し失敗してしまいました」

さらっと言った……

ルイズのすぐそばには、爆風と衝撃波をもろに食らったシュヴルーズが目を回していた。

その後、ルイズは教室の片づけを命じられる。

当然、使い魔のサイトも主のルイズと同じく教室の片づけをすることになる。

その時、サイトがルイズのことを侮辱するような歌を歌ったおかげで、アレルがせっかく普通の食事が食べられるようにしたのに、昼食抜きになった。

義兄として（後書き）

義妹の行動に苦悩するアレルでした。

それほど苦悩してないかな？

テファやキュルケ、マチルダ、カトレア達との会話がなかなか書けない・・・

## ギーシュVSサイト(前書き)

めちゃくちゃ忙しくてなかなか更新する暇がありませんでした。

誤字の指摘をしてくれた方、ありがとうございます。

この話を投稿した後に直します。

それではどうぞ！

## ギーシュVSサイト

昨日召喚した使い魔との交流のために今日の午後の自習である。

無事進級に必要な儀式の1つを終えた2年生達は、重圧から解放されたのでのびのびと過ごしている。

生徒達は庭先に出て友人達と談笑をしたり、お茶を飲んだりとしている。

生徒の傍には召喚した使い魔が控えている。

生徒は、友人に自分の召喚した使い魔を見せ自慢する。

自慢された生徒も自分の使い魔を自慢する。

その中でひと際目立つのが、竜を召喚した者達である。

タバサの風竜のシルフィード。

竜種のなかでも一番の飛行速度を持つと言われている。

キュルケの火竜のフレイム。

火山山脈を住みかにする竜達で、竜種のなかでも一番攻撃力が高いとされている。

アレルの水竜（皇竜）のステラ。

4系統の竜族を束ねる王の一族の娘。

本来の姿は、光り輝く白竜であるが、今は、海底深くに生息していると言われている水竜の姿をしている。

水圧に耐えられるように巨大化した身体と分厚い鱗。

飛ぶ必要がなくなったため退化した翼。

タバサやキュルケの竜より巨大な身体で主の座る席の近くでステラは丸まって昼寝をしていた。

太陽がちょうど真上にくるくらいで、ぽかぽかした陽気とときおり吹く風が眠気を誘う。

主が席に座ってしばらくはステラもじっとしていたが、だんだんと瞼が閉じねむそうだった。

アレルは、ステラに自由にしていると言ったので、猫のように丸くなって眠ってしまった。

そして、シルフィードとフレイルムがステラの横で一緒に眠っている。

三体の竜が静かに寝ている様子は迫力満点。

使い魔を見ればその主の実力がわかると言われている。

メイジとしてのランクや素質によって召喚される使い魔は異なる。



ハルケギニアで最強と言われる竜種を召喚したアレル達は間違いなく実力のあるメイジである。

女子たちから熱い視線がアレルに向けられる。

男子達からは憧れと、畏怖の目が向けられる。

そんなことは気にせず、アレル達は午後のお茶を楽しんでいる。

「シエスタ、お茶のお代わりをちょうだい」

「あ、私はケーキのお代わりを」

アレル、マチルダ、キュルケ、カトレア、そしてタバサが午後のお茶とお菓子を堪能していた。

今日のケーキは、苺のショートケーキ

ふわふわのスポンジの間にたっぷりの生クリームとスライスしたイチゴを挟みその上にさらにスポンジを重ねてゆき、最後に全体に生クリームを塗り、真っ赤なイチゴを丸ごと乗せる。

給仕役のメイドはカートに乗せたホールケーキを丁寧に切り分けお皿にのせて運ぶ。

「うん。やっぱりマルトーさんのケーキは美味しいね」

「そうね」

「このイチゴの酸味と生クリームの甘さが何とも言えないね」

「どつしてこんなにおいしいのにみんな食べないんだろっね？」

「……………さあ？」

「どつしてかしらね？」

アレル達はさも不思議そうな顔をする。

周囲の生徒達は紅茶を飲んだりするが、ケーキには手をつけていない。

それもそのはず、彼らの視線の先には山積みのお皿。

その皿の山はアレル達の席にある。

さつきから、ホールケーキを何個もぱくぱく平らげているアレル達を見て、周りの生徒達は胸やけで、ケーキを口にすることができなかつた。

キュルケの隣りに座っているタバサも大量のケーキを無言でもくもく食べている。

メイドのシエスタが空になった皿を上手にお皿の頂上に重ねてゆく。

ときおり、風が吹いてきてお皿の塔はぐらぐらと揺れる。

「そう言えば、ルイズは？」

アレルはルイズ達もお茶会に招待していたが、一向にくる気配がな

い。

「使い魔を探しに行くとか言ってたわよ」

「ふうん（確かサイトのルーンは、ガンダールヴだったね）」

アレルの頭にはウエストウッド村でテファが歌った歌の歌詞が流れていた。

「神の左手ガンダールヴ。勇猛果敢な神の盾。左に握った大剣と、右に掴んだ長槍で、導きし我を守りきる」

「神の右手はヴィンダールヴ。心優しき神の笛。あらゆる獣を操りて、導きし我を運ぶは地海空」

「神の頭脳はミヨズニトニルン。知恵のかたまり神の本。あらゆる知識を溜め込みて、導きし我に助言を呈す」

「そして最後にもう一人……。記すことさえはばかれる……」

虚無を発動させる為に長い詠唱を行う間、無防備になる主を守ることに始祖の使い魔の一人であるガンダールヴの役割である。

歌の通りであれば、ガンダールヴは剣又は槍、何かしらの武器を使い主を守るようだ。

ルイズが召喚した少年を見た感じでは、剣や槍などを扱えるとは思えなかった。

武器を使うにはそれなりの修練が必要であり、サイトの立ち居ふる

まいからは修練をした用には感じられなかった。

そんなことを考えていると、突然聞き覚えのある人物の怒声が聞こえてきた。

いったん思考するのを止め、怒声が聞こえてくる方に顔を向ける。

「なんてことをしてくれただんだ！」

「も、申し訳ありません……」

「君の愚かな行いで美しいレディが2人も傷ついてしまったぞ！」

ギーシュがメイドのシエスタに顔を真っ赤にし怒っていた。

他の生徒に何故こうなったのか聞いてみると、ギーシュがポケットから落した香水の瓶を親切心からシエスタが拾いギーシュに渡したらしい。

ギーシュは最初、その瓶は自分のものではないと言ったが、周囲の生徒が瓶の形状からモンモランシーが作る特別な香水であると気付いた。

モンモランシーは実家の領地経営がうまくいっていないため、香水をつくって生徒達に売っていた。

そして、モンモランシーは特別な香水には他の香水を入れる瓶とは違うものを使う。

それはモンモランシーの作った香水を買ったことのある者であれば誰でも知っていることだった。

『ギーシュはモンモランシーと付き合っている』

そう周りにはやし立てた。

ギーシュは最初、モンモランシーとの仲を否定したが、運悪くギーシュを慕っていた一年生のケティが香水の瓶の話の所を聞いてしまった。

自分がギーシュと付き合っていると思っていたケティは、恋人？のギーシュが自分以外の女と付き合っていることにショックを受け、その場でギーシュにビンタを喰らわせギーシュに別れの言葉を言いどこかに行ってしまった。

さらに、ケティとの会話を聞いてしまったモンモランシーがギーシュが自分以外の女に手を出したことを知り激怒。

ケティがビンタを喰らわせた反対の頬にビンタをする。

その後、怒りの収まらないモンモランシーは、メイドから紅茶用に用意された魔法瓶を受け取り熱湯をギーシュの頭からぶっかけた。

余りの熱さにギーシュは叫び声を上げる。

モンモランシーはそんなギーシュを一瞥するとどこかに行ってしまった。

両頬に見事な紅葉をつけて全身から湯気上げるギーシュ。

一瞬広場は静寂が包んだ。

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」

周囲の者はそんなギーシユの様子をじつと見る。

ギーシユはポケットからハンカチを出して顔を拭く。

そして、

「ふう・・・やれやれ美しいバラには

」

なにか意味不明なことを言いだす。

軽く引いている友人達のかける声を無視し、目の前で修羅場を見て固まったシエスタに振りかえると、彼女を責め始めたのだ。

シエスタはひたすらギーシユに頭を下げる。

しかし、シエスタのせいで二股の件がばれてしまい公衆の面前で大恥をかかせられたギーシユにはシエスタの謝罪の声は届かない。

そんなシエスタを助けようとして間にサイトが割り込んだ。

2人はしばらく言い争いをするが売り言葉に買い言葉。

「決闘だ！」

「やってやるうじゃねえか！「こるあ！」

ギーシュVSサイトの決闘が行われることになった。

ぶるぶる震えるシエスタを元気づけようとサイトはいろいろ言っているが、その言葉は彼女には届いていなかった。

シエスタは自分のせいでサイトが殺させてしまおうと思い、顔を青くさせ走り去ってしまった。

そんなシエスタの行動にサイトは動揺するが、ギーシュに指定された広場に向かった。

広場にはギーシュが笑みを浮かべてサイトを待っていた。

広場には多数のギャラリィが集まり、この2人の決闘を見に来ていた。

その中にはアレル達の姿もあった。

「ねえ、止めないの？」

カトレアが不安そうな顔でアレルに言う。

決闘はギーシュがサイトを方的に攻めていた。

サイトはメイジとの戦いをただのケンカと思っていたのだろうか？

ギーシュが魔法で青銅のゴーレムを作り出すと

「汚ねえぞ！」

と大声で叫んだ。

「僕はメイジだ。メイジが魔法を使って何が悪い？」

土のラインのであるギーシュの作りだしたゴーレムはただ拳だけでサイトを攻撃していた。

ラインクラスであれば、学院内では結構優秀な部類に入る。

それにギーシュの実家は土系統の優秀な軍人を多くだす名門グラモン家

ギーシュの父親であるグラモン伯爵はトリステイン軍の元帥でもある。

ギーシュの兄達もトリステイン国軍に所属していたり、領軍に所属している。

当然、軍人である父と兄達を見て育ったギーシュも軍人を目指している。

少しではあるが、父や兄達から訓練をつけてもらっている。

それに対して、サイトはつい先日前までただの学生で一般人。

拳のケンカは何度かしたことはあるが、魔法での戦いなんて知らない。



ギーシュの作ったゴーレムによって、サイトはボロボロにされてゆく。

サイトは攻撃をかわしギーシュに近づこうとするが、自動で動くゴーレムを突破できない。

ついにサイトは地面に足をついてしまう。

サイトの顔はゴーレムに殴られたため真っ赤に腫れ、唇が切れて血が流れている。

「降参したらどうだい？今頭を下げれば、優しい僕は君の無礼を許すよ」

ギーシュはサイトに降参を勧める。

「へ・・・へへ、何・・・言っただよ。ちよつと休憩しただけだ・・・お前の木偶人形の拳、全然たいしたことがないぜ」

「・・・いいだろう・・・その身をもってワルキューレの拳を受けるがいい！」

ギーシュのゴーレムがサイトに襲いかかる。

その時、ギーシュとサイトが決闘をすることをシエスタに教えられたルイズが走ってきたが、彼女が広場につくと、ちょうどサイトに止めの一撃をいれようとするゴーレムの姿が見えた。

(間に合わない！)

ルイズはそう思った。

しかし、サイトに拳を振り上げた状態でギーシュのゴーレムは動きを止めた。

ゴーレムの拳は、ある男のもつ小さなデザートフォークによって止められていた。

「……………ええっ……！？」

「アレル！君が決闘に水を差すのか！？」

ギーシュは自分のゴーレムの拳を動きを止めた者に対して怒鳴る。

「ギーシュ、やり過ぎだぞ。彼は素手で君に戦いを挑んだんだぞ。それに対して君は素手の相手に魔法を使っているんだぞ。公平でないだろ？ サイト、君は僕達メイジが素手で戦うと思っていたのかい？ ただ感情に任せてメイジに挑むなんて無謀すぎる。ただの大馬鹿者だよ」

「ギーシュ。サイトに剣を渡すぐらいかまわないだろ？」

「ああ、平民の牙ぐらい渡したところで問題ないさ」

アレルは、フォークを懐にしまつて、腰に挿してある杖を抜く。

そして、広場の周囲にある鉄分を含んだ土を集め錬金で剣を錬成した。

「サイト。まだヤル気があるならこの剣をとれ」

アレルは剣をサイトの目の前に突き刺す。

「へ・・・へへ、さんきゅー」

サイトはよろよろと立ちあがり地面に突き刺さつた剣に手をかける。

サイトの左手にあるルーンがかすかに光る。

そんなぼろぼろの姿を見て、ルイズは慌ててサイトを止めようとする。

「（何だかんだ言つて、サイトのこと考えているじゃなか）」

アレルはルイズを見てそう思った。

「（さあ、サイト。伝説の使い魔、ガンダールヴの力を見せてもらおう）」

「  
　　だけど・・・下げたくない頭は下げたくないんだ  
！」

サイトの叫び声が聞こえた。

サイトは地面に刺さった剣を勢いよく抜き、天高く掲げた。

彼の左手のルーンが強く光り輝く。

そして、襲いかかってきたギーシュのゴーレムを横なぎに切り裂く。

青銅のゴーレムは上半身と下半身が分かれ、地面に転がる。

そして、サイトは剣をふりかぶりながらギーシュに突進する。

ギーシュはゴーレムがやられたのを見て、すぐに新たなゴーレムを数体作りだすが、それらのゴーレムをサイトは次々に切り裂き、ギーシュに近づく。

最後のゴーレムがサイトによって切り裂かれる。

そして

「まだやるか？」

サイトはギーシュに剣を突きつけた。

「ま、まいった・・・」

ギーシュがそう宣言する。

「サイト！」

ルイズがボロボロのサイトに走り寄る。

「へへへ……勝った……ぜ」

緊張の糸が切れたのか、サイトはルイズに倒れかかる。

「ちよっ！サイト！」

「寝ているだけのようだ」

サイトからいびき声が聞こえる。

誰かが気を利かせて、サイトにレビテーションをかけて浮かせた。

ルイズは浮いた状態のサイトを押しして部屋に運んで行った。

「負けてしまったね」

「ああ……まさか平民に負けてしまうなんて思わなかったよ」

「ギーシュの敗因は魔法を使えない平民をなめてかかったこと。それにゴーレムの使い方かな」

「使い方？」

「ギーシュはゴーレムを使っている時に自分自身は動かなかったじゃないか。例えば、錬金でサイトの足の動きを止めるとかしていた

ら、この勝負はわからなかったかもね。それと、ゴーレムに持たせる武器も考えた方がいいね。例えば剣や盾を持ったゴーレムを前衛に、後衛は槍とか槌をもったゴーレムなんかで上手く攻撃なんてしてみたなら？」

「そうか・・・けど、そんな複雑な動きが僕にできると思っているのかい？」

「別に攻撃が当たれば良いわけじゃないよ。牽制の意味を持たせる要素があってもいいんじゃないかな。とにかく、ギーシユの今後の課題はゴーレムを複数、同時に様々な動きをさせること。ああ、ギーシユは泣かせた女の子の所にいって謝ってこいよ」

「うっ・・・わ、わかってるよ」

「ビンタの1つや2つは覚悟しとけ」

アレルは笑いながら言う。

そして、アレルは剣を握ってからのサイトの動きを思い出す。

「（太刀筋はめっちゃくちゃだけど、かなりの速さだった。あれだけ痛めつけられた身体であの速さ・・・おそらくルーンの影響で一時的に痛みを無くしたんだろうね・・・身体の限界を超えて動くのは危険すぎる・・・せめてある程度身体を鍛えないとね・・・うちの騎士団の新兵と同じ戦闘訓練をすればなかなかの使い手になるんじゃないかな。後、ルイズの爆発魔法との連携も。よし！今度、戦闘訓練でも受けさせてみるか）」

アレルの頭の中では、サイトとルイズをチート化計画が練られてい

た。

それから、アレルがサイトを治療しようとルイズの部屋に行く

「自分の使い魔の面倒ぐらい、自分でやるわ！」

そう言って、アレルを部屋から追い出した。

「少しは使い魔のことを考えるようになった・・・かな？」

ルイズのことだし徹夜でサイトのことを看病するだろうとアレルは予想した。

「後でカトレアに差し入れでも持っていつてもらおうか」

アレルは女子寮から出て行く。

途中、モンモランシーの部屋から何か形容し難い音が響いていたが・・・無視した。

## ギーシュVSサイト(後書き)

感想をお待ちしています。



## 人物設定(仮) (前書き)

主人公の設定を今さらですが書きました。

どんなふうに書けばいいか良くわからないので、だれか教えてください！  
さい！

## 人物設定（仮）

### 人物設定

- ・名前

アレル・ラ・フォン・ランカスター（ド・ゲルマニア）

- ・種族

ハーフエルフ

- ・年齢

16歳

- ・身長

178cm

- ・体重

80kg

- ・容姿（上の上）

エルフの母親譲りの銀髪をポニーテールにしている。  
ゲルマニア皇帝の父親譲りの蒼色の瞳を受け継ぐ。

- ・性格

自分の身内のことを大事にする。

一度、身内と思った者に対してはかなり優しい。

しかし、敵とみなした者には容赦しない。

たまに人外的な事をして周囲を驚かせる一面があったりする。

- ・立場

トリステイン魔法学院2年生

ゲルマニア皇太子

ランカスター侯爵家の子息

天空騎士団団長

4人の妻の夫

一児の父

・魔法

基本的に全系統を使いこなす。

学院では主に『水』系統を中心に使う。

・二つ名

『天帝』、『水帝』

・使い魔

皇竜のステラ

・使用武器

杖、剣、????、????

メインは杖を使うが基本的にほとんどの武器を扱うことができる。

・妻

テファニア・マチルダ・キュルケ・カトレア

・子供

エリカ

家族の休日（前書き）

少しずつ書いたのが完成しました。

どうぞー！

## 家族の休日

ギーシュとサイトの決闘から3日経った。

あの後、ギーシュはシエスタ、モンモランシー、ケティに謝罪した。シエスタは快く許したが、モンモランシーとケティからそれぞれ頬に一発平手を貰った。

次の日、真っ赤な紅葉を両頬につけたギーシュが教室に入ってきたのは笑えた。

三日間、ルイズは授業を休んだ。

その間ルイズは何をしていたかと言うと、決闘でボロボロになったサイトを自分のベットに寝かせ付きつきりで看病をしていた。

そんな妹を心配してカトレアがルイズの所にちよくちよく顔をだした。

他にもサイトが助けたメイドのシエスタが看病に必要なものをルイズの元に届けたりした。

それ以外に特に変わったことはなかった。

今日は虚無の曜日。

学院に通う生徒達にとってこの日は一日中休み。

思い思いに休日過ごす。

アレルもテファ、エリカを連れてトリスティンの城下に来ていた。

親子三人で外に出かけるのはこれが初めて。

他の妻達はどうしているかと言うと、

マチルダはアレルの秘所であるためランカスター領から送られてくる報告書を受け取る為に屋敷に残っている。

カトレアは学院での仕事があった。

この数日間で、新しく学院に住むことになった使い魔達は、主の命令よりカトレアの言うことを必ずと言っていいほど聞く。

カトレアの発するほんわかなオーラに使い魔達が懐いたのだろう。

一部、反抗的な使い魔もいたが、カトレアの後ろにいて大きな口を開けたマンティコアを見て

『ぐるぐるるるるる（主を困らせることしたら・・・食べちゃうわよ）』

(( (ひいー!?) ))

「あらあら?どうしたの?」

『がっ? (なんでもないわ。ねえ?)』

(( (サー・イエッサー!) ))

さっきまで騒いでいた一部の使い魔が急に大人しくなったのにはてなマークを頭につけるカトレアであった。

キュルケは親友のタバサと別の所に出かけている。

キュルケのお腹も最近大きくなり始めているため、あまり遠出をしてほしくないアレルであったが

「これぐらい平気よ」

そう言って、召喚した火竜『フレア』に乗っている。

キュルケのすぐそばにはタバサが必ずいる。

キュルケがフレイムに乗ってどこかに行こうとすると、自分の使い魔のシルフィードを呼んで一緒に行くので、アレルにとっては安心であった。

お礼にアレル特製のケーキをタバサに贈ったのだが……

良く食べると知って10ホールのケーキを用意したが……

「……………もつと……………」

あっという間に用意したケーキ全てをたいらげた。

いったいあの細い身体のどこにあれだけのケーキが入ったのか……

タバサはケーキを完食後に屋敷の夕食も10人前以上食べた……

……本当にどこに入ったんだろう？

テファアの場合

エリカを出産する前は、屋敷の厨房に立って料理をしたりしていた。

しかし、最近のエリカは自分の周りに集まる精霊達を捕まえようと  
して目を離すといなくなってしまう。

赤ん坊だがエリカの行動範囲は意外に広く、広い屋敷内のどこにい  
るかかわからなくなる。

そのたび、テファアとメイド達は屋敷中を走ってエリカを探すのだっ  
た。

出産後、テファアはますますその美しさに磨きがかかった。

慈愛に満ちた微笑み。



優しげな眼差し。

トリステインの城下町には、ある噂が流れた。

アレルの屋敷に出入りしている行商人がたまたまテファアの姿を見た。

商人はテファアの美貌に見とれ、『ランカスター家の屋敷にはこの世の者とは思えない女性がいる』といういろいろな人に話してしまった。

噂はどんどん広がった。

貴族の屋敷のため、直接テファアに面会を希望する者はいなかった。

しかし、テファア宛に宝石やドレス、恋文など大量に送られてきた。

テファアはその一つひとつ丁寧に断りの手紙を書き、贈り物を送り返したが、その手紙をみた者達はさらに激しい愛を詠った文を送ってくるようになってしまった……

さすがに困ってしまったテファアは夫であるアレルに相談。

テファアに恋文が送られてくる話を聞いたアレルは、

『へーそうなんだ……』

にこにこ笑っていたが目がすわっていた……

そして、恋文を送ってきた者達の名をテファアから聞くと、ステラに乗ってどこかに出かけて行った。

それからしばらくしてテファ宛の恋文は届かなくなった。

アレルはいつたい何をしたんだろうか？

それはだれも知らない。

唯一、アレルがどこへ行ったか知っている者と言えば、皇竜のステラだが、カトレア達がステラにその事を尋ねてみるが、その話をした途端ステラは激しく首を横に振り、話すのを拒否した。

・・・本当に何をしたんだ？

まだ幼いエリカがいるので、今回は馬車でトリスタニアに向かった。

ステラは屋敷でお留守番。

自分も行くとステラはアレルの服を啜えて主張したが、帰りにお土産を買ってくることを約束し今回は我慢してもらった。

馬車に揺られて約1時間半。

ランカスター家の紋章が描かれた馬車はトリステインの城下町に  
いた。

トリステインの大通りは馬車が一台通るなら問題ないが、反対方向  
からもう一台馬車が来た場合に道幅がかなりきついで、町の入り  
口付近で馬車を預け徒歩で城下を散策することにした。

アレルは馬車から先に降りると、後からエリカを抱いて降りるテフ  
アに手を差し出した。

その手をとり、テファは馬車から降りた。

その瞬間、周りを歩いていた者は足を止め

警備の兵は動きを止め

馬の手綱を受け取ろうとしていた者は手を止めた。

なぜなら彼等の視線の先には美しい女神がいたからだ。

一瞬、その場だけ時間が止まったようだった。

アレルはテファの手をとり、大通りへと歩き出した。

ようやくテファの姿を見て固まっていた者達が我に戻り動き出した。

しかし、彼等の視線はテファを追っていた。

よそ見をして歩いていた者同士でぶつかったり

ポーとしているところを上司に見つかり叱責されていたり

手綱を受け取りそこない馬に逃げられ追いかける者がいたりした。

城下町に入ったアレル達は周囲の視線を集める。

男達は美少女であるテファを連れて歩いているアレルに嫉妬の視線を

女達は美男子であるアレルの腕をとって歩いているテファに嫉妬の視線を

そんな周囲の視線を受け流しながらアレル達は買い物を楽しむ。

テファに新しい服やエリカに着せる子供服を見に貴族御用達の店に行った。

エリカをテファから受け取り、試着室に入った。

アルビオン産の羊毛を使って編んだ良い布の服が多かった。

どの服を着てもテファの美しさに勝るものはなかった。

ただ、問題だったのが……

どの服もテファの双山を隠しきれなかったことだ……

購入した服の製作にしばらく時間がかかるらしく完成したい屋敷に届けるように言って、アレル達は店を出た。

その後、テファとエリカには喫茶店で待ってもらいアレルは近くの武器屋に行った。

基本的に大通りは王族の馬車も通るのでそれなりに綺麗にしているが、一步大通りから外れた場所に踏み込めば糞尿やゴミなどが散乱し、腐臭がする・・・

そんなところに妻と娘を連れて行くわけにはいかなかったためアレルは一人で来た。

途中、怪しい薬を大量に売っている店を抜け、古ぼけた武器屋の看板が掲げられた店に入る。

店内の壁には様々な武器がかけられ、窓から入る光と店内のランプの明かりでそれらの武器は怪しく光っていた。

「いらっしやいませ、これはこれは、ランカスター様」

「店主、調子はどうだい？」

「この通り、商売あがったりですよ」

「そうなのかい？」

アレルと店主は顔なじみである。

「ええ。最近、アルビオン方面に大量の武器が流れてるみたいでこちらに新しい商品がなかなか来ないですね。それにこの店に来る傭兵の数も少なくなりましたし」

「ふうん。アルビオンにね・・・」

しばらく店主と世間話をしてしていると、扉が開く音がした。

アレルが振り返ると、見知った顔がいた。

「おや、買い物かい？」

「えっ？」

「なんであんたがいるのよ！」

アレルの視線の先にはルイズとサイトがいた。

「僕は剣を扱うからこういいう店にはよく来るんだよ」

ルイズの質問にやんわりと答えるアレル。

「店主！こいつに剣を持たせるから適当にみつくるって」

ルイズはサイトを指差し言う。

「へい」

店主は店の奥に商品をとりに行った。

サイトは部屋中に飾られた武器をきよるきよる見回したり、手にとつてしげしげと見ていた。

かすかにサイトの左手のルーンが光っていた。

しばらくして店主が長さの異なるロングソードを数本持って戻ってきた。

「そちらの方はどうやら素人のようですから、扱いやすい剣ですとこちらになります」

「えっ？どうしてわかるのよ」

「まず、剣の握り方がめちやくちやですし、剣をふる者であれば筋肉の付きかたでだいたい分かります。この商売を長く続けていると客の武器の持ち方や体格ぐらいでわかってしまうんですよ」

「へえー」

サイトは店主が持ってきたロングソードを持って軽く持ち上げてみる。

「うん、確かに使いやすい」

「そう？私はもっと太くて大きい剣がいいわ」

「しかし、これ以上大きい剣ですと素人が扱うには難しいですが」

「もっと大きくて太い剣がいいわ」

「・・・かしこまりました」

店主はそう言って再び店の奥に入っていった。

しばらくして大きな包みを持って戻ってきた。

「こちらはいかがでしょうか」

包みを解くとサイトの身の丈を越えるようなバスターソードが出てきた。

「ランカスター領で採れる良質の鉄を使った逸品で、一太刀でオークを真つ二つにすると言われている剣です」

「おお！すげえ！」

サイトはカウンターに置かれたバスターソードに手を伸ばす。

左手のルーンが輝き、武器の情報がサイトの中に流れる。

「重！」

いくらガンダ ルブのルーンの恩恵を受けているとはいえ、つい先日まで一般人でしかなかったサイトにその剣は重すぎた。

持ち上げても満足に振れそうになかった。

「いくらなんでも無理だね」



サイトがなんとかバスターソードをふり上げようと四苦八苦している姿を見てアレルは言う。

「うっ……」

『はははは。武器の事を何にも知らねえ奴にその剣はふれないぜ』

店内に笑い声が響く。

「店主？」

「ああ、あれは最近手に入れた剣なんですが、あんな感じで、うるさくて……おい！『デル公』！あんま客様に失礼な事を言っているらと鍛冶屋に頼んで溶かしてもらっちゃまうぞ！」

『おお！やってもらおうじゃねえか！こっちは6000年も生きて飽き飽きしてんだ！』

店主の指差した先に、壁に掛けられた一振りの剣があった。

「へえ、意思を持った剣インテリジェンスソードか……珍しいね」

アレルは壁に掛けられたその剣を持ち、軽く振ってみた。

片刃で少し長めの剣でところどころ錆ついているように見えるが、刃毀れ1つない。

『おっ！兄ちゃんなかなかの使い手だね。どうだい？俺を買わねえか？』

「うん。店主、試してみてもいいかい」

「へい。ではこちらへ」

アレルはデルフをもって武器屋の外にある試し切りの鎧が置いてあるところに来た。

その様子をルイズとサイトは見学している。

アレルは鎧の前に立つと鞘から抜くようにデルフを構える。

「あっ！居合だ！」

サイトにとって、アレルがしている構えは日本人であれば知っているものであった。

「居合？」

「俺の世界の剣術だよ。ああゆう風に鞘から剣を抜くように構えるんだよ」

得意げにルイズに説明するサイト。

「それで、何の意味があるの？」

「えーと・・・なんでだろう？」

サイト自身もよくわかっていないようだ。

そして2人の視線はアレルに戻る。

しばらくアレルは居合の構えのまま鎧の前に立っていた。

「……………はっ！」

アレルが声を発する。

しかし、ルイズ達にはアレルが居合の型で動いてないように見えた。

「ふむ」

アレルは構えを解き、ルイズ達の所に戻ってきた。

「ちょっと！なんで斬らないのよ！」

『貴族の嬢ちゃん、鎧を良く見てな』

「何よ、特に変わったところなんて『ガシャン！』…………え？…………」

試し切り用の鎧は胴のところから真つ二つになっていた。

ルイズ達にはアレルが声を出しただけにしか見えなかったが、ルイズ達に見えない速度でアレルは剣を抜き、鎧を斬り、元の構えをとっていたのだ。

「サイト、こいつなかなか良い剣だ。どうだ？」

アレルはサイトにデルフを差し出す。

「お、おう……」

サイトはおそろおそろデルフを持った。

『おい貴族の兄ちゃんが買ってくれるんじゃないのかよ？こんな素人にこのデルフリンガー様が……おめえ『使い手』か……おい！お前、俺様を買え！』

「うん。いいよ」

「ちよつと、そんなボロ剣にするの？」

「いいじゃん。しゃべる剣なんておもしろくて。それに切れ味だつて見たらどう？」

「はあ、ちよつとは見栄えとか考えなさいよ。まあ、あんたがそれでいいんじゃないけど」

デルフは最初に店主が持ってきたロングソードより少し大きめの剣で、今度は問題なくサイトにも扱える。

「うん。少し重いけどあれよりはふれる」

ルイズは店主に代金を支払う。

サイトは店主から鞘に入ったデルフを受け取り背中にデルフを背負

う形で持った。

その後、アレルはルイズ達と別れ、テファとエリカが待つ喫茶店に向かった。

トリスタニアの大通りの一角にある喫茶店。

少し古ぼけた雰囲気のお店だが、そこで出される紅茶とケーキはなかなかおいしい。

その店の大通りの窓に面した席にエリカを抱っこしたテファが座っていた。

赤ん坊を抱いていながらテファの出産前より美しくなった彼女の美貌は道行く人の目を奪い、周囲の男達を引き寄せる。

喫茶店内は、テファの姿をもっと近くで見ようと入ってきた男達で満席状態だった。

テファに声をかけようとチャンスをつかっている男達も何人かいたが、互いに互いを牽制しているのでなかなか彼女に声をかける者がいない。

そんなこんなで、喫茶店内は男達の無言の圧力で重苦しい空気が溜まっていた。

（おい。あの女性を最初に見つけたのは俺なんだから、俺が最初に声をかけるんだ！）

(てめえふざけんじゃねえよ)

(今のうちに・・・)

((((抜け駆けすんな!)))

そんな喫茶店のドアを開く音が響いた。

男達は新しい敵が入ってきたと思いドアの方に目を向けた。

視線の先には男装した貴族の美少女?が立っていた。

そんな店内の男共からの熱い視線を受け流し、アレルはテファ達の座る席に歩いて行った。

「待ったかい？」

「うんうん」

「そうかい。エリカもいい子にしてたかい？」

「あーうー!」

エリカは元気に返事をする。

アレルはそんなエリカの頭を優しく撫でる。

窓から光が差し込み、三人を照らす。

アレルの銀髪とテファとエリカの金髪が光を反射し、きらきら光り輝く。

店内の男達はその幻想的なまでの美しさにため息をつく。

( )( )( う、うつくしい・・・ )( )( )

彼等はその姿をただ見るだけでアレル達に声をかけなかった。

いや声をかけられなかった。

手を伸ばせばすぐ届く距離にありながら、ふれてしまえばそれは消えてしまいそうに思えたからだ。

結局、店内にいた男達はアレル達が出たまで声をかけなかった。

数日後、トリスティンで有名な絵師が描き上げた絵が公開された。

古ぼけた喫茶店の窓際の席に座る金の女神。

金の女神が抱き上げている赤ん坊。

その赤ん坊の頭を優しく撫でる銀の女神。

その絵師は喫茶店の中にいた男達の一人で、テファの姿を見て、ひと目で彼女の絵を描きたいと思い、声をかけようとしたが周囲の男

達に邪魔されて声をかけられなかった。

しかし、喫茶店でテファとエリカ、アレルの三人がそろった時の光景を見て、絵師はすぐさま絵を描き始めた。

絵師は数日間、寝ずに絵を描き続けた。

絵師の腕がとてもよかったからか？それともモデルになった者が良かったのだろうか？

あるいは、その両方だろうか？

絵師の書いた絵は観る人全てを魅了するほどの完成度を誇った。

その完成度の高さにさまざまな貴族達がこの絵を買いたいと絵師に申し出た。

結局、絵師の絵を買ったのはさるゲルマニアの大貴族だったそうだ。

『ふふふふふ……この絵はゲルマニアの宝だ！』

絵師の書いた絵を皇宮のエントランスに飾り高らかに笑うゲルマニア皇帝アルブレヒト三世がいたそうだ……



帰郷したアレル達がこの絵を見るのはまだ先のことだ。

家族の休日（後書き）

デルフはサイトに持たれた時なんて言ったっけ？「担い手」だった  
け？「使い手」だったけ？

だれか教えて〜！

## 使い魔品評会（前書き）

大学の授業と、ゼミの発表関係で更新が遅くなりました。申し訳ありません。

来月からテスト勉強があるので、更新が遅くなります。

## 使い魔品評会

ギトーが昔トリステイン魔法学院で教師をする前に軍にいた頃の話をしようとした時、教室の扉が開いた。

「はあはあ、ミスタ・ギトー！」

「ミスタ・コルベール！今は私の風に関する授業の時間だ！生徒達に風が　　．．．．は？」

ギトーは突然教室に入ってきて自分の授業を中断させたコルベールを叱責しようと顔を向けたが、視線の先にいるコルベールの恰好を見て固まった。

トリステイン魔法学院、火系統担当教師、コルベール

歳は40歳後半

火の魔法を平和利用しようと日夜研究を重ねる日々を過ごしている。

トリステイン魔法学院の変人と言われている。

以前は職員用の宿舎に住んでいたが、コルベールの部屋から異臭騒ぎが何度もあったため、現在は火の塔の隣りに実験室兼家を建てて一人で住んでいる。

異臭騒ぎのためだろうか、学院の比較的若い女性教師から避けられている。

そのため未だ嫁はいない。

つい一年前、オスマン学院長の秘書であるロングビル（マチルダ）に想いを寄せアツクしていたが、彼女がアレルと恋仲となりその年の夏に結婚して学院長秘書を辞めてしまったため、コルベールの恋は終わった。

あれからもともと薄かった頭の毛がさらに薄くなったらしい。

そんな頭の毛が薄いコルベルだが、その薄くなった髪の毛のせいで太陽の光を浴びるとぴかぴか光る。

特に夏の日差しが強い日に外でコルベルを直接見てしまった生徒は……

『目がー！目があ！あ？？ああ』

太陽の光を一点（コルベルの頭上）で反射するため普通に太陽を見る場合に比べて数倍まぶしい。

今まで何人もの教師・生徒がコルベルのハゲ粒子砲の犠牲になったそうだ。

さて、教室に入ってきたコルベルは金髪でくるくるロールのカツラを被って何時ものローブではなく夜後会で着るような派手な服を着ている。

コルベールの髪の毛は元々黒色なので金色のカツラは違和感バリバリだ。

そして彼の被るカツラは誰かの髪色と髪型にそっくりだった……

『なあ……あれってモンモ　　ぶべらっは!?!』

生徒の一人がコルベールの被っているカツラに似た髪形の生徒の名を言おうとした時、目にも止まらぬ速さで拳が放たれ、その生徒は教室の壁にめりこんだ。

その生徒は薄れゆく意識の中で、コルベールのカツラと同じ金色でくるくるロール頭の女子生徒を見た気がした……

それからその生徒は完全に意識を失った。

そんなことが生徒達の席側で起こっていることにコルベールは気付いてないようで、

「ミスタ・ギトー！授業なんてやってる場合じゃありませんぞ！今、王宮から使者が　　」

ギトーの所に歩いたが、着なれない服とカツラのせいでコルベールはギトーの所に行く前に

「ぬおおお!?!」

転んだ。

「あたたたた……」



「ええ、こほん！本日の授業は終わりです。我らがトリステインの  
美しき花、アンリエッタ王女が明日の使い魔品評会を観るため学院  
に参られます。全生徒は正装し姫様を迎える準備をして下さい」

『やったー！』

『アンリエッタ様が学院に！？』

『急いで着替えなきゃ！』

生徒達は歓声を上げ、慌ただしく教室を出て行った。

コルベールも落ちたカツラを拾って教室から出て行った。

コルベールが教室から出て行ってしばらくして……

『げっ！ミスタ・コルベールだ』

『おい！太陽の光が！』

『やばい！総員退避！！』

『ま、まってくれよー！』

『だめだ！間に合わねえ！』

・  
・  
・



・  
・  
『 『 『 『 『 『 『 『 『 『 『 『  
眼があああ？？？ああ！』 『 『 『 『 『 『 『 『 『 『 『

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

今日もトリステインは平和？だった？

魔法学院ではアンリエッタ王女を迎えるための準備を整え、生徒も教師も全員正装し正面入り口に集合してアンリエッタ王女が来るのを待った。

しばらくすると、グリフォンに乗った魔法衛士隊が現れる。

彼等は王女の乗る馬車の安全を確保するために先行していた。

隊長格らしき男の号令で、隊員達は左右に分かれ腰にさした軍杖を構える。

彼等の一系乱れずに行われる動きに思わず生徒達はため息を漏らす。

魔法衛士隊は貴族の子弟・子女のあこがれの存在。

毎年何人もの学院の卒業生が魔法衛士隊になる為の試験を受け、そ

の内の僅か一握りが魔法衛士隊として、入隊し、厳しい訓練を経て、グリフォン隊、マンティコア隊、ヒポグリフ隊のいずれかに配属される。

風系統のスクウェアメイジで強力な風の魔法を操るグリフォン隊の若き隊長。

「閃光」の二つ名をもつジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド

26歳と言う若さで魔法衛士隊隊長になった彼は、羽帽子と凜々しい口髭、長髪の美男子という容姿がいまって貴族の子女達に絶大な人気がある。

そのワルドが現れたことに貴族の子女達の興奮はさらに高まる。

そして、ユニコーンに引かれた王家の紋章入りの馬車が学院に到着した。

その後に護衛や随伴員を乗せた馬車が続く。

馬車が学院の正門を通過するのに合わせて教師が風魔法で花びらを飛ばす。

ワルドが馬車のドアを開ける。

生徒達の歓声上がる

が……

馬車から降りてきた人物を見て歓声は止む。

現れたのはアンリエッタ王女ではなくマザリーニ枢機卿だった。

彼は、ロマリアの枢機卿だったが、先代トリステイン王と親交があり、先王崩御以来、政務のほとんどを彼が担っている。

長年トリステインを支えた重責のため、身体は痩せこけ、まだ40代だが頭髮も髭も真っ白で指も骨ばっており、年齢よりも遙かに老けて見える。

先代教皇の時代には次期教皇と目されていたが、教皇選出会議からの帰国要請を断り、王位が空席だったトリステインに残った。

この事を理由に、貴族達からマザリーニはトリステイン乗っ取りをたくらんでいるなどのあらぬ噂が囁かれたため、民衆や貴族の人気は低く、痩せこけた外見も相まって、「鳥の骨」などと揶揄されている。

自分の親達がマザリーニ枢機卿を快く思っていないことから、それを見て育った子供も彼の事を嫌っている。

何とも言えないような空気が広場に流れる

しかし、マザリーニ枢機卿の後に降りてきた人物を見て、再び歓声が上ががる。

白い純白のドレスを身にまとい、肩の付近まで伸ばした紫色の髪、可憐と表現するのがぴったりな容姿の少女

アンリエッタ・ド・トリステインがトリステイン魔法学院の広場に降りたつた。

アンリエッタは自分の周囲にいる生徒達に手をふり歓声に答える。

歓声を上げる生徒達の後ろでアレル達はその光景を眺めていた。

ルイズとサイトも生徒の列の一番前でアンリエッタ王女一行を見ていた。

ルイズはアンリエッタの横にいるワルドをぼくと見ている。

サイトはトリステインの花と言われるアンリエッタの美しさに目を奪われている。

「それでは、新二年生による使い魔の演技を行います」

例年通りであれば、王族が使い魔の品評会に参加することはなかったため、舞台や観客席などは用意していなかった。

しかし、王族であるアンリエッタがいることで、しっかりとした形で品評会をすることになってしまった。

・ アンリエッタが学院に来ることになったのは、品評会の前の日・

そのため土メイジ達が夜を徹して舞台と観客席を作り上げた。

その一番上の席にアンリエッタは座っていた。

彼女の視線の先には、緊張した顔で広場の中央に設置された舞台上に上る生徒の姿が映る。

ギーシュ。

ジャイアントモールのヴェルダンデと舞台の上で見つめあう……

「ああ、ヴェルダンデ……君のそのつばらな瞳はまるで宝石のようだ  
」

何故だろうか？

ギーシュとモグラの後ろに無数の薔薇が見えるのは……

アンリエッタは表情は変えていないが、この光景を見て若干引いていた。

次に、マリコルヌの使い魔、フクロウのクヴァーシル。

クヴァーシルと感覚共有をしたマルコリヌは

「うん！今日の夕飯は  
」

学院の厨房をのぞかせ、今日の夕飯の献立を舞台の上で発表してい

る・・・

これもアンリエッタを引かせた。

それから何人もの生徒達が発表をした。

そして、今回の品評会の目玉である竜種を召喚した生徒の発表が始まった。

タバサはシルフィードに乗り、空高く飛翔し、魔法で作り上げた小さな氷の粒を空中からまいた。

氷の粒はシルフィードの翼から発生する風によって広範囲に飛散し、太陽の光を受けてきらきら光る。

そして、その中をシルフィードが優雅に飛ぶ。

人々の歓声が上がる。

続いて、キュルケと火竜のフレア。

キュルケは的を何個か用意し、それを空高く飛ばす。

フレアはその的に向けて、ブレスを放つ。

通常の火竜のブレスであれば、的ごと燃やしつくしてしまうが、フレアはブレスを集束させることができる。

集束した炎は通常のブレスより細い。

フレアの放ったブレスは的の真ん中を貫いた。

アレルとステラの番になった。

合図をすると、ステラは空を飛んで舞台まで来た。

アレルがステラを水竜であると説明をする。

観客は初めて見る水竜の姿に驚いていた。

アレルはまず、『ミラーージュ』で自分の分身を作り出す。

そして、全ての分身が空に向け杖を掲げる。

空気中に含まれる水分を凝縮し、大量の水を作り出す。

それを舞台の中央に集める。

集めた水を操り、天まで届くように伸ばす。

そして、その横に待機していたステラにアレルは合図をする。

ステラはこくりと頷き、水の中に飛び込む。

ステラはアレルが作りだした水の道を優雅に登っていく。

太陽にきらきら光る水とステラの鱗がその光に充てられ、碧く輝く。水の道の向きを変え、観客席の目の前を横切るように敷く。

観客の真前をステラが泳ぐ。

そして最後に水を空中に全て集める。

その中にステラがいる。

魔法を解除し、水がはじける。

はじけた水は雨のように降ってくる。

予め観客席付近に展開してあった風の膜が降ってきた水を弾く。

そして空には七色の虹ができた。

観客席から溢れんばかりの拍手が送られる。

アレルは空から降りてきたステラと一緒に観客達にお辞儀をした。

そして、最後にルイズとサイトの番になった。

ルイズが舞台上上がり、その後にデルフを背負ったサイトが続く。

ルイズが自分の召喚したサイトの説明をすると、観客席から笑い声が響く。



それに気を悪くしたのか、サイトが観客達に

『笑っていられるのも今のうちだぜ！俺の剣技を見せてやる！』

そして、サイトは舞台に丸太を立てる。

サイトは丸太の前に立つと、デルフを鞘に収めたまま構える。

武器屋でアレルがデルフを試した時に使った居合の型だ。

品評会でサイトに何をやらせるか考えていた時にルイズは何も思い  
つかなかった。

そこでルイズはアレルがやった居合を品評会でサイトにやらせるこ  
とにした。

サイトも意外と乗り気で、マルトーに頼んで薪用の丸太を何本か貰  
って練習をした。

観客はサイトが見たことがない構えをしたのでしゃべるのを止め、  
舞台に視線を向けた。

サイトは目を瞑り、頭の中でアレルがした動きを思い浮かべる。

左足を少し下げ、身体をやや前に出す

右手をデルフの柄に添え、腰を低くする

チャンスは一度

「……………はあー！」

サイトが目を開き、鞆からデルフを勢いよく抜いた

サイトの様子を見ていたルイズの眼にはサイトの動きとこの前見たアレルの動きが重なって見えた気がした。

### 品評会の結果

一位 アレル（ステラ）

二位 タバサ（シルフィード）

三位 キュルケ（フレア）

・ ・ ・

七位 ルイズ（サイト）

一位になった者には優勝賞品として小さなティアアラとアンリエッタ姫よりお言葉を頂いた。

授与式が終わった後、パーティが開かれた。

王族が参加するパーティに、学院の生徒達はめいめいっぱいおめかしをした。

アレルも持っているタキシードを着て参加した。

アレルが会場に入ると楽しそうに周りの男性と話していた女性生徒達が今まで会話をしていた男そっちのけでアレルの元に集まった。

彼女達は、口々にアレルが品評会で優勝したことを褒める。

アレルは一人ひとりに笑顔で感謝の言葉を返す。

アレルの笑顔に充てられて、女子生徒達は顔を赤くする。

次々にアレルの所に来る女子生徒。

何故彼女達がアレルの所に来るのかというと、

基本的に貴族の子女は、学院を卒業したら実家に帰り、親が選んだ貴族と結婚する。

嫁ぎ先はだいたい実家の貴族としての地位と同じぐらいの家がいいところ。

もしかしたら、それ以下の家の継げない貴族の次男や三男などに嫁ぐはめになる。

家督を継げない男の所に嫁いでしまったら、一生苦勞することは目

に見えている。

後、一年で卒業する三年生や二年生にとって、恋人兼将来の夫を見つけることが急務なのだ。

もし、魔法学院で三年間そのような相手が見つからず卒業してしまつたら……

彼女達は親の決めた相手と結婚することになる。

好きでもない相手と結婚することは彼女達も嫌なのだろう。

彼女達は何としても在学中に、将来性のある男子生徒を恋人兼卒業後の夫にしたいのだ。

パーティには全校生徒が参加するので、まさに会場は彼女達の出会い（狩り）場なのだ。

彼女達が恋人兼将来の夫に相応しい人物であると判断する基準は、

? 実家が裕福

? 家督を継げる長男

? ルックス

? メイジとしての才能

e t c ……

最初の項目で、トリスティン魔法学院に通っている男子生徒のほとんどが消える。

どの男子生徒の実家も借金だらけで、大変なのだ。

そして、家督を継げる人物の所で、さらに少なくなる。

家督を継ぐ長男クラスになると、既に婚約者がいたりする者が大多数なのだ。

ちなみに・・・マルコリヌの家は、貧乏でもなく裕福でもなく普通の家で、彼自身、家督を継げる長男なので、最初の2つの項目は満たしているが、3つ目・・・これで彼に近づく相手がいない・・・

とにかく、パーティでめいっばいおめかしをした貴族の子女達は、将来性のありそうな男子生徒に必死にアピールする。

アレルが既婚者であることは既に学院中に知れ渡っているが、女子生徒達はそんなこと関係ない！とばかりにアレルに群がる。

女子生徒達の間で男を品定めする共通の項目の全てをアレルはクリアしていた。

既婚者であるが、4人もの妻を養うだけの財力を有し、ゲルマニア帝国の人間であるが、侯爵家の長男であり、ルックスは問題ない。

まさに優良物件なのだ。

彼の第5夫人の座を射止めようとパーティ会場は戦場となる。

彼の周りに女子生徒達は顔は笑顔であるが、足元では、他の女子生

徒の足を踏んだり、肘を脇腹に喰らわせたりと、結構過激な事をしている。

さすがにアレルもそんな彼女たちの戦いに顔をひきつらせていたが顔は笑顔のまま、彼女達の誘いをやんわりと断るのであった。

会場の一角にて

「^^^^」

「マ、マルコリヌ？」

「どうせ、僕なんて・・・僕なんて・・・醜い豚なんだ・・・イケメンガブタニナレバイイノ・・・」

（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）

マルコリヌの恐ろしい形相を見たギーシュ達は

「・・・ネエ？キミたち二八カノジョガイルカイ？」

「い、いないぞ」

「ぼ、ぼくもいない」

「・・・いない」

「ふふふ！僕にはモンモランシーと言うバラが」

「「「あつ！ばか！！」」」

「カノジヨガイルイケメンハシネ・・・」

ギーシュの二倍もありそうな巨体で飛び上がったマルコリヌは憎きイケメンギーシュに襲いかかった。

会場の一角でカオスな事が起きていたが、誰も彼等の存在に気がつかない。

いや、気付いているが無視しているのだろう。

そして、パーティは終わりに近づいていった。

## 密談（前書き）

お久しぶりです！

昨日ようやく大学のゼミ合宿が終わりました。

その準備でまともに執筆もできませんでした。申し訳ないです。

久々の執筆なので、うまく書けているかわかりませんがどうぞ！！



## 密談

使い魔品評会の後のパーティも終わり、アレルはさっさと会場を出て愛しい妻達と娘がいる屋敷に帰ろうと正門へ向かっていた。

しかし、アレルはフードをすっぽりとかぶり女子寮に向かう不審な人物を見かけた。

その場ですぐさま捕まえてもよかったのだが、動きが素人くさかったので、魔法で自分の姿を消し、しばらく様子を見ることにした。

女子寮に入った不審者は階段を上り、とある少女の部屋の前に来た。

アレルはその部屋の主が誰なのか良く知っていた。

不審者は周囲に誰もいないことを確認すると、ドアをノックし扉が開くと、部屋の中に素早く入っていった。

アレルは近くの空き部屋に入り、魔法で鏡を作り室内の様子を映し出した。

鏡には、不審者が大きな水晶を填めた杖を出し、部屋の周囲にデイクトマジックとサイレントをかける様子が映し出されていたが、アレルが使っている魔法は精霊を介して使う特殊な魔法のため、不審者が唱えたデイクトマジックに引っかけられることはない。

デイクトマジックに何の反応も出なかったので不審者はフードを脱ぎ自分の顔をルイズ達に晒す。

フードをかぶり、こっそりとルイズの部屋にやって来た不審者は、トリステイン王国の姫であるアンリエッタだった。

カトレアから、アンリエッタとルイズは幼馴染であることを聞いていたので、護衛も付けずに御忍びでルイズに会いに来たのだろうとアレルは推測した。

「はぁ……」

アレルは思わずため息をつく。

一国の姫君が、公爵家の娘であるとはいえ、一介の貴族に会いに来ることは普通考えられないが、

サイトside

「久しぶりね。ルイズ・フランソワーズ」

そう言うと、その人物は被っていたフードを取った。

フードの下に隠れていた顔は、昼間に生徒達から大歓迎を受けたトリステインの姫アンリエッタだった。

「ひ、姫様！？お久しぶりでございます！」

ルイズが慌てて臣下の礼をとる。

「やめてちょうだい、ルイズ・フランソワーズ。私たちお友達じゃない」

アンリエッタは寂しそうな表情を浮かべた。

「いいえ、姫様に無礼な振る舞いはできません」

「幼い頃からのお友達じゃない。貴女にまでそんな風にされてしまったら私は本当に孤独になってしまいますわ」

「姫様……今でも私の事をそのように仰ってくださいるのですか？」

「もちろんよ。私たちはお友達じゃない、ルイズ・フランソワーズ」

二人はそう言って互いに抱き合った。

その様子を見ていた才人は、アンリエッタの演技のような振舞いをぼくと見てた。

「ところで、そちらの方が貴女の使い魔ですね。本日の剣技は素晴らしかったですわ。貴女は昔から変わっていたけど、使い魔も変わっているんですね」

「なあルイズ、おまえ姫様と知り合いなんか？」

「ええ。幼少の頃、遊び相手を務めさせていただいたのよ」

「ふーんそうなんだ」

「でも姫様。このような時間に何故私の部屋にいらしたのですか？」

「あら。久しぶりにお友達に会いに来たのではダメかしら？それに

」

サイトは2人の会話をぼくと聞いていた。

2人の話すことは今の生活のことや昔やっていたはずらを懐かしむことだったが、しばらくすると話の内容が変わった。

アンリエッタは自分がゲルマニアに行くことになったことを伝える。

「ゲルマニアと同盟ですか！？それで何故、姫様があんな野蛮な国へ行かないといけないのですか！？」

「・・・しかたがないことなのよ」

「・・・（ルイズって本当にゲルマニアって国が嫌いなんだな・・・あれ？ルイズの姉ちゃんもゲルマニア貴族のアレルに嫁いだんじゃないかったけ？）」

サイトはそんなことを考えていた。

何故、アンリエッタがゲルマニアに行くことになったか？

それは、今までの負の遺産をなくすためである。

先代トリステイン王はアンリエッタが幼い頃に死去した。

王の亡き後、王妃のマリアンヌが王座に座るべきと言う声が多かったが、マリアンヌは娘のアンリエッタか、アンリエッタの婿になった者が次代トリステイン王になれば良いと考えたのか、自ら王座につかなかった。

王とは絶対的な支配者。

王の言葉は始祖ブリミルの声と同じ。

王の定めを破ることは例え貴族であっても許されない。

しかし、トリステインで貴族達を抑えることが唯一できた王がいなくなったことで、貴族達は好き勝手するようになった。

マザリーニは貴族達の横暴を何とかしようとしたが、一人の人間に出来ることには限界があった。

気付いた時には、国土は欲に塗れた者達によって汚され、守るべき民は虐げられた。

貴族達にとっては、平民も王族も自分達の懐を潤すための道具になっていた。

今回、ゲルマニアと同盟を結ぶのに際し、アンリエッタをゲルマニア皇室に送ることが決まった。

嫁ぐのではなく、送るのだ。

アンリエッタを人質としてゲルマニアに送ることで、ゲルマニアから援助を受けようと貴族達は考えたのだ。

あわよくば、アルブレヒトの寵愛を受け、アンリエッタとの間に子供ができれば万々歳だ。

今のところ、ゲルマニアの次期皇帝となるのは、アルブレヒトの唯一の子供であるアレルであるが、そこにアルブレヒトとアンリエッタの間に子供ができれば、その子供はゲルマニア皇室とトリステイン王家の血を引く子供ということになる。

アレルは第一皇位継承権を持つが始祖の血は流れていない。

対して、アンリエッタの子供は始祖と皇帝の血が流れている。

そのことからアンリエッタの子供が次期皇帝となる可能性はかなり高くなる。

皇帝となったアンリエッタの子供の裏で、トリステインの貴族達がゲルマニアを支配する。

今回の同盟で貴族達の思惑が見え隠れしていた。

既に貴族達の頭の中には、同盟による利益と将来手に入るであろうゲルマニア領土の分配に向いていた。

「そんな・・・そ、そうだ。ゲルマニアと同盟を結ぶなら、アルビオンと同盟を結ぶべきです姫様！アルビオンと同盟を結ぶことができれば姫様がゲルマニアなんて国に行かなくてすみます！」

「それは・・・無理なのです」

「どうしてですか！？あの国には、ハルケギニア最強と謳われる空軍とそれを指揮する素晴らしい皇太子がいらっしゃるではありませんか！」

「ルイズ・・・アルビオン王家は・・・もうすぐ潰えます」

アンリエッタは悲しそうに

「え・・・どうしてですか！？」

「・・・王家に忠誠を誓うはずの貴族達が王家に対し杖を向けました・・・今やハルケギニア最強と言われた空軍はレコンキスタが掌握・・・皇太子・・・ウェールズ様の安否も分かりません・・・」

「そんな・・・」

トリステインとアルビオンは古くから友好関係にある国であった。

ハルケギニア最強と謳われる空中艦隊、竜騎士隊を保持し、歴史上、アルビオンが他国から攻められることはあつたが、浮遊するアルビオンに攻め入る前に、精強な空軍によって敵はアルビオンの土を踏む前に散っていった。

いつしか、空の王国アルビオン、白の国アルビオン、難攻不落の空の王国などと呼ばれるようになった。

しかし、外からの攻撃には強いアルビオンであったが、内からの攻撃には弱かった。

レコンキスタは、長い時間をかけ、アルビオン内部工作をし、王家に不満をもつ貴族達を多数味方に引き入れることに成功した。

アルビオンの田舎で暴動が発生したのをきっかけに、レコンキスタによる反乱が開始された。

暴動鎮圧に向かった艦隊は、潜り込んでいたレコンキスタの構成員によってあっという間に奪われ、王軍の旗は降ろされレコンキスタの旗が掲げられた。

竜騎士隊はエリートが多いと言われるが、爵位を継がない貴族の次男坊や三男坊がなることがおおいので、今回レコンキスタに参加することで、王家打倒後、それぞれ領地を与えられるという条件に多く竜騎士達がレコンキスタに寝返った。

レコンキスタに寝返らず、王家に忠誠を誓った貴族達もいたが、欲に目がくらみレコンキスタとなった者達によって始末された。

始末された者は棺にいれられ、何故か総司令官の部屋に運ばれて、その後、フードをかぶった者達が総司令官の部屋から多数出てきたらしい。

アルビオン王が異変に気付いた時には、レコンキスタ軍は王都の目前に迫っていた。

王都を防衛する空中艦隊と竜騎士隊も守るべき王に刃を向けた。



翼と牙を奪われた王家は僅かに残った兵と貴族と共に敗走した。

まだこの情報は、極秘扱いになっている。

時間と共に民衆にも知れ渡ることだろう。

「そんな……始祖の直系の血筋を引いている王家を倒そうなどと、何て恥知らずな！」

ルイズはその話を聞いて憤慨した。

「もはやアルビオン王家が倒れてしまうのは最早どうしようもないことです……」

「それが姫様のお悩みなさっていることなのですか？」

「いいえ……申し上げにくいのですが、アルビオンのウェールズ様に昔私を送った手紙があるのです。それが、もしレコンキスタの手に渡ってしまえば、今回のゲルマニアとの同盟を解消される可能性が……ああ！始祖ブリミルよ！愚かなこの私をお許してください！」

「姫様……わかりました！私がアルビオンへ赴き、ウェールズ殿下を救出してご覧に入れましょう！」

「はあっ！？お前、自分が何を言っているのかわかっているのか？」

「当然よ。貴族たる者、姫様の願いを無視するわけにはいかないわ！」

ルイズは自信満々に言う。

「戦争しているところに行くんだぞ！そんな所で女のお前に何ができるんだよ！？」

「アルビオンなら昔家族で行ったことがあるから大丈夫よ！」

「旅行するのとはわけがちがうんだぞ！」

「やっぱり駄目だわ。ルイズ、貴女の気持ちは嬉しいけど、そんな危険なところへ行かせるわけにはいかないわ」

「姫様が心を痛めているのを知りながら、それを見過ごすことなど私にはできません。是非、この私にお任せください」

「ルイズ……」

「姫様！このルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールにお任せください！」

「……わかりました。貴女にお願いしますわ」

「ありがたき幸せにございます！」

サイトはルイズとアンリエッタの話を呆然と見ていた。

「使い魔さん。貴方のお名前は？」

「……才人です」

「サイトさんですね。変わったお名前ね。私の大切なお友達をよろし

「くお願いしますね」

アンリエッタはサイトに左手を差し出した。

「いけません姫様！使い魔如きにお手を許すなど！」

「かまいませんよ。私の大切なお友達を守ってくれる騎士なのですから。忠誠には報いるところが無いといけません」

アンリエッタは笑顔で手を差し出していたが、才人は小さくため息をついた。

「お手をしろっ……てことか？」

「違うわよ！簡単に言っちゃえばキスしていいってことよ」

「キ、キス！？マジで？……」

才人はアンリエッタをまじまじと見た。

彼女はサイトに優しく微笑んでいた。

「で、では、失礼をいたしました……（うひょー！こんな美少女と

）

才人は恐る恐るアンリエッタの手をとった。

彼女はその瞬間に更に笑みを強くしたが、次の瞬間には才人にその手を引っ張られて抱き寄せられたので驚愕の表情に変わった。

「……え？」

「いただきます」

才人はアンリエッタのやわらかな唇に自分の唇を重ねた。

アンリエッタは目を大きく見開き、ルイズはその様子を見て驚愕に全身を震わせた。

「あ、ああ……」

唇を離れた瞬間、アンリエッタはその場に崩れ落ちた。

「……あれ？」

「この……この馬鹿犬……」

「な、何だよ！？キスしていいって言うからキスしただけだぜ？」

「忠誠の誓いは手の甲に決まっていますでしょ！唇にする馬鹿がどこにいるのよ……!?」

「……あ……ここに……ここに……」

「……馬鹿……」

・  
・  
・  
・

「ほ、本当に申し訳ありません！」

「ちゅ、忠誠には報いることが必要ですわ。あ、あははは……」

動揺は隠し切れないようだったが、とりあえずは笑って許すという構図が出来上がっていた。

「本当に申し訳ありませんでした！」

「す、すみません」

ルイズは才人と共に深々と土下座をした。

ルイズはサイトの頭を思いっきり押さえつける。

「いいですよ」

すると、突然ドアが開かれ、一人の人物が部屋の中に飛び込んできた。

「姫殿下！そのお役目、このギーシュ・ド・グラモンにもお任せください！」

「ギーシュ！？」

「あんた！？どうしてよ！姫様がサイレントの魔法を  
不可能はない！！」  
『僕に  
……』

ギーシュは得意顔で言った。

そして、

「実は、モンモランシーの部屋に行こうとしたら、怪しい恰好をした人が女子寮に行こうとしたから後をつけたら、君の部屋に入ったじゃないか。何かあるといけないから鍵穴から覗いたら怪しい恰好をした人は姫様で、しかも戦地のアルビオンに行くと言うじゃないか！これほどの名誉ある任務を賜っているではないか。それにしてもサイト！姫殿下の唇を奪うなんて！なんと羨ま　　ごほん！なんと恐れおおいことを！表に出たまえ！」

「やってやるうじゃん！この前の礼もしたいしな！」

サイトはデルフを掴んだ。

「こ、この！馬鹿犬達〜！！」

ルイズの爆発が2人を襲った。

「「わっ〜」」

・  
・  
・  
・  
・

「で、だ。君たち二人だけでは心もとない。だから、この僕！ギーシュ・ド・グラモンも同行させてもらうよ」

ところどころ焦げて、煙が出ているギーシュはバラを持ちながら言った。

「グラモン……と言うと、グラモン元帥の……」

「はい。四男でございます」

「まあ、お父上も勇敢な方ですが、貴方もお父上に負けなくらい勇敢であらせられるのね」

アンリエッタにそう言われて、ギーシュは両手を挙げて喜んだ。

正式な場ではないが、こうしてアンリエッタの顔を直接拝見することもできたので他の生徒たちと比べても大きなアドバンテージを取ったとも言えるのだ。

「ありがとうございます！このギーシュ、必ずや姫様のご要望にお応えしてご覧に入れます！」

「期待しておりますわ。ギーシュ殿」

こうしてギーシュもウェールズ救出隊に加わることとなり、翌朝早くに出発することが決まった。

「まじかよ……」

アンリエッタからの密命を受け嬉しそうなルイズとギーシュを見てサイトは

「まじかよ……」

と漏らした。

そして、2人を見て、自分はすっかりしなければとサイトは強く思った。

サイトside

「………やれやれ」

そんな室内の様子を黙って見ていたアレル。

窓を開け、飛び立ったアレルは夜の闇に消えて行った。



## 密談（後書き）

この後、アレルがアルビオンに行くべきか行かないべきか悩んでます。

## ラ・ロシエール（前書き）

あけましておめでとございます。

三ヶ月以上経過してしまい申し訳ありません。

作者は大学3年生のため、就職活動やテスト勉強やらでめっちゃくちゃ忙しいです。

自分の作品を楽しみにしてくれている方に申し訳ありませんが、今年の7月くらいまで更新ができないかもしれません。

もしかしたら、生き抜きで書いたものを投稿するかもしれません。

## ラ・ロシエール

ラ・ロシエール

トリステイン魔法学院から馬で2日ほどの距離にある港町、その昔、スクウエアクラスのメイジが岩から切り出して作った建物群が立ち並び、世界樹“イグドラシル”の枯れ木をくり抜いた立体型の栈橋に多数の空船を係留できる。

アルビオン以外の国からも空船がやってくる港のため、その空船の積み荷目当てでやってくる商人達や、港で働く平民達でトリステインでも比較的賑わっている町でもある。

その港に停泊している一隻の空船。ゲルマニア船籍を表す旗を掲げた空船に、次々と屈強な男達が積荷を運び込む。空船の中では、いつでも出航できるように各所の点検作業に走る船員たち。

その様子を眺める一人の若い貴族の姿があった。

そこに空船の艦長らしき男がやってきた。

「アレル様、ご命令通り商船への偽装が完了しました。積荷の火の秘薬、医薬品の積込も後少しで完了します」

「ご苦勞、無理を言つてすまないね」

「いえ、これぐらい貴方様に受けた恩に比べれば」

とある船員 side

艦長がランカスター様と何か話しこんでいる。

あの方は、どん底に落ちた我々に生きる希望を与えてくれた方だ。

今、この空船に乗り込んでいる船員は、元はアルビオンの国民だった。

レコンキスタ軍とアルビオン王軍の闘いが日に日に激化するなか、両軍の衝突によって軍人以外の者、つまり私達のような平民の死傷者も増えた。

レコンキスタ軍は、王都を目指して進軍しその途中にある村々で略奪、破壊、放火、虐殺、強姦等を繰り返していた。俺の住んでいた村もその一つだ……

今でも、目を閉じればその時の光景が浮かぶ……

俺は領軍の保有する軍艦に乗って別の村を襲っているレコンキスタ軍の鎮圧に派遣されていた。

しかし、その乗った船はレコンキスタの内通者達によって奪われてしまった。

俺はなんとか逃げ出し、村へ帰ったがそこには故郷の村の姿はなかった。

炎の海に飲み込まれる家屋。

村人の悲鳴と兵士の怒声が飛び交う。

剣を片手に村人を虫けらのように殺すレコンキスタ兵・・・

教会に逃げ込んだ村人達を閉じ込め、生きताまま燃やされた。

村一番の美人と言われた花屋のマリーさんは、レコンキスタ兵に捕まり凌辱された。

農夫のジョアンのかみさんは、産まれたばかりの赤子ともども剣で串刺しにされた。

納屋に隠れていた子供は引きずりだされ、槍で刺殺された。

そこは地獄だった。

そこから俺は無我夢中で自分の家へ向かった。

両親と妻と息子の事が心配だった。

見覚えのある家へ着くと家の扉が開いたままだった。

最悪の光景が頭をよぎった。

心臓の鼓動が早まる。

家の中に入った俺の目には、無惨にも斬り殺された両親の遺骸。

父が母を庇うような形で倒れていた。

両親の顔は苦痛で歪んでいた。

目から涙があふれる。

痛かっただろう・・・

悔しかっただろう・・・

室内を探しても妻と息子の姿はなかった。

父と母は、レコンキスタ兵が村を襲った時に妻と息子を台所の床下に隠したらしい。

両親の遺骸に祈りをささげ、俺は妻の手を握り息子を抱き上げ逃げた。

それから何日も森の中を逃げ回った。

俺達はなんとか別の村へ着くことができた。

その後は、レコンキスタ軍がいないところへ逃げる日々が続いた。

俺達のように逃げ切った者達は、レコンキスタ軍の進軍方向にある村の平民達に、彼等の残虐非道な行いを伝えた。

少しでも彼等の手から逃れようとしたが、空に浮かぶ王国アルビオンに安全な場所などなかった。そのためアルビオンを捨て他国に逃げ出そうと考えるようになった。

俺もその一人だ。

俺は同じ考えをもつ仲間と協力し故郷、故国を捨てた。

そんな俺達が向かった先はゲルマニアだった。

なぜなら、トリスティンやロマリアに行ったとしても、伝統と格式を重んじる国で、俺達のような他国の人間、ましてや平民がまともな職には就けるはずがなかった。

ガリアでは今現在、ジョゼフ王が国内の貴族達を肅清している真つ最中のため、国内の政情が不安定。戦火に巻き込まれ故郷を脱出したアルビオン難民を受け入れてくれるとは思えなかった。

ゲルマニアは他の国とは違い、伝統や身分に関係なく実力があれば、公職に就くことができるし、出世すればそれだけ裕福になれると評判だった。最近では、人の手が今まではいっただけ裕福になれると評人の住まう地を積極的に開拓し、その土地を平民に貸し出しているらしい。

さらに、故郷を捨てゲルマニアにやってきた者達には、国が一定期間衣食住を保障し、その者にあつた仕事を与えてくれるらしい。

俺達はそんなお伽噺のような話しに望みをかけ、ゲルマニアへ向かった……

ゲルマニアに来た俺達は、書類上の手続きといろいろな検査をしてから、ゲルマニアの国民になることができた。

俺達一家は、家族用の住居を与えられ、しばらくの間生活に必要な金を支給された。

妻は近くの工場で、衣服を縫う仕事を始めた。

息子は、同年代の子供達が通う学校というところに通っている。

そして、俺は元軍艦の乗組員ということで、ゲルマニア帝国軍人として国に雇ってもらうことができた。働き出して最初の給金が支払われた時、俺達はその額に驚いた。毎月支払う税金を引いても家族で一カ月、十分暮らせる額が残った。少し貯めれば、様々な嗜好品を買うことができるようになった。皆、今まで以上に働く気力が出た。

この国に来て、家族に笑顔が増えたと俺は思うようになった。

もう前みたいに飢える心配がなくなった。

幻獣や亜人は領軍やギルドに登録した者によって討伐されるので、安心して暮らすことができる。

貴族の横暴もない。

病気になっても、領主が設置した無料の診療所で診察を受けられる。

こんな生活を俺達に与えてくれたこの国に……いや……俺達の生活を豊かにするために動いてくれた皇太子様のお力になりたい。

俺以外にも、この船に乗っている者達は艦長と話をしている人物がゲルマニア皇太子であることを知っており、今回、秘密任務に選ばれたことに誇りに思っている。

さあ、この荷を積み込めば出航準備は終わる。

さあ、懐かしいアルピオンへ行こうじゃないか。



とある船員 side out

最後の荷が積み込まれ貨物室の扉が閉められた。

「対象は報告通りの行動をしていれば、今夜中にラ・ロシエールに着くはずです。それまでゆっくり休んで備えてください。」

「……はっ！」「……」

服装は船員の恰好をしているが、見事な軍隊式の敬礼をアレルに返す。

アレルは貴族のマントを脱ぎ平民が旅をする時などに着るフード付きのマントを被る。

フードを被って顔全体は見えないが、口元から見える部分から見ても、かなりの美少女だとわかる。

そして、アレルは港から数分の距離にある酒場に来た。

酒場の扉を開いて中に入る。

酒場では食事や酒を飲んだりするところになっているため、多くの客でごったがえしになっていた。

皆、思い思いに料理を食べたり、酒を飲んだりしていた。

そこに口元までフードを深く被っているアレルが現れたことに、店内は静かになった。

アレルは、そんな店内の様子を気にせずにかウンターまで来る。

「ワインと軽めの食事をお願いします」

アレルの透き通った綺麗な声が静まりかえった店内に響いた。

「は・・・はい！」

アレルはカウンターから少し離れた席に座り、ワインを飲みながら料理が来るのを待っていた。

食事を運んできた店主に代金とチップを渡し、フォークとナイフを使って料理を綺麗に切って口に運ぶ。

その一つひとつの洗練された仕草に店内の客達はただ見惚れる。

すると、薄汚い鎧を着た傭兵らしき数人の男達がアレルの座る席を囲んだ。

「へへへ・・・よう姉ちゃん、こんなところに一人でいるなんてさびしいだろう？俺達が姉ちゃんの話し相手になってやるよ」

「ああ、美人さんをこんなところに一人にするなんてあぶねなあ。」

「そつだ、俺達が守ってやるよ」

男達は口々にアレルに声をかけ口説く。

しかし、彼らの話にまったく興味が無いアレルは返事を返さず、黙々と料理を食べる。

「お、おい！せっかく俺達が話し相手になってやるつもりで言っているのに無視か！？」

「ちょっと綺麗だからってお高く止まってんじゃねえよ！」

傭兵達から、怒声が飛ぶ。

それでも視線する向けないアレルに傭兵は腕を掴もうと手を伸ばす

「さあ、こっちに来て俺達の相手を　　　　　いつてえー！？」

傭兵の手には先ほどまで彼女が持っていたフォークが突き刺さっていた。

アレルは、店主に向かって

「すみません。新しいフォークをください」

「て、てめえ！」

「もう許さねえ！」

「痛い目にあわねえとわかんねえのか！」

傭兵達は腰にさした剣に手を伸ばす。

手を伸ばした先に、剣の柄はなく、むなしく空をきる。

傭兵達は、慌てて腰に目を向けると、剣が土くれになって床に落ちていた。

「……へ？」

アレルの手には、杖が握られていた。

「メ、メイジだったのか!？」

「……エア・ハンマー」

アレルは杖をふり、傭兵達を店の外へ吹き飛ばした。

「……」

「代わりのフォークはまだですか？」

「は、はい！只今！」

店主は慌てて新しいフォークを渡す。

受けとったフォークを使って何事もなかったように料理を食べる。

食事を終えたアレルは、ラ・ロシエーロで貴族御用達の宿に行き、部屋を一室借りた。

しばらくすると、店の外から鳥っぽい鳴き声、馬の嘶き、そして羽音と共に「きゆる」っと、言う鳴き声が聞こえてきた。

窓から外を覗くと

グリフォンに乗った魔法衛士隊の男に抱えられて降りるルイズ

腰を押さえながら馬から降りるギーシュとサイト

青い風竜からタバサ、モンモランシーが降りてきた。

彼等は乗ってきた幻獣と動物を預けると、店の中に入ってきた。

アレルはルイズの部屋を見た時と同じ鏡を作り出し、風の精霊の力を借り会話の内容を聞く。

グリフォンに乗っていた衛士はワルドと言っらしく、自分とルイズ

は婚約者で同じ部屋で眠るとサイト達に主張した。

それにサイトが猛反対するがワルドはさっさと部屋にルイズを連れて行ってしまった。

他のメンバーはサイトとギーシュが同室で、モンモランシーとタバサが同室となった。

サイトはむすつとした顔で、部屋の中を行ったり来たりしている。

ギーシュは、町の可愛い子に声をかけに外へ出かけた。

タバサは、部屋で黙々と本を読む。

モンモランシーは自慢の金髪のロールをいじくり、思い人が来ないか考えていた。

ワルドとルイズの部屋では、2人が昔話に花を咲かせていた。

そして、ワルドはこの任務が終わったらルイズと結婚したいと彼女に言った。

親の決めた婚約者同士であるが、ルイズはワルドの事をどちらかと言えば、あこがれの人と思っているため、この話をワルドからされた時、驚いた。

ルイズは、自分はまだ学生だから、直ぐには結婚できないとワルドに言った。

ワルドはそんなルイズを優しく諭すように、口説くが、彼の手がルイズの頭に伸びると、ルイズはその手から離れた。

君の中には別の人がいるようだね……

そう言って、ワルドは今回の任務に参加したサイトの名を上げる。

ルイズが動揺したのを見て、なるほど……

とって、ワルドは部屋を出ていった。

その後、部屋の様子を覗こうと、壁をよじ登っていたサイトをルイズが発見。

口論の末、ルイズの爆発魔法がサイトに命中し、下に落ちて行った。  
・  
・

たまたま、その下で平民の女の子を口説いていたギーシュがクツシヨンとなり、サイトは怪我をせずに済んだ。

その晩、ルイズ達が泊っていた宿を傭兵達が襲撃した。

何故か裏口に敵の姿が無かったことから、ワルドはルイズ達に案を出す。

大人数で動くと思立ってしまう。

ギーシュ、タバサ、モンモランシーが宿に残り傭兵達を引きつけ、ワルド、ルイズ、サイトは裏口を使って港に行き、アルビオンに向けて飛び立つこととなった。

タバサは、氷の刃を傭兵達に放ち宿に近づけないようにし

ギーシュは、タバサの魔法を突破した傭兵をワルキューレで牽制し

モンモランシーは、怪我人が出た場合に備え精神力を温存していた。

相手もこちらにメイジがいると分かると、迂闊に近づくことは避け、遠距離から弓による攻撃に戦法を変えた。

モンモランシーは、厨房にあった油を拝借し、魔法で油のにおいを消した。

それをタバサに傭兵達がいる周辺に飛ばしてもらい、ギーシュのワルキューレにランプを持たせ特攻させた。

大量の油に一瞬で火がつき、傭兵達は炎に飲み込まれた。

周囲に、人の焼ける匂いがたちこめギーシュとモンモランシーはその匂いで胃の内容物を戻してしまった。



タバサは、相変わらず無表情で、宿の椅子に腰かけ本を開いていた。

一方、宿から脱出したルイズ達は、空船が停泊する棧橋へ向かう階段を駆け上がっていた。

途中傭兵らしき男数名に襲われ、ワールドが敵を一人ひとり確実に殺していく。

サイトもワールドの元に行こうとしたが、ワールドからルイズの所にいるように言われたので、剣を抜いて立っているだけだった。

サイトは、目の前で闘っている傭兵だけが敵だと思い油断していた。そのため暗闇に隠れていた仮面を被った男がいることに気付けなかった。

仮面の男はサイトとルイズに襲いかかってきた。

ワールドは傭兵達の相手をしているので動けない。

仮面の男は、杖から強力な風のスクウェアスペルの『ライトニング・クラウド』を2人に向けて放った。

サイトはルイズを庇いその魔法の直撃を受けた。

あたりに肉の焦げる匂いがする。

崩れ落ちるサイト

悲鳴を上げるルイズ

ルイズの悲鳴で伏兵の存在に気付いたワルドがエア・ハンマーで、  
仮面の男をふっ飛ばした。

傭兵達を全て始末し、ルイズ達の所に戻ってきたワルドは、痛み  
に呻くサイトに必死に声をかけるルイズの姿を見た。

負傷したサイトに手を貸しながらルイズ達は、空船のあるところ  
まで来た。

ワルドが一隻の空船の艦長と交渉し、アルビオンに行くことになっ  
た。

空船と栈橋をつなぐロープが解かれ、ゆっくりとルイズ達を乗せた  
空船は夜の空に浮かび上がった。

少しずつ夜の闇に消えてゆく空船

その空船をフードを深く被った少年が栈橋から見ていた。

「僕ができるのはここまで・・・後はルイズ、サイト、君達しだい  
だ」

そうつぶやいて、フードの少年は踵を返した。

## ラ・ロシエール(後書き)

誤字がありましたら指摘をお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0725/>

---

ハーフェルフの皇太子

2012年1月1日18時47分発行